

関西学院大学大学院 経済学研究科

博士前期課程 市川文彦研究室

# 修 士 論 文

若年層の価値観・行動様式の変容過程：1977－2013

～＜文化資本＞影響度の史的検討～

学籍番号 4 5 0 1 2 0 0 4 番

氏名 田中 理恵

若年層の価値観・行動様式の変容過程：1977－2013  
～＜文化資本＞影響度の史的検討～

経済学研究科 M2 田中理恵（市川文彦研究室）

金銭的・就労的価値観や余暇行動はマーケティングのみならず、遠因として労働や効用・満足度等のカテゴリーにも影響を及ぼすことは、昨今、行動経済学が盛んであることから伺える。本研究は個人のこれら価値観や余暇行動に、所得や階級などといった社会的要素だけでなく、親から継承されるあるいは教育機関によって与えられる教養などの「文化資本」もこれらに影響しているのではないかと考え、研究テーマとするものである。「文化資本」という言葉を提唱したブルデューはこの概念を、親からの継承、家庭環境・階級に沿って育まれた趣味嗜好としているが、本研究では主に学部別（専攻別）という観点で吟味する。これは学部という区分が、その後の就職業界・収入等々に影響を与えていくファクターであることに違いなく、その人の消費行動を分析する上でも一つの変数となりうるからである。ここではとくに余暇行動や将来の働き方に対する考え方の調査項目から、各学部での専攻領域の違いによって、思考・行動様式も違って来るか探っていく。

第 1 章では、ブルデューの提唱した「文化資本」という概念をもとに、これまでどのような「文化資本」と消費行動を結びつける研究がなされてきたのかを整理する。また、関西学院大学が実施している「カレッジ・コミュニティ調査」と「学生生活実態調査」を材料に、学生がこれまでどのような余暇行動・消費行動を行ってきたのかを、「文化資本」が関連すると思われる「書籍購入費」を中心に追った。その結果、書籍購入費規模が必ずしも家計支持者の収入に規定、制約されない場合もあることがわかり、そこには学部の特色や家庭環境などの「文化資本」の作用が背景にあることも推察された。

その延長線で本研究のメインテーマである、学問専攻領域の違いが、その学部ごとの特色・思考様式・行動様式を学生に影響を与え、学部ごとにその学部らしい特色・思考様式・行動様式を身に着けた学生が形成されていっているという現象を、第 2 章、第 3 章において春学期・秋学期計 2 回にわたって実施した独自アンケート調査で検証した。

第 2 章のアンケート調査の分析では、所得と生活程度認識（階層帰属意識）の相関の強さに明らかな学部間差異が現れた。その理由を解明すべく、18 項目の余暇行動に関する頻度の多さごとに、クラスター分析をし、その傾向の違いを分析した。その結果、「読書」という余暇行動に関して、1 ヶ月 1 回以上の頻度で読書するという学生は、低い所得層でも生活程度認識を高く回答していることが見て取れた。この「読書」は調査した 7 学部の分析を通して見ても、国際学部と文学部以外では低所得層の生活程度認識を上昇させる作

用があった。生活程度を中クラスと回答している低所得層の属する余暇頻度クラスターは、国際学部、文学部、理工学部以外では読書をよくしているのが特徴であり、読書と生活程度認識の相関係数もマイナスの値であるからだ。

第3章では、第2章のアンケート調査結果の中で、最も学部間で違いが生じた所得と生活程度認識の相関の強さの違いについて、最も相関が強かった商学部と最も弱かった国際学部の学生の価値観の違いについて、実施した追加調査の結果を分析した。しかしこの追加調査では、両学部の所得と生活程度認識の相関係数は接近し、文化的な余暇行動の活発さが、生活程度認識を押し上げるという仮説は崩れた。しかし価値観の違いははっきり現れた。

4つの領域の価値志向的精神作用尺度（理論・経済・権力・社会）および達成動機尺度の平均値と家庭の年収、生活程度認識との相関を学部別及び男女別に見てみると、男子の方が強い相関が現れた。また、各価値志向的精神作用の平均値も男子の方が高かった。このことから特に理論分野や経済分野の価値志向尺度で高い値を示すほど、収入と生活程度認識の相関が強まるという仮説が正しいと考えられる。また商学部は男女問わず、4つの価値志向的精神作用や達成動機尺度が互いに相関関係にあり、有意な相関を示した数は商学部の方が断然多かった。

また、4つの領域の価値志向的精神作用尺度の平均値をクラスター分析し、その特徴を見ると、商学部のクラスターの共通点は、高い“権力（他者より優位に立ち指導・支配する）”の値であり、国際学部の各クラスターの共通点は高い“社会（他者を愛し共感し献身する）”の値であった。

しかし、社会的精神作用と権力的精神作用は、個人と社会との相互作用を前提としており、学部別及び男女別それぞれで“権力”と“社会”の相関は強く出た。今回、商学部生と社会学部生は同じ価値観の側面を権力志向として表したか、社会性として表したかで分かれたのではないだろうか。この違いこそが学部としての特色といえるのかもしれない。

また、高校時代に好きだった科目との関連を見ると、商学部は権力と親和性のある美術を、好んでいる。一方の国際学部はクラスターも多く、好きな科目がばらけているところに、余暇行動頻度別クラスター分析でも見られた特色—多趣味でクラスター間の所得差が表れないという特色を示すなど、両学部とも高校時代からある程度現在持つ、学部として表れる特色を備えていることは見受けられる。しかし、多趣味という共通した余暇行動傾向を持ちながら、文学部の1回生の所得と生活程度認識の相関係数（.762、 $p < .00$ ）が文学部2回生以上のそれ（.425、 $p < .00$ ）を大きく上回ったことは、学部入学後に入学以前からもともと持っていた特色・特徴が拡充することがうかがえる。

そして最後に＜付論＞として、従来までの企業家研究に対して、この論文がテーマとした出身学部・専攻やさらに家庭環境・所属階級が学生の行動に与える影響という点を考慮して検討していく必要性を提唱する。

# 若年層の価値観・行動様式の変容過程：1977－2013

## ～＜文化資本＞影響度の史的検討～

### 目次

第1章 「文化資本」の影響と消費行動	1
本論文のテーマと課題	1
第1節 「文化資本」とは	1
第2節 関学生における「文化資本」の影響度の検出	5
小括	17
 第2章 生活意識と行動様式の学部間特性の検討	 19
第1節 価値観と行動様式に関する学部間特性の調査	19
第2節 「行動様式」及び「将来の働き方」の分析	27
第3節 「行動様式」の国際比較：ポーランド・ウクライナ	45
第4節 生活程度認識および階層帰属意識に関する先行研究	50
 第3章 所得水準と生活程度自己認識との乖離を巡って	 53
第1節 専攻領域別の価値観差異の動向	53
第2節 野心と幸福感	65
第3節 科目選好と価値観の学部間比較	67
小括	69
 付論：企業家出自の経営史的分析への、「文化資本」概念の適用について	 71
 結論	 73
謝辞	77
参考文献	79
付録（アンケート用紙）	81

## 若年層の価値観・行動様式の変容過程：1977－2013

### ～＜文化資本＞影響度の史的検討～

#### 第1章 「文化資本」の影響と消費行動

##### 本論文のテーマと課題

金銭的・就労的価値観や余暇行動はマーケティングのみならず、遠因として労働や効用・満足度等のカテゴリーにも影響を及ぼすことは、昨今行動経済学が盛んであることから伺える。本研究は個人のこれら価値観や余暇行動に、所得や階級などといった社会的要素だけでなく、親から継承されるあるいは教育機関によって与えられる教養などの「文化資本」もこれらに影響しているのではないかと考え、研究テーマとするものである。「文化資本」という言葉を提唱したブルデューはこの概念を、親からの継承、家庭環境・階級に沿って育まれた趣味嗜好としているが、本研究では主に学部別（専攻別）という観点で吟味する。これは学部という区分が、その後の就職業界・収入等々に影響を与えていくファクターであることに違いなく、その人の消費行動を分析する上でも一つの変数となりうると考えるからである。ここではとくに余暇行動や将来の働き方に対する考え方の調査項目から、各学部での専攻領域の違いによって、思考・行動様式も違って来るか探っていく。

第1章では「文化資本」という概念をもとに、これまでどのような「文化資本」と消費行動を結びつける研究がなされてきたのかを整理する。また、関西学院大学が実施している「カレッジ・コミュニティ調査」と「学生生活実態調査」を材料に、各学部の学生がそれぞれどのような余暇行動・消費行動を行ってきたのかを、「文化資本」が関連すると思われる項目を中心に追っていきたい。

その延長線で本研究のメインテーマである、学問専攻領域の違いが、その学部ごとの特色・思考様式・行動様式を学生に与え、学部ごとにその学部らしい特色・思考様式・行動様式を身に着けた学生が形成されていっているという現象を、第2章、第3章で検証していく執筆者の独自アンケート調査で明らかにしていきたい。

ゆえに第2章では、第1章で学部ごとに表れた消費行動・余暇行動の傾向の違いを、独自アンケート調査を行うことによって、家庭収入やバイト収入、親の出身学部など様々な変数でもっての説明を試みる。またポーランド・ウクライナの学生にも余暇行動についてアンケート調査を行っており、日本との社会環境の違いも鑑みていくつかの考察を加えて

いる。

第3章では、第2章のアンケート調査結果の中で、最も学部間で違いが生じた所得と生活程度認識の相関の強さの違いについて、とくに乖離が大きかった商学部と国際学部について行った追加調査の結果を分析する。この追加調査では、おもに両学部生の価値観について詳しく質問している。

そして最後に＜付論＞として、従来までの企業家研究に対して、この論文がテーマとした出身学部・専攻やさらに家庭環境・所属階級が学生に与える影響という点を考慮して検討していく必要性を提唱する。

## 第1節 「文化資本」とは

この「文化資本」という言葉はフランスの社会学者ピエール・ブルデューによって提唱された。ブルデュー<sup>1</sup>によると、階級構造の再生産には、社会構造が個人のうちに内包された一定のパターンにしたがった行動をとらせる精神的傾向であるハビトゥスが作用している。この階級のハビトゥスは経済力だけでなく、趣味や美的性向も含む。そして階級的に分化したそれぞれのハビトゥスは親から子へと継承され、特に意識されることも無く今ある社会構造に従い、階級所属が維持・存続されていく。この一連の流れの中で、「文化資本」とはその家庭のもつ経済力や社会的地位に付随する、あるいはそれに見合うと社会的に認知されている権威・威光が伴っている芸術・音楽・教養・教育などの資本のことである。

そして教育制度の利用者である学生は、出身階層に由来する長期間にわたる一連の過去の獲得物（経済力、学科の制約、文化環境など）の影響を強く受けている社会的カテゴリーである。また、ブルデューによるフランスでの70年代からの実証研究では、就学期間を通して、なかでも学歴においての大きな分岐点になるところで、その影響は強く出るとしていた。それは、勉強をする費用がかかるので、世襲財産が無いと就けない職業があるという点や、教育課程とそこから得られる就職口についての情報の不平等が存在する。また、古典語（ラテン語等）の得点がその後の進路に影響するという様な、職業・学科の選

---

<sup>1</sup> ピエール・ブルデュー、『ディクタンクシオンⅠ、Ⅱ』（石井洋二郎訳）、1979/1990年、藤原書店、同、ジャン＝クロード・パスロン、『遺産相続者たち』（戸田清 他訳）、1964/1997年、藤原書店

括にある社会的環境に結びつける文化モデル、そして学校を支配するモデルや規範、価値観への適応を促す社会的に条件付けられた傾向などを挙げている。

また、芸術をめぐる差異についても言及している。芸術的慣習行動への方向付けは、その出身階級・家庭における「文化」の継承が表れているということである。文化的特権は劇場や美術館、コンサートなどを定期的に訪れることによる芸術への親しみが問題になる時明確に現れる。出身階層の高い学生ほど、伝統的なクラシックだけでなく、「大衆芸術」と見なされるジャンルにも幅広い知識を持ち、出身階層が下の学生よりも芸術全般に対する興味関心を強く持っているという結果が出ていた。

また同等の知識を持っていたとしても、同じ姿勢、同じ価値観を持っているとは限らない。この微妙な差異は特に演劇（絵画や音楽と違い学校で教えられる文化と学校外で獲得される自由教養の両方に演劇は属するため、行動を方向付ける価値観が階層によって違う。）にも言える。学校でしかその知識を得られない者は、学校の規則や学習作業の排他的な影響を受けているだろうというのだ。

有馬昌宏<sup>2</sup>は、映画・演劇・文化施設等入場料への需要構造を、「全国消費実態調査」のデータを線形回帰モデルのパラメータ推定にかけることによって分析している。それによると、文化施設の利用は、世帯の居住する地域や都市の規模・階級から大きな影響を受ける。それは単純に都市部と地方における施設の立地数の違いでもあるし、一つの都市の中にもいわゆる、高級住宅地と呼ばれるようなエリアがあり、それに左右されてしまうということであった。

職業から見ると、国家・地方公務・民間職員、自由業のいわゆる事務的・管理的・専門的職業従事者の世帯が相対的に多くの金額を支出していた。また、給料や家賃、ローンの関連から見ると、可処分所得の違いが支出額に影響を及ぼしている。

また、「社会生活基本調査」を使って、余暇行動の行動者率に関して、加齢効果・時代効果・世代効果を測るべく重回帰分析も行っている。

それによると、クラシック音楽鑑賞は教育階級による違いが明確で、教育効果が有意。世代が若いほど特に女性で行動者率は低い。そして、ポピュラー音楽・歌謡曲鑑賞は教育効果が見られ、世代が新しいほど行動者率が特に男性で低下。加齢効果は、女性は出産・育児後行動者率が増加に転じる。しかし時代効果つまり経年変化はほとんどなかった。性

---

<sup>2</sup> 有馬昌宏 「消費支出と行動実態から見た芸術・文化の需要構造」、『季刊家計経済研究』、(2008) 夏号、p 79

別や年齢、学歴によってクラシック音楽鑑賞の行動者率は変わる。。

一方の演芸・演劇・舞踊鑑賞は教育効果が存在し、とくに女性で加齢と共に行動者率が上昇していく。そして映画鑑賞は教育効果が特に顕著で、男女共に加齢と共に行動者率が低下していく。

色川卓男は、『趣味・娯楽と社会階層メカニズム—ブルデュー的視角を利用して—』で、主に有配偶者と無配偶者間における、所得と学歴が与える消費行動への影響・相関の違いについて分析している<sup>3</sup>。調査対象が25～35歳の男女という若い世代であるので、預貯金などのストックは考慮せず所得のみを「経済資本」、また「文化資本」として学歴と有配偶・無配偶を設定している。そして娯楽項目それぞれにおいて経済資本や学歴という社会的地位空間によって、娯楽選好に差異が生じていることを明らかにした。具体的には3形態あり、1つ目は所得と学歴双方と相関がある場合で、有配偶では国内外旅行と読書、映画鑑賞とテニスがこれにあたり、無配偶では美術鑑賞と音楽鑑賞がこれにあたる。そしてパチンコは有配偶にてマイナスの相関である。2つ目は、所得のみと相関がある場合で、有配偶は洋裁、ドライブ、美術鑑賞と相関があり、無配偶はない。3つ目は学歴のみと相関がある場合で、有配偶は菓子作り、音楽鑑賞、水泳、サッカー観戦、華道、スキーで相関があり、カラオケとはマイナスの相関がある。一方の無配偶では、カラオケ、スキー、映画鑑賞、演劇・舞踊鑑賞、バレーボール、菓子作りで相関があり、パチンコと競馬でマイナスの相関がある。このことから、所得が高いなら高いなりに、学歴が高いのならそれ相応のというような、その社会的地位空間と結びつく「象徴的抑圧価値」（身に着けていなければならない性向、価値観、振る舞いなど）が存在し、それが同調査にてそのような回答を導き出しているというのだ。そしてその「象徴的抑圧価値」はハビトゥス（行動様式）なので、無意識に行われており、個々人は抑圧的イメージを抱いていない。

それでは、関西学院大学の学生はどのような余暇行動を行っているのだろうか。第2節では、各学部生が自分の学部の特徴をどの様に見ているのか、実用性・学究性・共同性の3点から『カレッジ・コミュニティ調査』を使って探っていく。その後、『学生生活実態調査』を使用し、学生たちの余暇行動を、学歴効果は測れないので、支出額と家庭収入の面から探っていく。

---

<sup>3</sup> 色川卓男 「趣味・娯楽と社会階層メカニズム—ブルデュー的視角を利用して—」、『消費生活に関するパネル調査』、(財)家計経済研究所、1997、p247 - 284



## 第2節 関学生における「文化資本」の影響度の検出

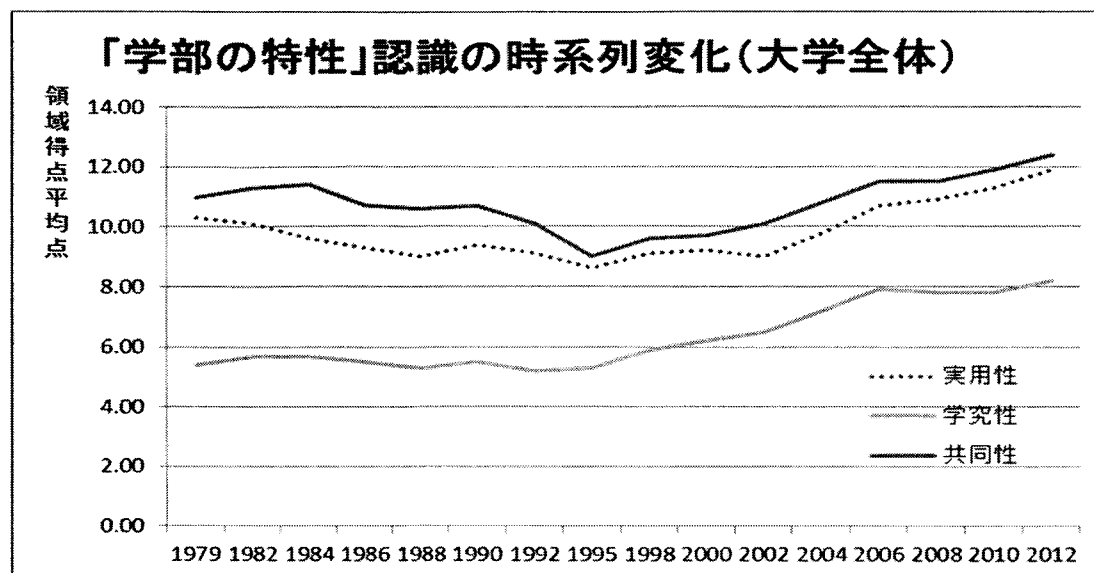
この第2節では、『カレッジ・コミュニティ調査』において、91年から行われている、各学部の実用性や学究性などのイメージを学生がどのように持っているのかを調べた「大学環境調査」<sup>4</sup>を追ってみていく。「大学環境調査」ではカリフォルニア大学のペイス教授（C. Robert Pace, 1963）が考案した「College and University Environment Scales (CUES)」を採用しており、それを立教大学学生相談研究所および学生部が日本語に翻訳し用いている。実用性（Practicality）、学究性（Scholarship）、共同性（Community）、妥当性（Propriety）、意識性（Awareness）の5つの領域によって、その大学の特徴をつかむことができるというものである。実用性を問う項目は、大学の実際的、機能的側面を見るものであり、コミュニケーション、学生の地位、教育体制、実用的利点等に関する設問で成り立っている。学究性を問う項目は学問的意欲、学問への関心、教育・研究の実態、知的関心あるいは思想的関心などに関連する設問が主となっている。共同性を問う項目では、共同意識に関連した人間関係、あるいは親睦、グループ意識、帰属感などを探る設問が主である。妥当性は、大学らしいと思われること、例えば個人並びに団体生活のルール、社会や他人への配慮に関する関心等を探る設問である。意識性では、自己存在の意味の探求、あるいは政治的関心、創造性・芸術的関心等に関連する質問項目である。この『カレッジ・コミュニティ調査』では第1回及び2回（1976年、1979年）では5項目で調査が行われたが、3回目以降（1982年）は実用性、学究性、共同性の3つのみで調査が行われている。

以上の3点の領域の質問群に対する回答の得点の大学全体での平均点を、時系列に1979年から2012年まで載せたのが以下の図である。共同性が常に一番高く、実用性がそれに近づいたり離れたりを繰り返している。また学究性が徐々に上昇してきていることがわかる。

---

<sup>4</sup> 『カレッジ・コミュニティ調査報告書』、関西学院大学総合教育研究室、1991年～2012年

図 1



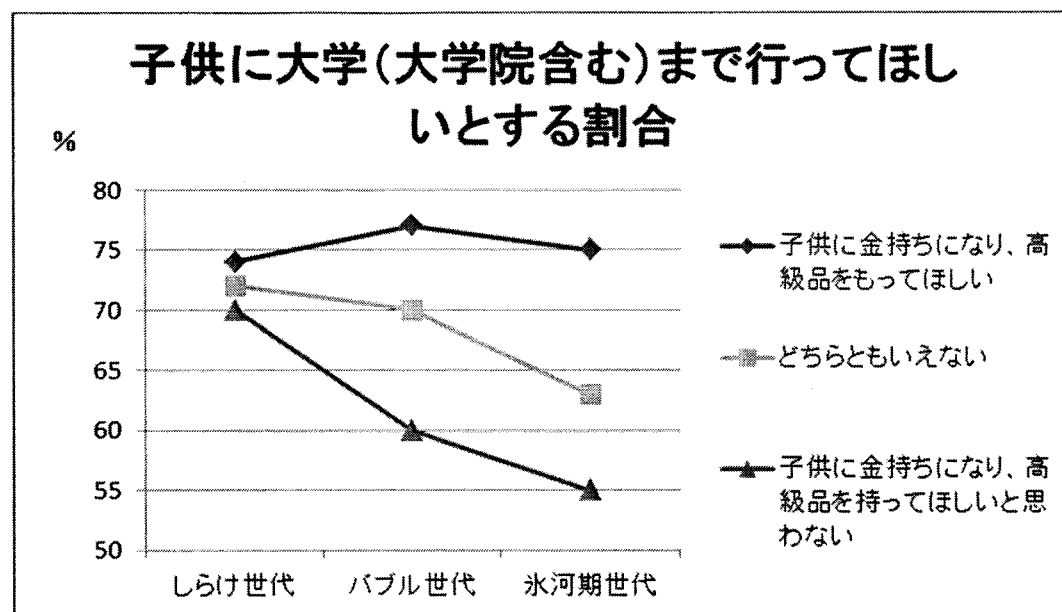
『カレッジ・コミュニティ調査報告書 2012』から作成、関西学院大学総合教育研究室

このグラフで目を引く変化は、80年代の共同性と実用性の緩やかな低下と、1995年あたりでの急落と2000年初めごろまでの停滞、そしてその後の2012年までの3つの数値の上昇である。就職氷河期はおおよそ1993年～2002年前後までを言うが、その就職の厳しさから大学の学部での勉強・活動に辛い評価が始まったのではないだろうか。『カレッジ・コミュニティ調査』のデータによると、進学動機の質問では、「教養や視野の拡大」や「青春を楽しむ」が上位に来て、「就職に有利」は1990年後半からは減少傾向にある。大学という学歴が就職活動では効かない状況の中で、大学での専門的な知識等に以前ほどの価値を学生が見いだせなくなったことが90年代後半から2000年代初めまでの、横ばいへの推移に表れている可能性がある。

ちなみにこのいわゆる就職氷河期に大学生であった人々は、現在自分の子供の大学進学についてどう考えているのだろうか。三菱総合研究所が2012年に全国20歳以上64歳以下の男女に対して行ったインターネット調査で、若い世代ほど大学に「所得機会」を期待していないことが分かった。その調査では、1950～64年生まれで現在49～63歳をしらけ世代（ $n=1613$ ）、1965～69年生まれの現在44～48歳をバブル世代（ $n=1734$ ）、そして1970～86年生まれで現在27～43歳を氷河期世代（ $n=5575$ ）と名付けている。末子が15歳以下あるいは5年以内に子供をもうける予定の人を対象として、子供を行かせたい学校段階を質問したところ、大学（大学院含む）と回答した割合は、しらけ世代は72%、バブ

ル世代 69%、氷河期世代 64%となった。そして氷河期世代のうち、「子供に金持ちになり、高級品を持ってほしいと思わない」と回答した人は、子供を特に大学まで行かせなくても良いと考えていることが以下の図で分かる。この世代は自身の大学時代の経験から、大学が将来の良い就業機会や所得の向上に、必ずしも繋がることはないと考えている者が少なくないと解釈される。

図 2

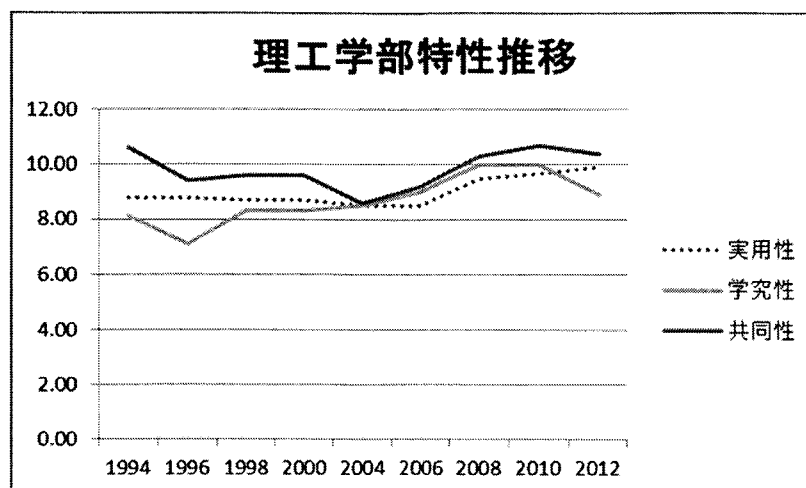


『3万人調査で読み解く日本の生活者市場』三菱総合研究所、日本経済新聞社、2012年、p 99

「学部の特性」認識の時系列変化（大学全体）」に戻るが、その後2000年初めから現在に至るまで、3指標とも緩やかに上昇してきているが、この理由は何なのだろうか。その理由の一つはおそらく、総合政策学部設立、商学部での社会人のMBAコース設立や、文学部でコンピュータ科目が必修となったことなど、時代の流れに沿った学内での新領域の新設やより実務的な科目の増加などが挙げられるだろう。

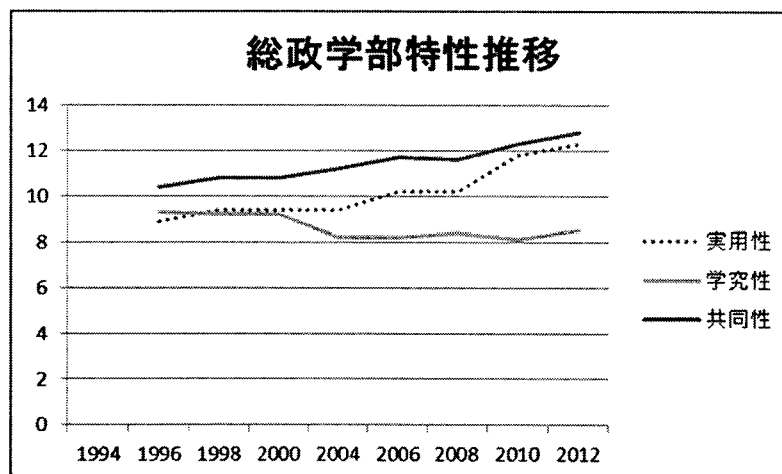
これを1994年から作成した各学部ごとの図で見ると、文学部・社会学部・商学部・経済学部ではこの大学全体の図と同じような軌跡を描いており、1998年には実用性が共同性に1ポイント以内で迫る勢いであったが、その後両者はかい離し、近年また接近してきている。これらの学部では、学問的な興味関心の追及より、ゼミやサークル・部活などでの集団での活動に重きを置いた学生生活を送っていることがうかがえる。以下には例外的な学部を挙げた。人間福祉学部と国際学部は近年創設された新しい学部でデータが揃わないので、ここでは考察していない。

図 3



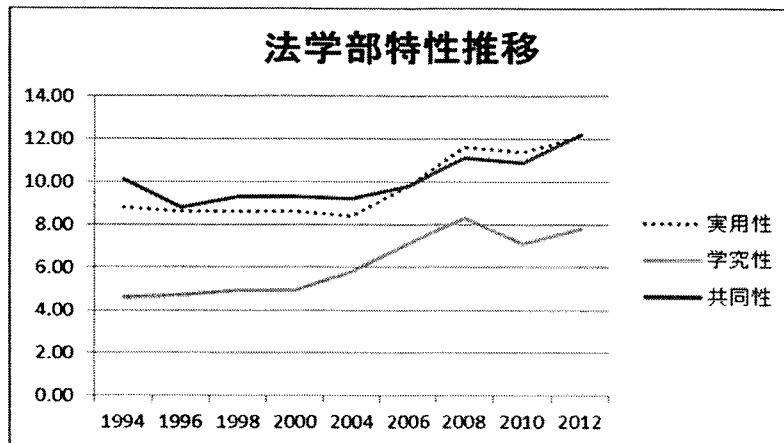
理工学部という性格を考えれば、この実用性・学究性・共同性が同じような数値で推移しているのも当然であろう。

図 4



総合政策学部は創設された当初は、優秀で意欲のある学生がそろっていたが、年を経るごとに学生数が増え、また、学生の学問への関心の希薄化が、この学究性の低下にあるのだろうか。

図 5



2006 年ごろから実用性が共同性を上回り始めたことが、他学部にはない変化である。これは 2006 年から新司法試験が開始されたことや、法律関係業務の人気の高まったというのではないと考える。長引く不況を受けて、公務員が就職先として人気が高まり、その上で公務員試験に法律の知識が有利に働くから、という理由が大きいと推察する。

では次に『学生生活実態調査』の中から「文化資本」に関連すると思われる、「書籍購入費（1ヶ月当たり）」、「娯楽教養費」と「家庭収入」の学部別年次推移を見ていく。77 年は 90 年代の調査とは費用の金額の区切りが違い、グラフに加えられないので別途説明していく。まず書籍購入費だが、77 年においては 3000 円以下が各学部で断然に多かった。95 年になると、法・経済・商学では 2000 円以上 6000 円以下が多くなってくる。そして 99 年には 1 ヶ月の間に全く本を買わないという人も出てくるが、6000 円以下の各階級の差が小さくなってくる。そのなかで特に購入費の変動があった以下の学部を見ていく。

図 6

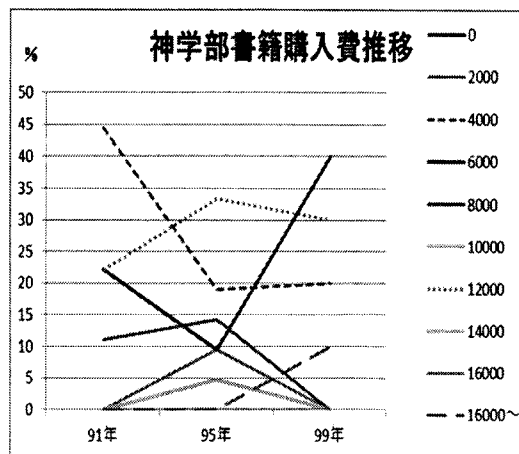
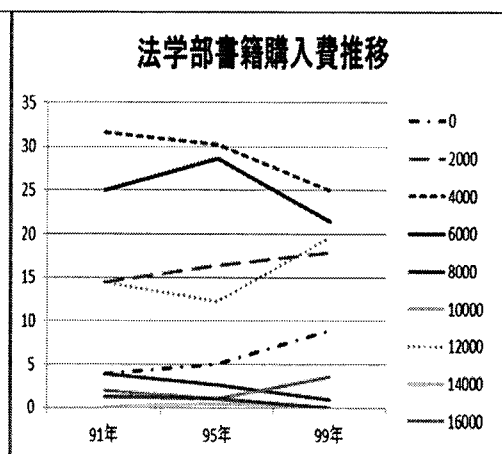


図 7

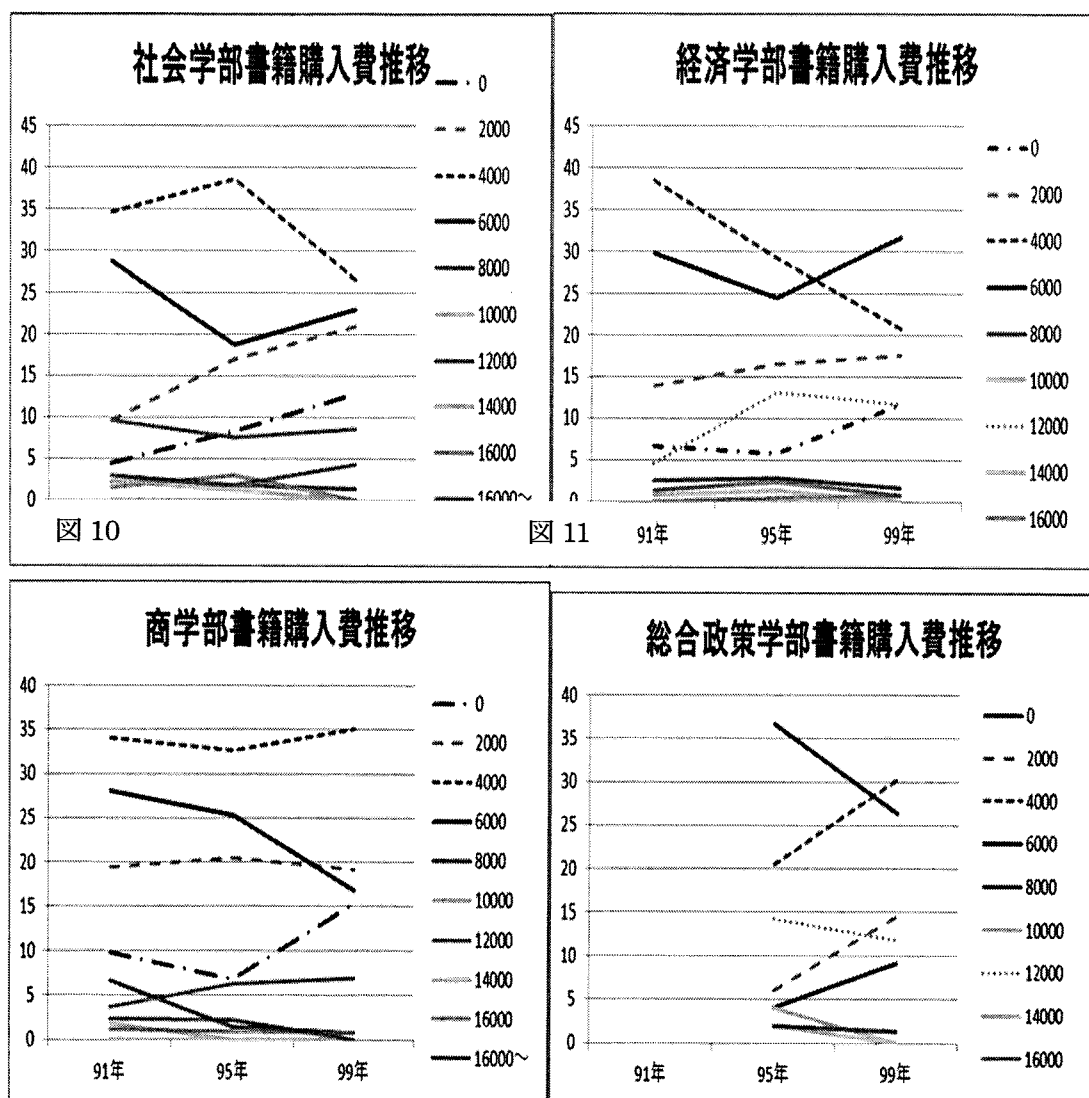


『学生生活実態調査』より作成（縦軸は人数のパーセント）

神学部は書籍に多くの金額を使う傾向にあるようだが、99年には6000円程度に収める他学部と同じ傾向になっている。しかしそれでも、91年と比較して99年の方が購入費の平均値が高くなっているのは、神学部と経済学部だけである。その経済学部も95年と比べると、書籍を購入しない層が増加して99年の購入費の平均値は下回っている。法学部は他学部と比較するとどの年も2位か3位の購入費平均値であり、常に4500円前後で安定して推移している。

図 8

図 9

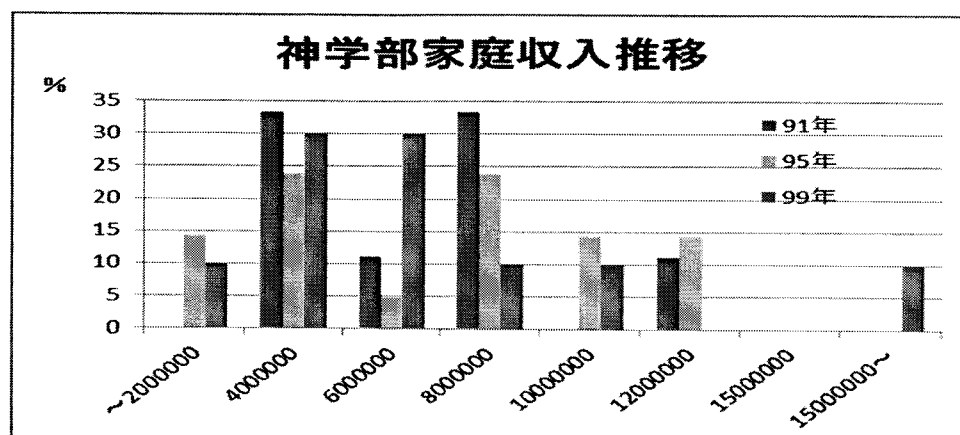


その他各学部を見ると、全体的に購入金額は減少傾向にあることが分かる。社会学部、商学部は95年に一度購入費平均値が落ち込む。特に商学部は購入費平均値の落ち込みが最も大きく、91年には4300円であったのが、95年には3700円になり、99年には2900円となった。全く購入しない者が6000円まででおさめる者の割合と同じ15%近くになり、

残りの者のうち 35%は 4000 円までで購入費をおさめるという傾向になったからである。総合政策学部は 6000 円までの購入層が減少し、2000 円までや 4000 円まで、0 円の購入層が増加することで 99 年の購入費平均値が下がった。

これらの書籍購入金額の学部間の傾向の違いは家庭収入と何らかの影響があるのだろうか。次に各学部家庭収入を見ていく。

図 12



神学部が有してきた聖職者家庭出身者が多かったという性格からか、他学部と比べると、200 万円から 400 万円の収入層が多い。99 年には 200 万から 600 万円の範囲を中心に正規分布するといえるが、91 年、95 年における、200 万から 400 万円の層と 600 万から 800 万円の層に分かれてしまう現象はなぜなのだろうか。家計支持者の職業についてのデータがないので、確かなことは言えないが、徐々に聖職者になる予定ではない一般家庭の学生も実は入学してきていたのではないだろうか。

一方の文学部はどの年も大きな変化はなく、600 万から 1200 万のあたりに集中している。社会学部は最も回答者数が多い所得層が 600 万から 800 万の層から隔年ごとに一つ上の層へ移っていき、1999 年には 1000 万から 1200 万の層へと移動している。大学全体でいうとこの社会学部と商学部は安定して、学生が高所得層出身の学部であることがわかる。法学部の所得層の分布傾向は文学部と似ているが、法学部の方が年ごとの差が大きい。実際 91 年から段々平均所得が落ちてきている。

図 13

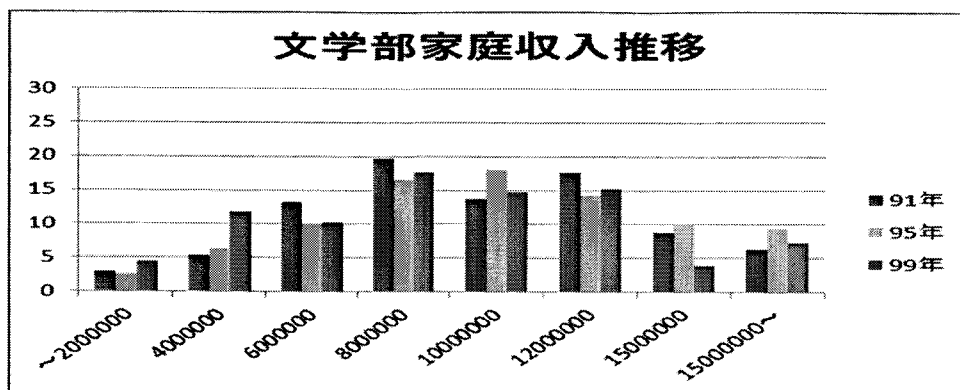


図 14

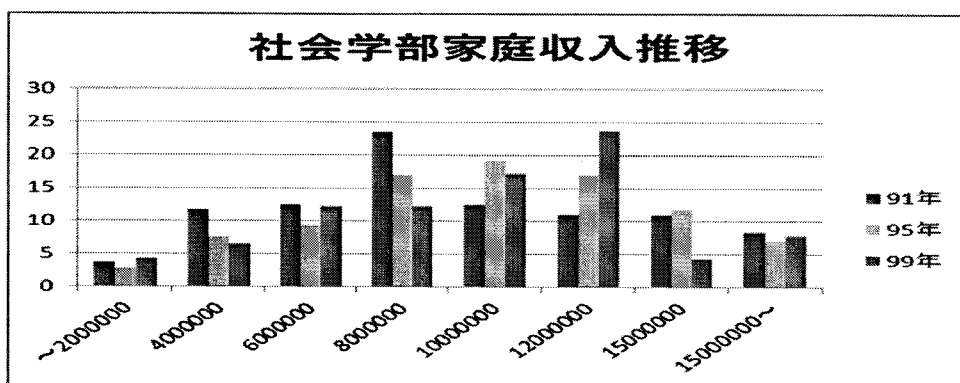


図 15

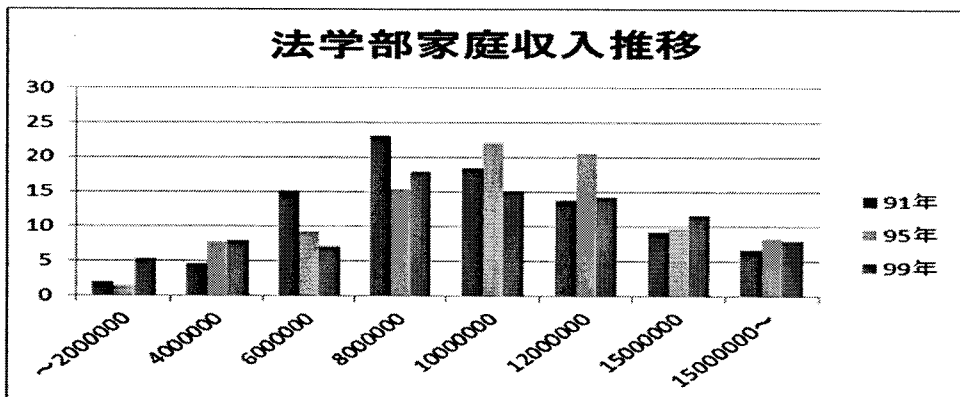




図 16

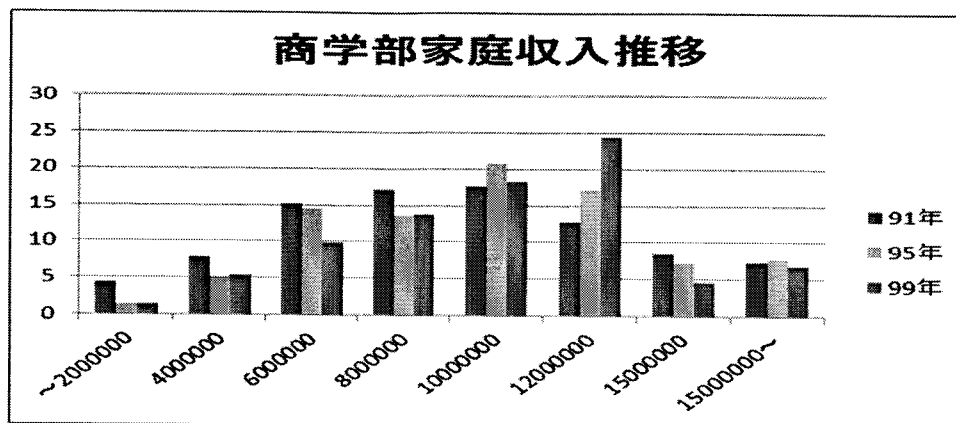


図 17

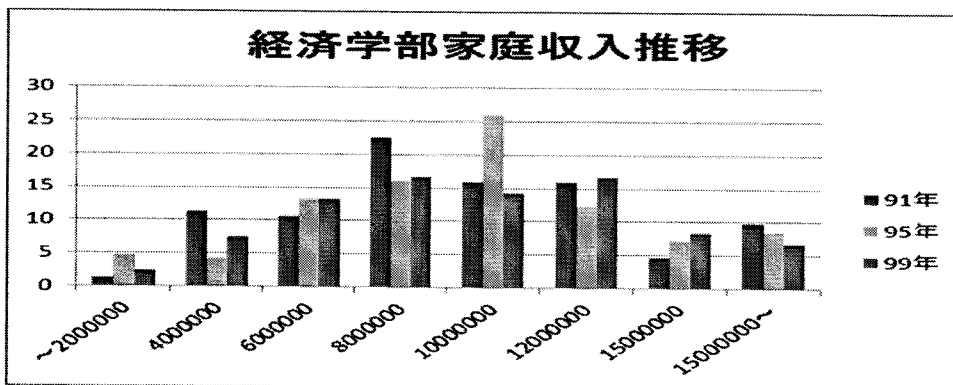
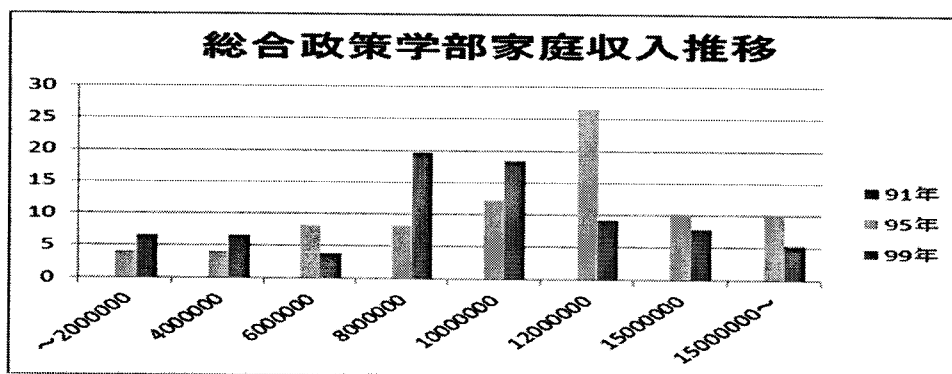


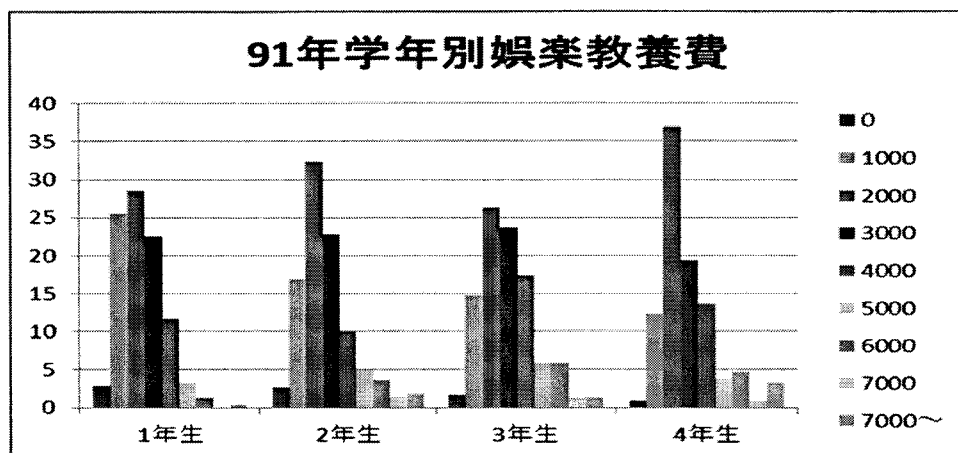
図 18



商学部も社会学部と同じで、最も回答者数が多い所得層が 600 万から 800 万の層から隔年ごとに一つ上の層へ移っていき、1999 年には 1000 万から 1200 万の層へと移動している。経済学部は年によって飛びぬけて多く分布する所得層はあるが、全体的には 400 万から 1500 万まで同じ割合くらいで分布している。総合政策学部は 91 年にはまだ創設されていないので、95 年と 99 年だけの比較である。95 年は 1000 万から 1200 万円の所得層に

集中しており、特殊な状態といえそうだ。そして 95 年にいたってもやはり高所得層の多い学部と捉えられるだろう。文学部、法学部、経済学部は 95 年が最も、収入の中央値が高かった学部で、社会学部、商学部は年々収入の中央値が上がっていく。折しも就職氷河期の時代であるので、高所得家庭の学生中心に、少しでも実学的なことを身に着ける意図で学部を選択したかもしれない。

図 19



次に1ヶ月当たりの娯楽教養費を見ていく。91年は金額の区切りが違うので別に表示するが、91年の時点では学部別差異も男女差の明確ではなかったもので、学年別で表した。2000円台がどの学部でも多く、その次に1000円台と3000円台どちらが多いかというのは、その学部の回答者の中の1年生や2年生以上の人数の割合によって変わっていると考えられる。また、91年娯楽費は経済学が最も高かった。91年の所得中央値が最も高かった文学部は、神学部、理工学部に次いで娯楽費が少なかった。

図 20

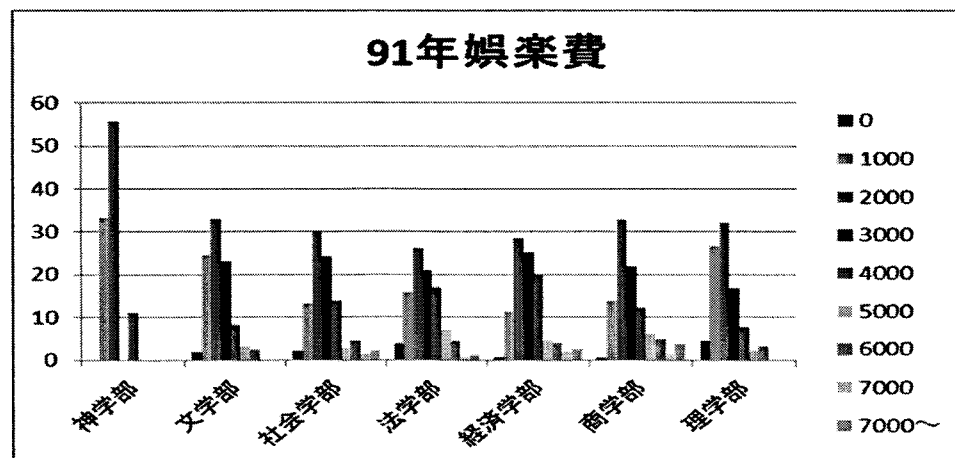
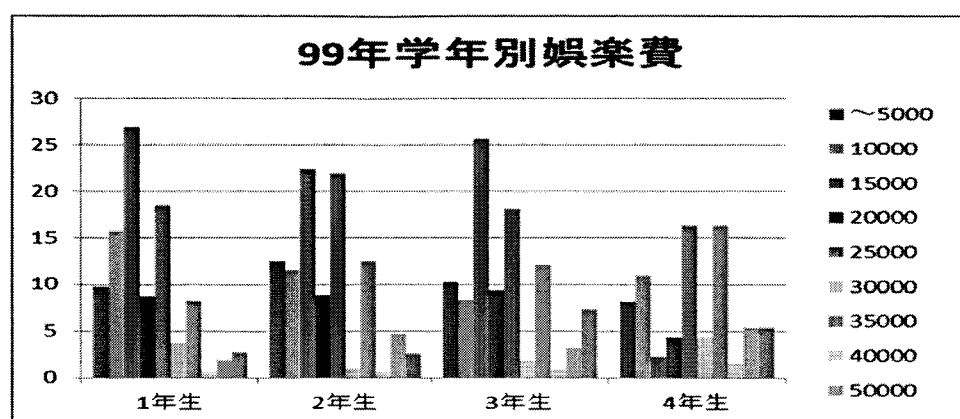
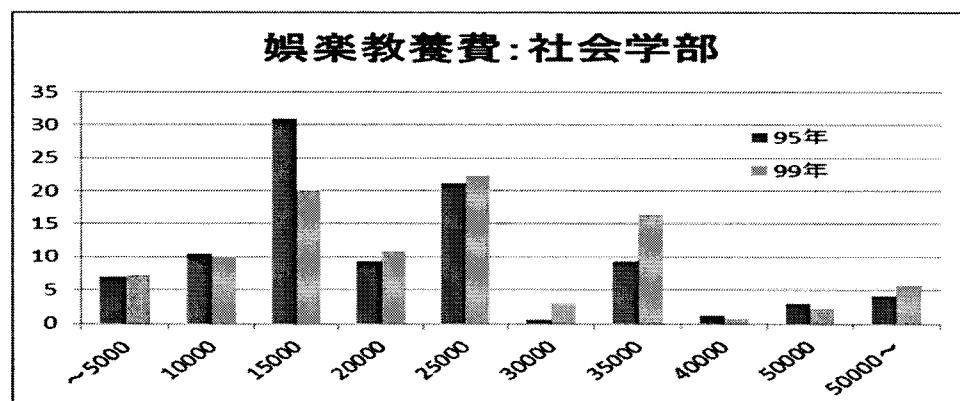


図 21



全体の傾向として 10000 から 15000 円の間か 20000 から 25000 の間の支出が多く、各学部ごと合計して約 40%以上の学生がこの金額帯を選択している。

図 22



家庭収入の高かった社会学部であるが、娯楽教養費も 99 年になると 3000 円から 35000 円台の支出が伸び、よく余暇にお金を使う傾向が見て取れる。商学部に関してはグラフを見る限りでは、節約志向になったのか支出増加傾向にあるのか判断することはできない。

図 23

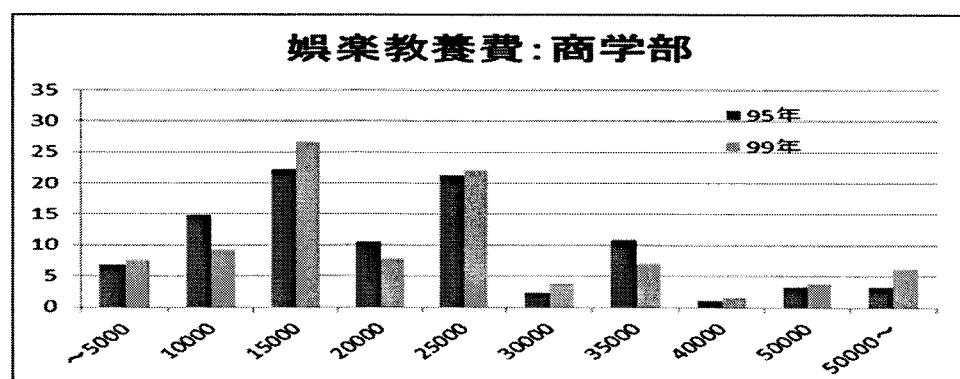
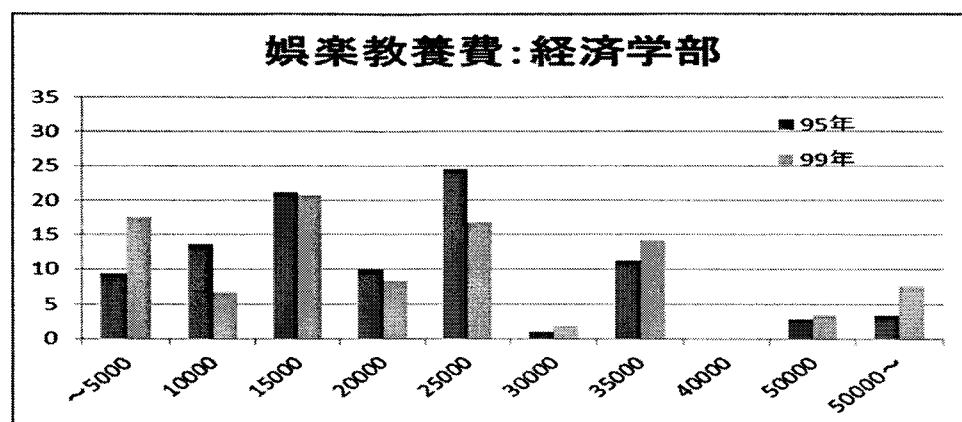


図 24



経済学部、商学部、社会学部の3学部は、95年での娯楽教養費平均が17000円前後で99年は19000～19500円前後となっており、最も費用平均が高い群である。法学部は家庭収入のグラフにおいて95年から99年への収入の落ち具合が鮮明であったが、それがこの娯楽教養費でも見受けられる。20000円から25000円の支出層が減り、5000円以下や35000円以上の支出層が増えている。総合政策学部は95年には1200万レベルの家庭収入がある学生が約25%もいた割には節約志向があるようだったが、99年には家庭収入の分布ともに他学部と同じような感覚となったようである。

図 25

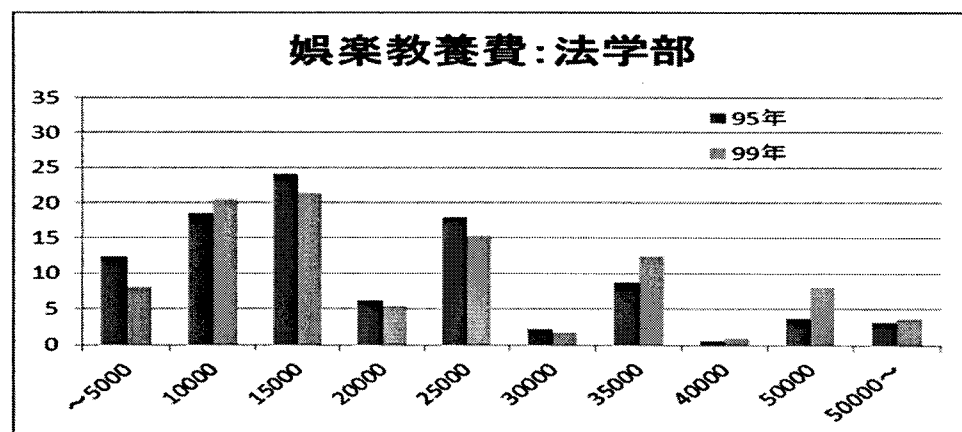
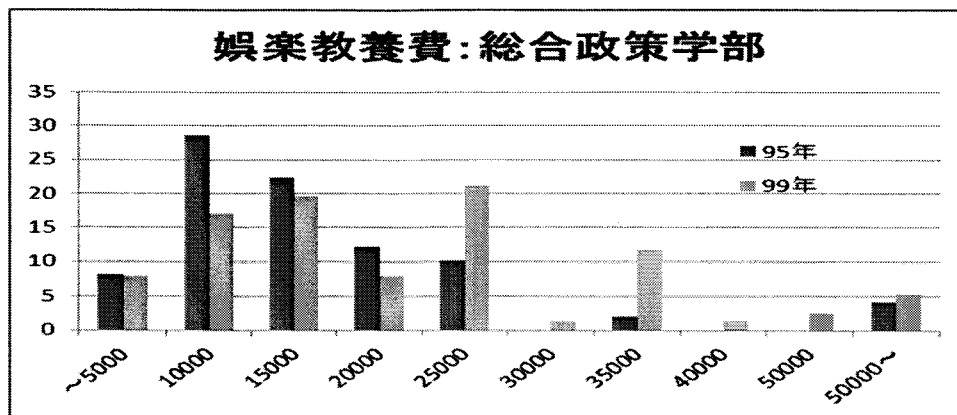


図 26

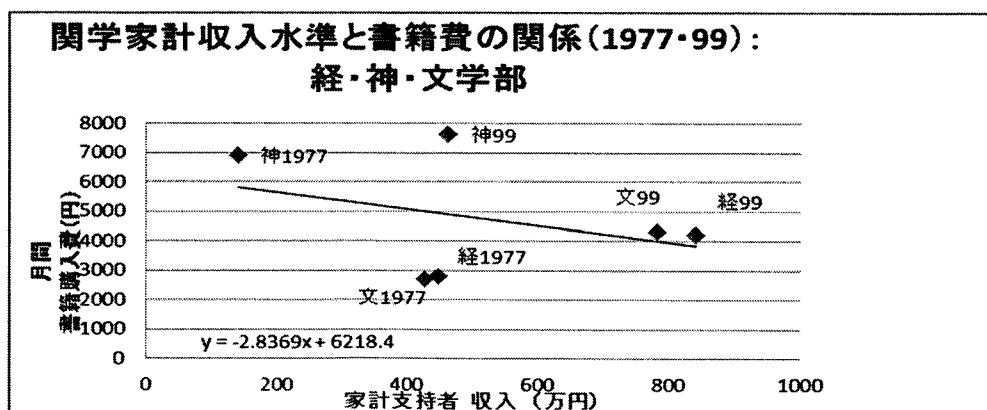


小括

商学部、社会学部で家庭所得と娯楽教養費の高さが目立った。しかしこの2学部は書籍費用は減少傾向にあった学部である。大学時代では娯楽・勉強含めて読書するよりレジャーに活発性を見せるという特徴があるようである。経済学部、法学部は90年代初めは資金力の高さをを見せていたが、90年代終わりには書籍費用は維持しながらも商学部や社会学部のような娯楽資金の派手さは失っていったようである。

なお、最後に長期データが得られる神学・文学・経済学の三学部に限って学生の出身家庭の収入水準と書籍購入費との関係について検討しておく。

図 27



関西学院大・学生部『学生生活実態調査』1977、1999年版より作成

3学部ともに、20年間に家計支持者収入も、(同収入の動向を反映して)書籍購入費も上昇している。それにもかかわらずグラフ上の近似曲線自体が右下がりに傾いているのは、神学部の値(ポジション)に因るものである。他の二学部と比べて、神学部は収入水準が

低いにもかかわらず、その書籍購入費は相対的に大きい。この現象は書籍購入費規模が必ずしも家計支持者の収入に規定、制約されない場合もあることを示し、また神学部生の書籍購入性向の高さに、家庭環境などの「文化資本」の作用が背景に推定しうるからである。

以上のように『学生実態調査』から「文化資本」を伺えるような項目について見てきたが、金額を質問するというアンケート方式であり、「娯楽」ごとに細かく質問しているわけではない上、この調査も 1999 年以降から目的が変更され実施されなくなってしまった。学部での専門的な勉強がその個人の考え方や価値観に影響を与えている、ある一定の枠組み、行動規範を与えているのではないだろうかという仮説を検証するには、より「文化資本」を伺える項目を設定し、独自にアンケート調査を行う必要があると考え、実施した。その調査結果の分析を次の第 2 章で行う。

## 第2章 生活意識と行動様式の学部間特性の検討

### 第1節 価値観と行動様式に関する学部間特性の調査

#### 春学期余暇行動アンケート調査概要

調査期間：2013年6月

対象：経済学部（有効回答数 127）、商学部（有効回答数 105）、国際学部（有効回答数 96）、  
法学部（有効回答数 80）、社会学部（有効回答数 52）、理工学部（有効回答数 66）、  
文学部（有効回答数 102）

※学部の専攻領域・特色に影響されている学生が望ましいため、2回生以上から受講している講義でのアンケート調査のアポイントメントをとった。しかし文学部は調整できなかったため、1回生と2回生以上に分けて分析を行った。

調査方法：各学部の教員に個人的に調査依頼を行い、講義の時間を15分ほどいただき、その講義中に配布・回答・回収した。

内容：余暇行動がその所属学部の専攻領域・特色から影響を受けて違うものなのかということを知るため、余暇18項目について頻度を8点尺度で、ライフスタイルについての考え方の違いの有無を学部間で測るため、将来の働き方について10項目を5点尺度で質問した。また、親からの専攻領域（学部）継承などの有無などを調べるため、両親の専攻領域（学部）も質問項目に加えた。いずれも執筆者独自に作成した質問項目であるため、あらかじめ精査された質問群でない。

今回のアンケート調査結果を分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 家計支持者の所得水準と回答した大学生の生活程度の認識(中の中など)・階層帰属意識の相関の強さに明らかな学部間の差があった。
2. 余暇行動について18項目用意し、回答を求めたが、問4～問9の教養・ボランティア等の項目群を選択する学生と問11～問16までの身近な余暇行動の項目群にしか回答がない学生、両方の項目群をまんべんなく選択する学生に分かれた。
3. 18項目の中で男女差が見られるのは、「9. 美術館来館」、「15. ショッピング」くらいである（女子の方が頻度が高い）。「15. ショッピング」や「16. レストラン等での外食/食事」の項目では、家計支持者の収入、自分のアルバイト等の収入に関わらず、

どの学生も「1ヶ月に1回」以上の頻度で行っている。

4. 「親の専攻学問領域が学部選択に影響した」と答えたのは、法学部だけである。

そしてこの中から、より興味深い1と2についてこの第2章では詳しく見ていく。

上記の1について、所得と生活程度認識の相関係数は、商学部→法学部→経済学部→国際学部の順に強かった。残念ながら、社会学部、理工学部、文学部についてはサンプル数が少なかったため、このランキングには含めないこととする。

所得については、①400万円未満 ②400万円～450万円未満 ③450万円～500万円未満 ④500万円～550万円 ⑤550万円～600万円未満 ⑥600万円～700万円未満 ⑦700万円～850万円未満 ⑧850万円～1000万円未満 ⑨1000万円～1200万円未満 ⑩1200万円～2000万円未満 ⑪2000万円～3000万円 ⑫3000万円以上—という12段階で質問している。また生活程度認識に関しては、①上の上 ②上の中 ③上の下 ④中の上 ⑤中の中 ⑥中の下 ⑦下の上 ⑧下の中 ⑨下の下—という9段階で質問している。

次ページの図1：6学部所得と生活程度認識の相関係数の図を見てみよう。商学部はこの2変数の相関係数が.655と分析対象とした4学部の中で最も強い値であった。しかし一方の国際学部では、.263と最も弱い値であった。調査した6学部全体で測った相関係数（次ページ参照）とも、各学部異なる数値を出していることから、学部間で生活程度認識、生活満足度の捉え方に何らかの違いがあることが読み取れる。

この差は何なのであろうかと思い、多くの学生が選択している身近な余暇活動ではなく、ボランティア、海外交流、美術館来館などの教養と満足感に関わってくる余暇活動と合わせて、散布図にしてみたのが、別紙の図2～7（ボランティア、海外交流、美術館来館）である。この散布図を作成するにあたって、「1年に2～3回」以上の頻度を回答した学生を上位グループに置いている。

これを見てみると、商学部は3つの余暇活動を行っているか否かに関わらず、所得と生活レベルの認識は右上がりの線形を描いている。しかし、国際学部は多くの散布図においてやや右上がりの横ばいで、生活レベルは4；「中の上」～6；「中の下」に集中する。

この調査で明らかになった、収入と生活程度認識の相関が商学部は強く、国際学部が弱いという現象であるが、この違いこそが本研究のテーマである専攻する学問領域の違いによって形成される思考様式や好む趣味・余暇活動・教養を含む「文化資本」が異なる故で



図1 6学部所得と生活程度認識の相関係数 ※ピアソンの相関係数とは、偏差の正規分布を仮定している検定方法である。

商学部 相関係数

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.655**
	生活程度	.655**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
N	所得	74	74
	生活程度	74	96

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

国際学部 相関係数

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.263*
	生活程度	.263*	1
有意確率 (両側)	所得		.032
	生活程度	.032	
N	所得	67	67
	生活程度	67	89

\* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

経済学部 相関係数

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.422**
	生活程度	.422**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
N	所得	91	91
	生活程度	91	118

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

法学部 相関係数

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.603**
	生活程度	.603**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
N	所得	65	65
	生活程度	65	76

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

理工学部 相関係数

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.662**
	生活程度	.662**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
N	所得	52	52
	生活程度	52	59

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

社会学部 相関分析

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.698**
	生活程度	.698**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
度数	所得	44	44
	生活程度	44	51

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

全学部 相関分析

		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.534**
	生活程度	.534**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
度数	所得	451	450
	生活程度	450	583

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

あるから、という仮説に関わってくるものと考えられる。そしてブルデュー的に考えるならば、その「文化資本」は親の世代から何らかの影響を受けている可能性があるということだ。残念ながらこのアンケート調査では、紙幅の関係で親の趣味や余暇行動については質問していないので、主に家庭収入という面から学生の余暇行動に解釈を加えていく。この所得と生活程度認識の、相関の違いに関する仮説としては以下が挙げられる。

1. ボランティアのような利他的行動や文化的な余暇が、国際学部の低収入学生を上位の生活程度に認識させる。
2. 海外交流というものは、費用がかかる上、人は自己を評価するとき下ではなく上を見るということから仮定すると、もっとアクティブに海外交流を行っている周囲の学生と比べてしまい、高収入学生の満足度・幸福度ひいては生活程度の認識を引き下げてしまうと考えられる。
3. 国際学部は理想追及型で自身の家庭の生活程度を判断する際に、収入ではなく、満足感に重きを置いて判断を下す傾向があり、商学部は実務的なことを勉強しているゆえに現実的で目に見えるものである収入で判断をするのではないだろうか。だから商学部は実収入と生活程度認識を一致させる回答をしたと、解される。

上記の1の根拠は、ボランティア行動が生活満足度にプラスの影響を与えることが、フライによって明らかにされている<sup>5</sup>。フライによると、GSOEPの1985年から1999年のデータを使って、ボランティア活動（頻度）と生活満足度の関連性について実証分析したメイヤーとスタッツァーの研究<sup>6</sup>では、生活満足度が最も低いのはボランティアを全くしていない人々であり、ボランティアを辞めた人の幸福度も著しく低下した。その低下は、ボランティアを辞めざるを得なくなった理由—例えば失業など—の変数を除いても、低下が明らかであった。

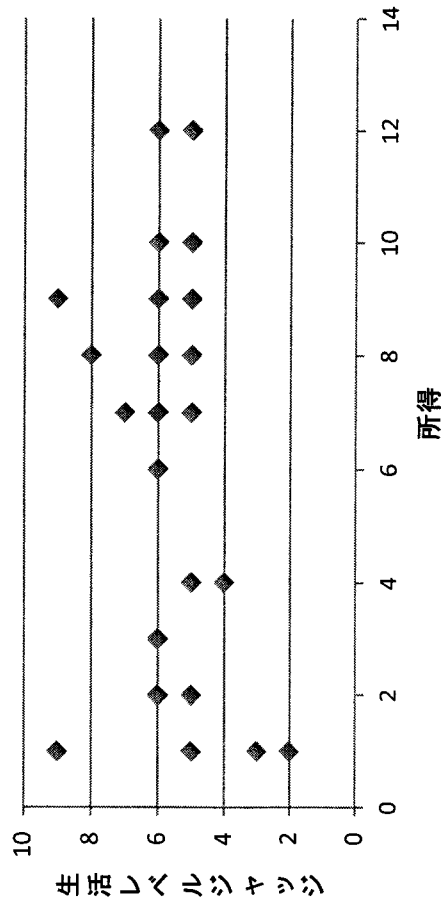
別紙のボランティア活動を商学部と国際学部で比較した散布図をみると、両学部でボランティア活動をしている学生の生活程度ジャッジ・認識が高いクラスに位置付けられていることがわかる。しかしボランティア活動と生活程度認識の間には有意な相関が見られた

<sup>5</sup> ブルーノ・S・フライ『幸福をはかる経済学』、白石小百合訳、NTT出版株式会社、2012年

<sup>6</sup> Meier, Stephan, and Alois Stutzer. 2008. 「Is Volunteering Rewarding in Itself? Evidence from a Natural Experiment」, 『Economica』, 75, No.297: p 39-59

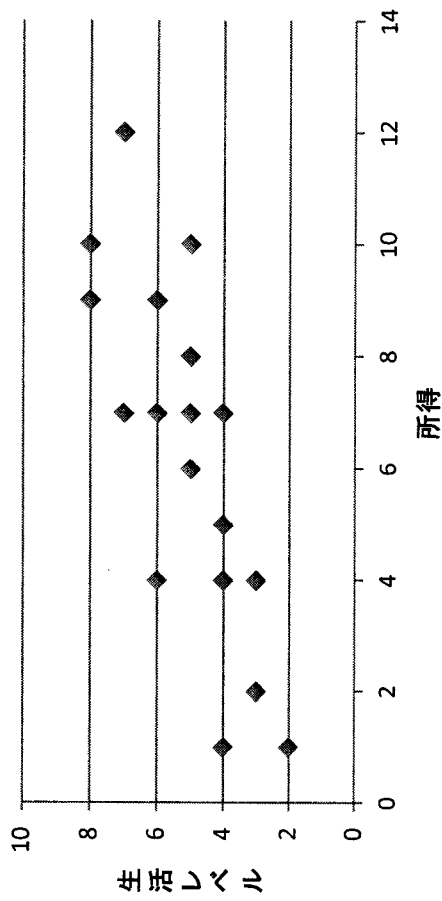


### 国際～美術館来館上位41名



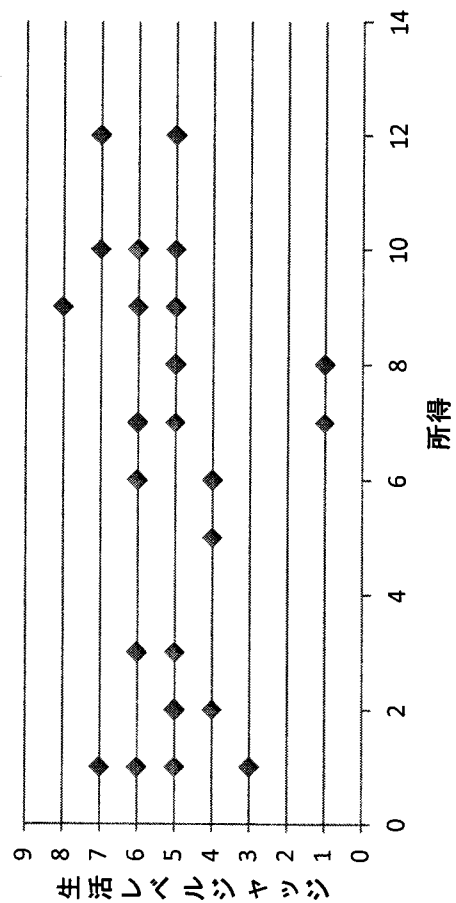
↑ ↓ 図 4

### 商学部～美術館来館上位41名

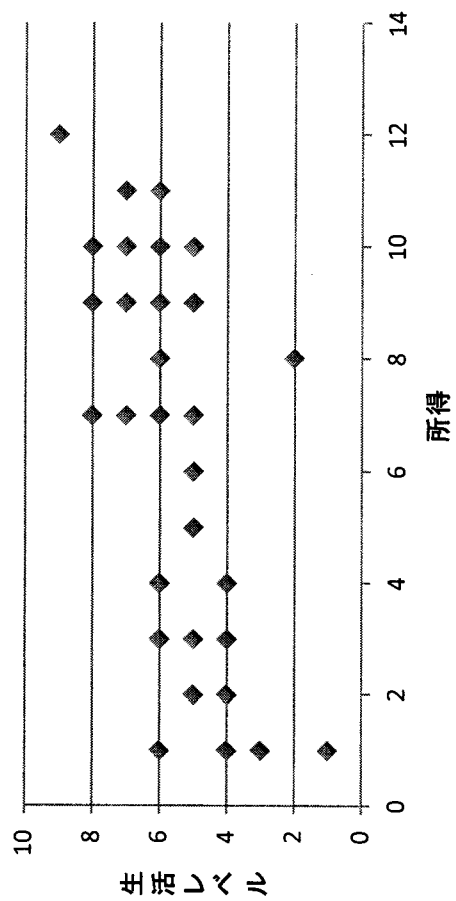


↑ ↓ 図 5

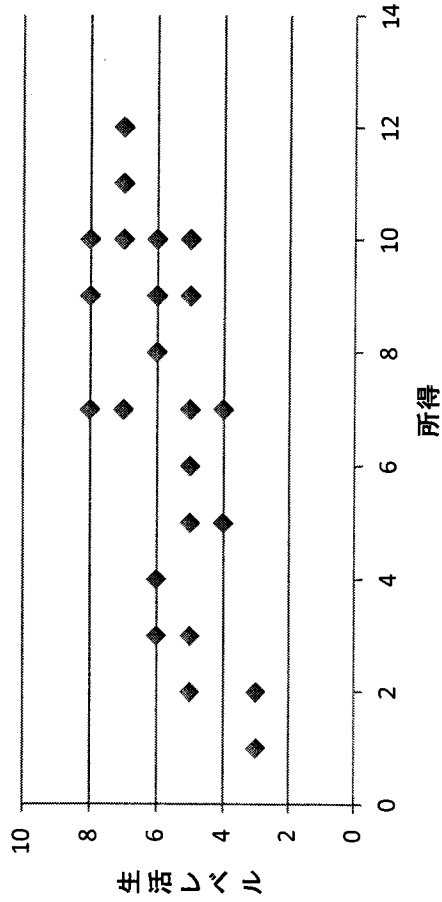
### 国際～美術館来館下位



### 商学部～美術館来館下位

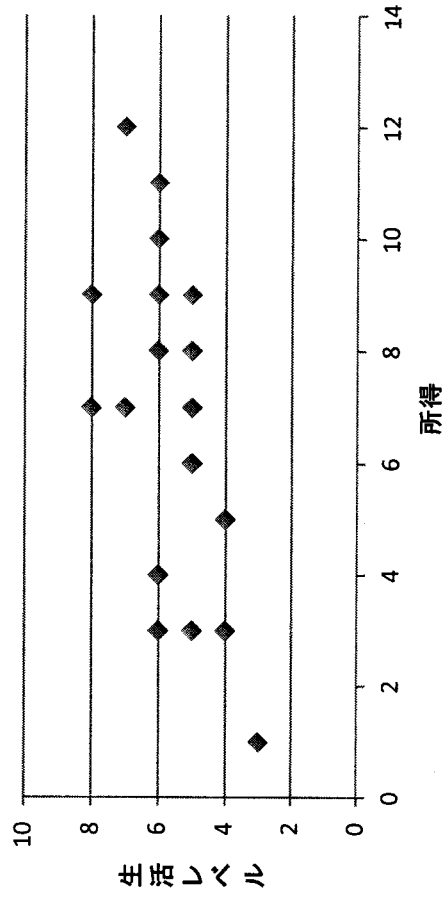


商学部～ボランティア上位40名



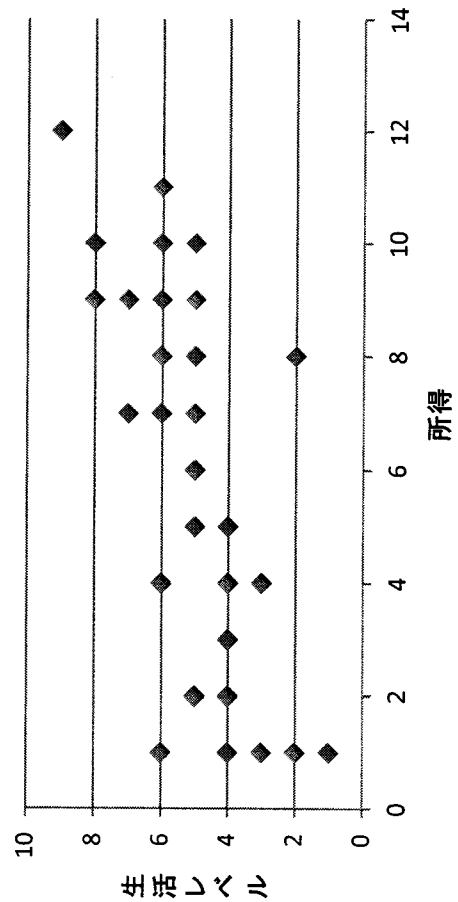
↑ ↓ 図 6

商学部～海外交流上位31名

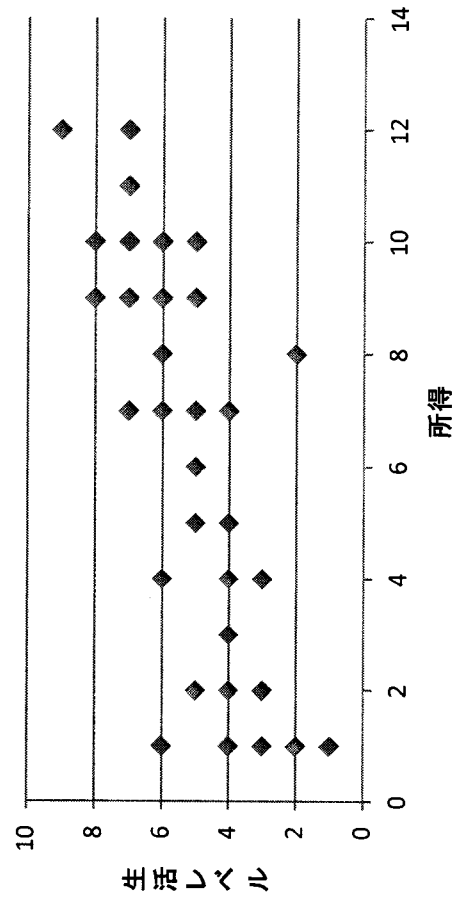


↑ ↓ 図 7

商学部～ボランティア下位



商学部～海外交流下位



のは法学部だけであった（.232,  $p < .05$ ）。その他ボランティアと海外交流に関しては相関が各学部で認められた。

そしてそもそもの生活程度の認識を生活満足度と同義で扱ってよいのかということに関して、生活満足度が生活程度の認識つまり社会学用語で階層帰属意識に与える影響の強さも、前田<sup>7</sup>は、生活満足度は階層帰属意識に対して先行し、所得や会社における地位など階層帰属意識に影響を与えられる他の変数の効果の媒介要因としてはたらくことを明らかにしている。つまり、所得や社会的地位はまず生活満足度に影響を与え、その生活満足度が階層帰属意識に影響を及ぼすということである。生活満足感は生活諸側面における心理的充足感を総合評価したものなのである。そして生活満足感と階層帰属意識の相関は、その他の主要な規定因となる変数の影響を取り除いたうえでも有意であった。

上記の2の海外交流についても、商学部と国際学部の散布図を見てみると、両学部とも海外交流参加者は相対的に所得の高い家庭の学生が多いことがわかる。実際法学部などでは、海外交流の頻度と所得に相関（.286,  $p < .05$ ）があった。ただフライの言うように、身近な人と自身の状況を比べて満足感などが減っているかどうかまでは分からない。フライによると、人間は他人と比べる場合、下ではなく上を見るという。そのため野心はすでに達成した水準よりも高くなる傾向があり、結果、野心がその人の幸福度を下げるというのだ。フライは「所得の評価」を「野心」の代理変数として用いて、ドイツ社会経済パネル調査（German Socio-Economic Panel Study, GSOEP）の1992年と1997年のデータを分析している。そして個人の所得面の野心を表す変数は、主観的幸福にマイナスの影響を与えていることを明らかにした。

フライの著書<sup>8</sup>から、実際に被験者が比較対象とする参照グループを与えられていたときのケースを紹介する。被験者はイギリスの5000人の労働者で、設定された参照グループは労働条件が似通った人たちで構成されているが、その参照グループの所得が自分より高い場合、被験者の労働者たちの仕事に対する満足度は低下したという。

そして仮説3に関しては、秋学期のアンケート調査にて、学生の価値観について質問することで探っていこうと考えており、その分析結果の考察を第3章にて行う。

7 前田忠彦「階層帰属意識と生活満足感」、間々田孝夫（編）『1995年SSM調査シリーズ6 現代日本の階層意識』、1995年SSM研究会、1998年、p 89 - 112

8 ブルーノ・S・フライ『幸福をはかる経済学』、白石小百合訳、NTT出版株式会社、2012年、p 44

## 第2節 「行動様式」及び「将来の働き方」の分析

### 「行動様式（余暇頻度）」のクラスター分析結果

この第2節では、各学部ごとに余暇活動をクラスター分析（Ward 法）し、各クラスターの所得層や生活程度の認識の特徴を探り、また親の出身学部についても言及していく。

18 項目の余暇活動についてそれを行う頻度を－8：毎日～1：全くない～まで 8 点尺度で回答してもらったものをクラスター分析にかけて分析してみた。クラスター分析とは、この場合 18 項目の余暇行動の選択肢に対して、似たような行動頻度・パターンを回答した学生の群をつくるというものである。データ入力時点で予測できていたことだが、身近な手軽にできる余暇活動（ショッピング、外食など）だけを行うグループと、美術館来館やボランティアなど簡単ではない余暇行動や個人の嗜好に左右されるものだけを行っているグループ、両方行っているグループと大きく分けて 3 パターンに分かれると考えられた。

父母の出身学部・専攻と余暇頻度クラスターのクロス表は、学部としての「文化資本」の継承といったものがうかがえるかと考え作成した。入学時の学部選択理由で、父母の出身学部を意識した、という回答は法学部以外で見られず、自身の興味関心や友人・知人の助言、という回答が圧倒的に多かったのだが、その興味にも何らかの影響はあるかと考えクロス表をつくり、分析してみた。

### 商学部

表 1

クラスター	度数	特徴
1	43	勉強と外出の伴う余暇活動は平均並み、映画・読書好き
2	10	勉強あまり、外出もせず
3	31	大学外勉強とスポーツ偏重生活
4	7	勉強あまり、国内外多趣味

表 2

余暇頻度クラスと性別のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラス	1 勉強と外出平均、映画読書好き	18	25	43
	2 勉強あまり外出せず	6	4	10
	3 大学外勉強とスポーツ偏重	18	13	31
	4 勉強あまり国内外多趣味	4	3	7
合計		46	45	91

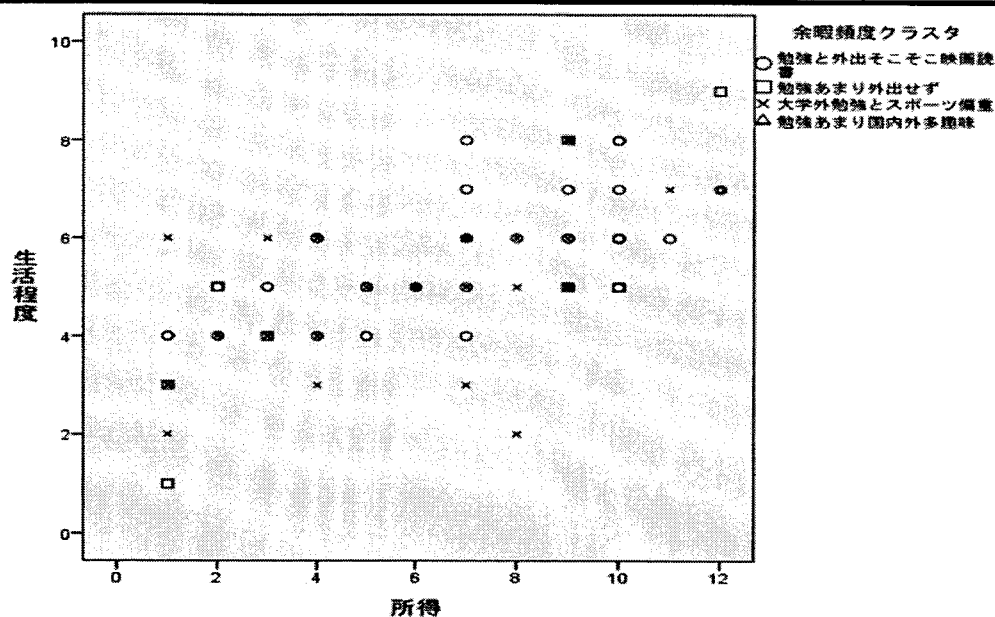


図 8

関学商学部に関しては、父の出身学部の第1位は理工・数学で18名、次いで商学部、経済学部と続いていく。母の出身学部で最多なのは文学部で12名、教育、外国語、商学と続いていく。余暇頻度クラスター別生活程度と所得のクロス表においては、所得分布は全域にわたり、生活程度との相関も調査し標本数を揃えられた学部の中で最も高かったのだが、クラスター1の中の低所得層は中クラスの生活程度との回答が多かった。所得・生活程度認識とボランティア・海外交流・美術館・読書の頻度で相関係数を求めると、所得はボランティア（.235,  $p < .045$ ）、読書（.232,  $p < .047$ ）と生活程度認識はボランティア（.230,



p<.027)、海外交流 (.215, p<.040) と有意な相関が見られた。散布図ではこの「文化資本」関連の余暇と生活程度認識に明確な関連は見受けられなかったが、関連性はあったようだ。しかしそれでも生活程度の質問に対して、実際の収入に即した回答をするということとは、所属学部 of 学問領域ゆえとも考えられる。

## 国際学部

表 3

クラスター	度数	特徴
1	30	余暇活動全て平均程度だが、文化芸術系とボランティアはなし
2	40	大学外勉強とスポーツ盛んでその他余暇活動は平均並み
3	10	楽器のけいこはするが、読書はせず、その他余暇活動は平均並み
4	3	勉強・買い物・外食はしないが、アクティブにアウトドア
5	1	大学外勉強とスポーツ、ボランティアと近場のアウトドア
6	1	多趣味積極的だが映画・読書・旅行はしない。

表 4

余暇頻度クラスと性別のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラス	1 芸術・ボランティアなしすべて平均並み	6	24	30
	2 大学外勉強とスポーツ盛んで趣味は平均並み	10	30	40
	3 楽器は稽古するが読書平均以下、その他趣味平均並み	4	6	10
	4 勉強買い物食事しないが行動力非常に高い	2	1	3
	5 大学外勉強スポーツボラと近場のアウトドア	1	0	1
	6 多趣味積極的だが映画読書旅はしない	0	1	1
合計		23	62	85

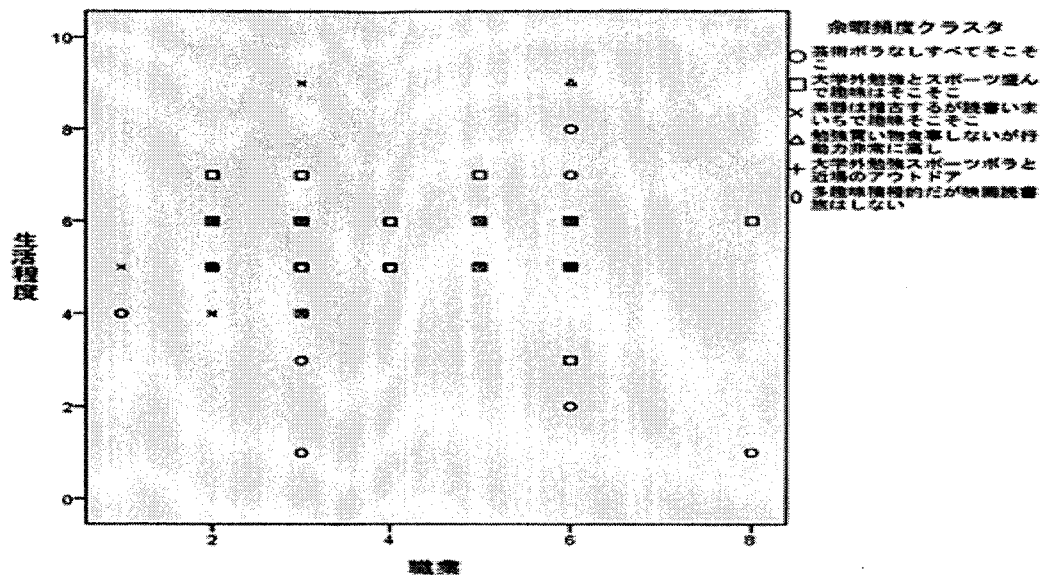


図 9

700万～1200万の所得帯に約半数の30名が入っており、国際学部は所得層の高い家庭出身の学生が多いようだ。「文化資本」に関連する項目同士で他学部より、頻度に相関が表れている。ボランティアと海外交流（.520,  $p < .00$ ）、美術館来館と海外交流（.246,  $p < .05$ ）である。どのクラスターもそれぞれ余暇活動は活発なので、余暇の充実が生活程度認識を引き上げるといふ仮説どおりなら、故に所得と生活程度認識の相関が弱まっているといえるだろう。

散布図において、比較的低所得層の分布があるのが、クラスター1と2であり、この二つは所得と生活程度認識の散布図の中で見ると、やや右上がりの分布を示しており、現実的な回答をしている学生もいることがうかがえる。父の専攻に関しては経済学が17名で最多、以下理工・数学、高校普通科と続く。母の専攻は文学、教育、外国語がトップ3である。

経済学部

表 5

クラスター	度数	特徴
1	78	ドライブ・国内外旅行盛んも、文化・読書は縁なし
2	27	大学以外の勉強・ピクニック・読書盛んだが、基本外出なし
3	16	ボランティア・海外交流・文化・ショッピング盛んスポーツ平均以下

表 6

余暇頻度クラスタ と 性別 のクロス表

		性別		合計
		女性	男性	
余暇頻度クラスタ	1 ドライブ・国内外旅行好き、文化・読書は縁なし	30	47	77
	2 大学以外の勉強・ピクニック・読書盛んだが、基本外出なし	3	24	27
	3 ボランティア・海外交流・文化・ショッピング盛んスポーツあまり	9	7	16
合計		42	78	120

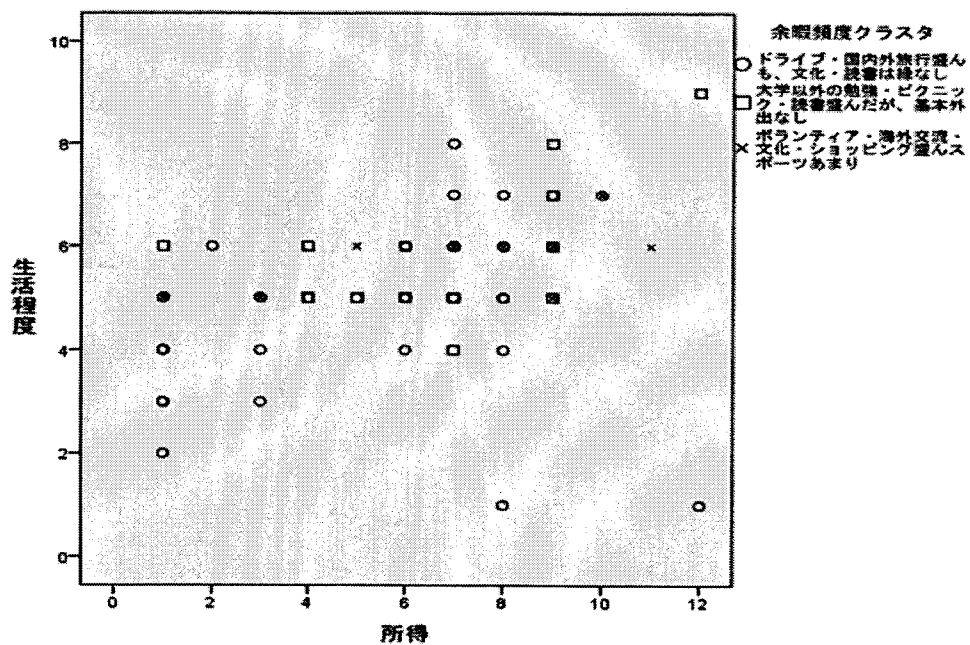


図 10

父の出身学部は経済学部と理工・数学が 19 名で最も多く、次いで商学部、法学部と続く。母の出身学部は文学部が 17 名と最も多く、次いで外国語、教育が 7 名、看護、家政科が 6 名と続く。

余暇頻度クラスター別生活程度認識と所得の散布図を見ると、最も度数の高いクラスター1は右上がり、クラスター2, 3はいかなる所得でも生活程度は中レベルと答えていることが分かった。そしてそのクラスター1は低所得層が多く、学生のバイト収入も約 50%の学生が3万～9万の間に等しく分布している。下宿生 31 名中 24 名がクラスター1にいることもあってか、他の2つのクラスターより自分で生活をやりくりしていることで、低い所得は低い生活程度と答える傾向にあるのかもしれない。クラスター3においては低所得層はいなく、またバイト収入も4万円程度でおさえられている。

## 法学部

表7

クラスター	度数	特徴
1	47	大学の勉強・ボランティア・その他の余暇も平均値前後
2	11	大学外の勉強・スポーツ志向、読書・映画以外の行動なし
3	19	海外交流・文化芸術余暇・読書・身近な遊び・海外旅行好き

表8

余暇頻度クラスターと性別のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラスター	1 大学の勉強・ボランティア・その他の余暇も少々	35	12	47
	2 大学外の勉強・スポーツ志向、読書・映画以外の行動なし	9	2	11
	3 海外交流文化芸術余暇・読書・身近な遊び・海外旅行好き	13	6	19
合計		57	20	77

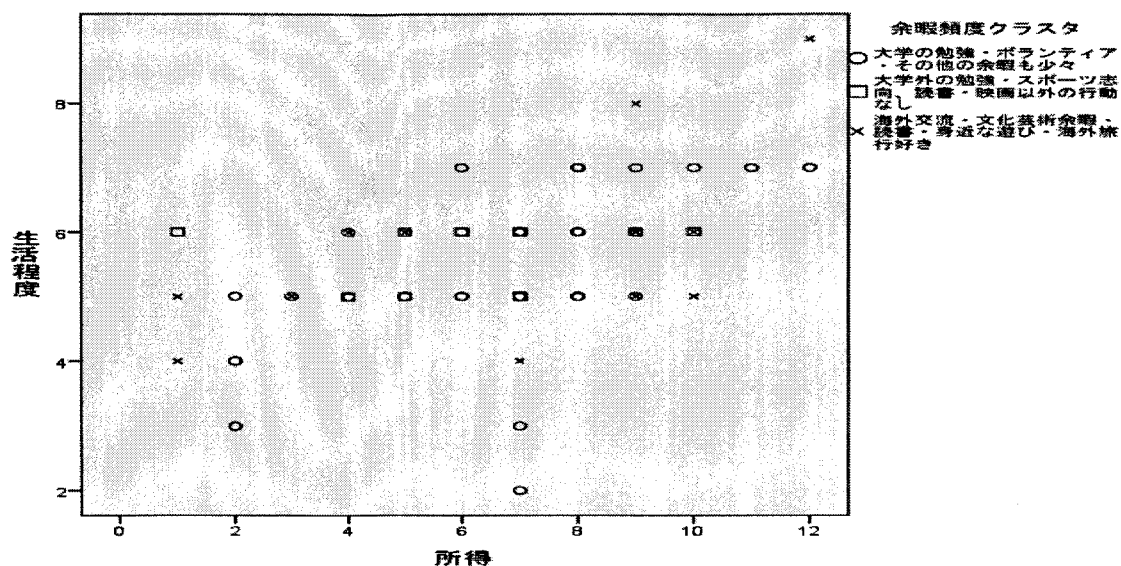


図11

父の出身学部はやはり学部選択理由で唯一、親の出身学部を意識したという回答があっただけあり、法学部が15名と最も多く、続いて理工・数学、高校普通科とつづく。母の出身学部に関しては、文学部が最も多く、次いで高校普通科、看護、教育がつづく。余暇頻度クラスター別所得と生活程度認識の散布図を見ると、クラスター3はやや右上がり現実的な回答をしており、クラスター2はいかなる所得でも中クラスと回答していることが見て取れる。所得は3つのクラスターすべてで均等に分布しているので、所得による生活の豊かさで生活満足度が左右されているわけではないようだ。しかし少なくとも所得と海外交流頻度には相関があり( .286,  $p < .05$ )、ボランティアは生活程度認識と相関があるので( .232,  $p < .05$ )、余暇行動によって生活満足度が上がり生活程度認識も実際の所得と連動しにくくなっているとは言えるのではないだろうか。

#### 社会学部

表 9

クラスター	度数	特徴
1	21	美術芸術・海外旅行好き
2	13	勉強せずスポーツ・ボランティア・映画・読書・ドライブ・旅行
3	17	海外交流・国内旅行好き

表10

余暇頻度クラスと性別のクロス表

		性別		合 計
		男性	女性	
余暇頻度クラス	1 美術芸術・海外旅行好き	7	14	21
	2 勉強せずスポーツ・ボランティア・映画読書・ドライブ旅行	7	6	13
	3 海外交流・国内旅行好き	5	12	17
合計		19	32	51

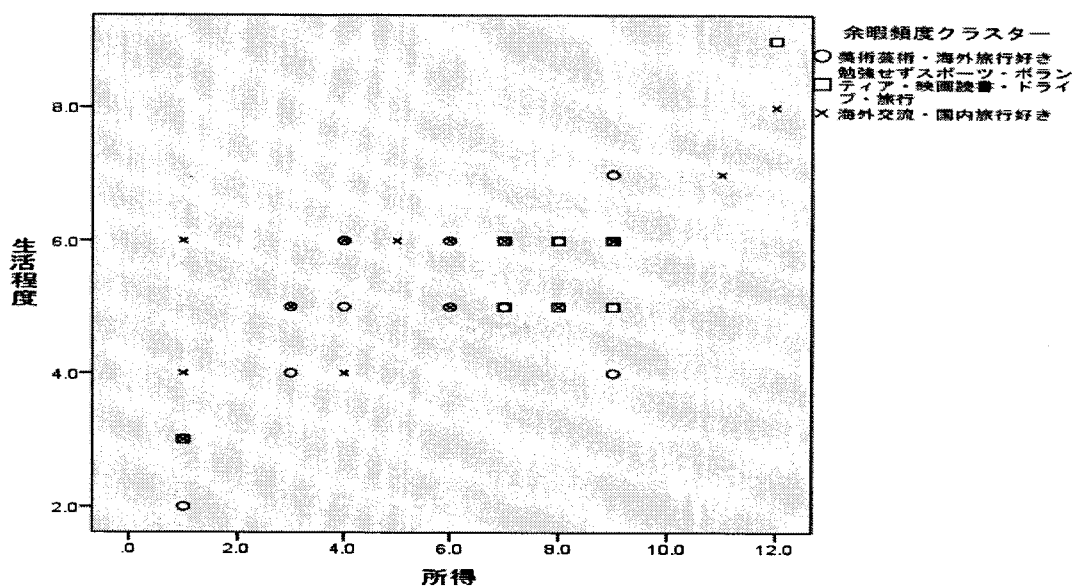


図12

クラスター1と3は所得が全体に分布し、生活程度と所得との散布図でも右上がりの線形を描く。その中でクラスター2はほとんど中・高所得層で構成されており最も平均所得が高く、また生活程度と所得の相関係数が3つのクラスターの中で最も強い。(クラスター1: .698、 $p < .003$ 、クラスター2: .866、 $p < .001$ 、クラスター3: .726、 $p < .001$ ) クラスター2は余暇活動が社会学部の中で最も活発であるが、バイト収入の平均値も最も高く、そのような資金力にも支えられていることがうかがえる。父の出身学部としては、経済学部が14名でトップで、続いて理工・数学、高校普通科となる。母の出身学部では文学部が最多の7名で、以下外国語と家政科が続く。(所得平均: 6.18、最頻値: 9)

理工学部

表 11

クラスター	度数	特徴
1	20	楽器のけいこ以外の余暇活動は平均値かそれ以下
2	8	自宅で映画・動画鑑賞および読書以外なにもしない
3	31	スポーツ・ボランティア・海外交流・文化芸術余暇・外出多し

表12

余暇頻度クラスター と 性別 のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラスター	1 楽器のけいこ以外の余暇活動は平均値かそれ以下	17	3	20
	2 自宅で映画・動画鑑賞および読書以外なにもしない	8	0	8
	3 スポーツ・ボランティア・海外交流・文化芸術余暇・外出多し	29	1	30
合計		54	4	58

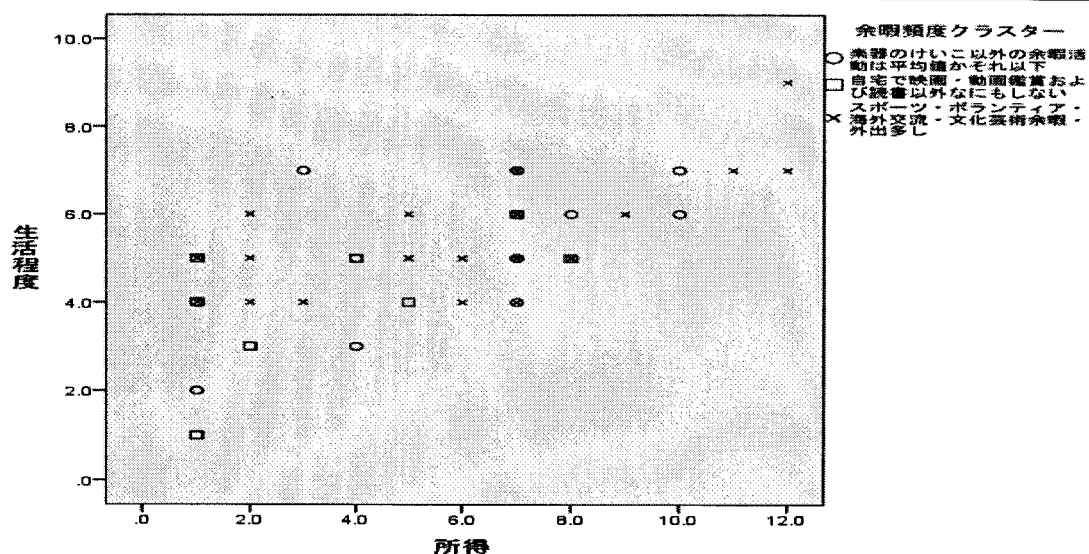


図13

余暇頻度クラスター別所得と生活程度認識の散布図を見ると、クラスター1と2は右上がりに散布しているが、クラスター1の方が高所得であり、クラスター2の方が低所得で

ある。（所得平均値クラスター1：5.31、クラスター2：3.63、クラスター3：6.12）余暇活動の活発さに差が出るのは、クラスター2の方がクラスター1よりもバイトに精を出しているということが考えられる。（バイト収入平均値－クラスター1：4.3、クラスター2：4.75、クラスター3：5.9）クラスター3は右上がりの線形を描かいており、高所得層は生活程度を上クラスと回答しているのだが、低所得は中クラスと回答している。3つのクラスターの中では最も所得平均値が高くなかつバイト収入も多いクラスターだが、ボランティアや文化芸術系の趣味の多さが幸福度の上昇につながり、生活程度認識の上昇につながっていると考えられる。父の出身学部はやはり理工学部が17名で最も多く、2番目は大きく開いて5名が選択した経済学部である。母の出身学部は文学部が7名でトップであり、以下家政科・教育学部と続く。

文学部（2回生以上）

表 13

クラスター	度数	特徴
1	20	SNS を使わない、映画鑑賞・国内旅行好き
2	14	大学外の勉強・海外交流・国内外旅行・読書好き
3	15	スポーツ・ボランティア・ピクニック・ドライブ・国内旅行好き
4	11	楽器の稽古・コンサート鑑賞・美術館・映画鑑賞好き、ドライブ無

表14

余暇頻度クラスター と 性別 のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラスター	1 SNSを使わない、映画鑑賞・国内旅行好き	5	15	20
	2 大学外の勉強・海外交流・国内外旅行・読書好き	5	8	13
	3 スポーツ・ボランティア・ピクニックドライブ・国内旅行	8	6	14
	4 楽器の稽古・コンサート・美術館・映画好き、ドライブ無	3	8	11
合計		21	37	58



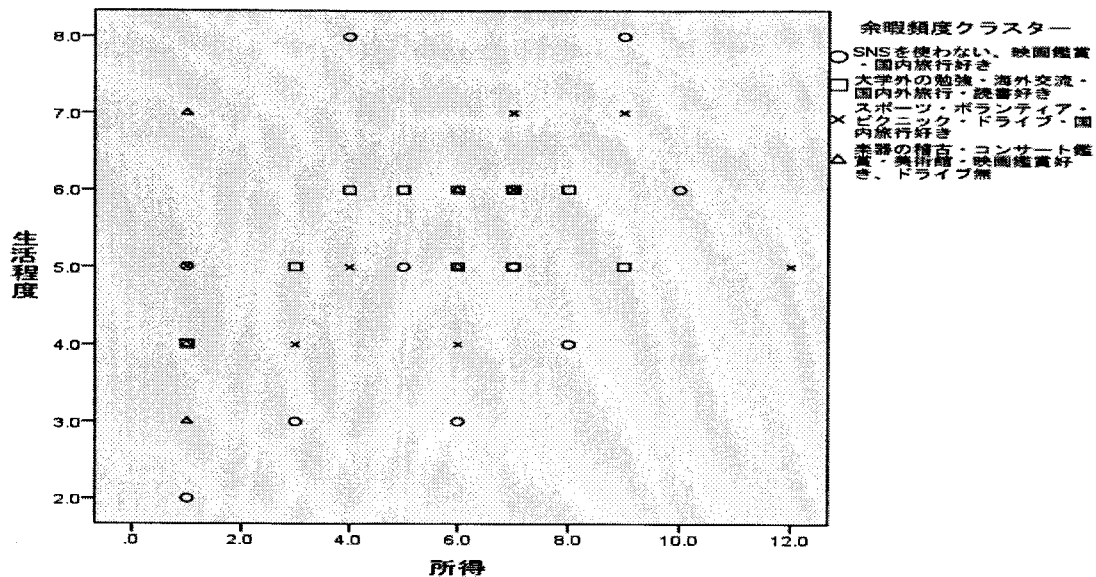


図14

文学部のアンケート調査では、学部1回生も含まれていたもので、専攻領域の学習を始めたころと、その数年後の学生の所得と生活程度認識や娯楽の嗜好の違いが見られるかもしれないと考え、学部1回生と学部2回生以上の2つのグループに分けて分析を行った。

ショッピングや映画館、国内外旅行・ドライブという余暇に関しては、各クラスター間で頻度に大きな差が出なかったのが、文学部2回生以上の特徴である。また余暇頻度別所得と生活程度認識の散布図では、全体的に右上がりではあるが、クラスター2が所得に関わらず生活程度を中レベルと回答している。また父の出身学部で最も多かったのが、理工・数学の10人、次いで経済学の9人で高校普通科と続く。母の出身学部では文学部の10人が最多で、以下外国語、教育、商学と続く。最も平均バイト収入が多いのがクラスター2であり、所得平均値はクラスター1, 2ともに同じであった。クラスター3は最も平均所得が高く、バイト収入がクラスター4と並んで最も少ないのが特徴である。クラスター4は最も平均所得も低い。文学部の各クラスターの特徴を見るかぎり、どのクラスターの余暇活動も等しく費用が掛かるように見受けられる。そのような、どのクラスターも余暇活動が活発な場合、バイト収入や家庭所得などの資金力との関連で余暇活動と生活程度認識の関係を解釈することはできない。

文学部 1 回生

表 15

クラスター	度数	特徴
1	9	大学外の勉強・ボランティア・海外交流・ピクニックドライブ好き
2	20	美術館・映画・読書・国内旅行好き
3	8	楽器の稽古以外の余暇は最低値

表16

余暇頻度クラスター と 性別 のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
余暇頻度クラスター	1 大学外の勉強・ボランティア海外交流・ピクニックドライブ好き	3	6	9
	2 美術館・映画・読書・国内旅行好き	7	13	20
	3 楽器の稽古以外の余暇は最低値	2	6	8
合計		12	25	37

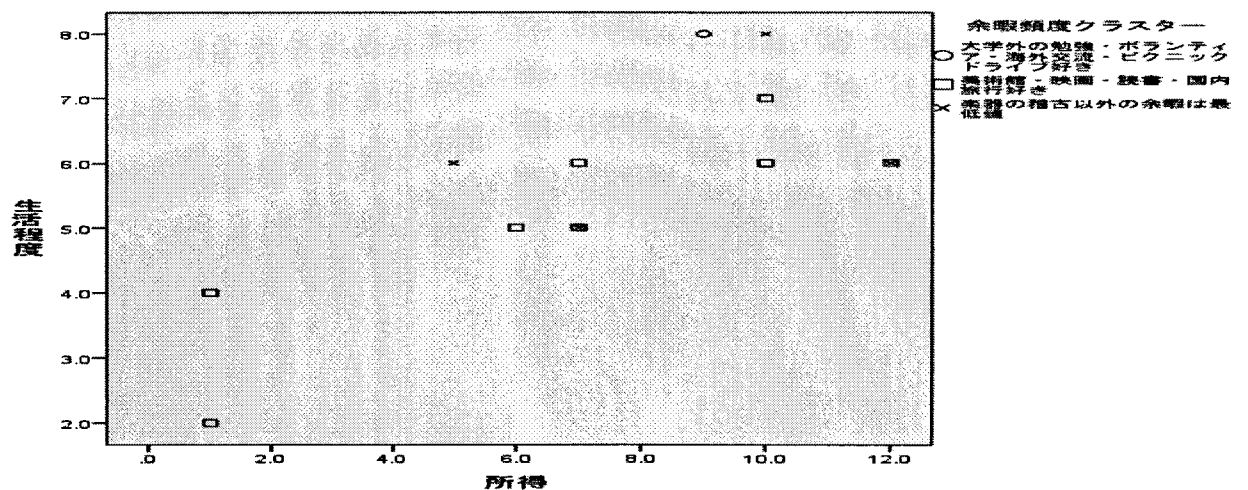


図15

文学部1回生の特徴は、どのクラスターも所得と生活程度認識の散布図において右上がり  
に分布していることである。最も家庭収入及びバイト収入の平均値が高いのはクラスター2  
であるが、クラスター1と2どちらの余暇も費用が掛かるように見受けられる上、最も余暇  
活動が充実していないクラスター3は家庭収入・バイト収入の平均値はともにクラスター1

より多い。金銭面と余暇活動の活発さを関連付けることはできない。父の出身学部は最も多いのが8人で理工・数学で、商学・法学が続いていく。母の出身学部は文学部が10人で圧倒的に多く、次いで家政科となっている。

また文学部1回生と文学部2回生以上で測ったそれぞれの、所得と生活程度認識の相関係数を見てみよう（次ページの図16）。この図で明らかなおとおり、1回生の方が格段に強い相関を現している。これは、文学部に入学以後、学部での勉強や活動を通して思考様式が、生活程度を判断する上で、余暇活動の充実度など自分の満足感を重視する方に変化したからではないだろうか。他学部の1回生も同じように調査し、2回生以上より、所得と生活程度認識の相関係数が強くなった場合、大学生の価値観・思考様式が高校時代から明らかに変化していると確実に言えるだろう。

#### 小括

相関係数において正反対の数値を示した商学部と国際学部について、特に「文化資本」が関連すると思われる「読書」の傾向を示す学生に関する所得と生活程度認識（生活程度ジャッジ）の散布図（次ページの図 17, 18）を作成した。結果として「美術館来館」に関しては、行う学生も行っていない学生も散布図の傾きに違いはなく、学部間、所得層間にも違いは見られなかった。しかし「読書」に関しては、1 か月 1 回以上の頻度で読書するという学生は、低い所得層でも生活程度認識を高く回答していることが見て取れた。この「読書」はここまで調査した 7 学部の分析を通して見ても、国際学部と文学部以外では低所得層の生活程度認識を上昇させる作用があるのではないかと考えた。余暇頻度クラスター別所得と生活程度認識の散布図において、生活程度を中クラスと回答している低所得層の属する余暇頻度クラスターは、国際学部、文学部、理工学部以外では読書をよくしているのが特徴であり、両者の相関係数もマイナスの値であるからだ。（相関係数：読書—生活程度認識 文学部：-.273 ( $p<.05$ ) 理工学部：-.260 ( $p<.05$ ) 経済学部：-.011（有意でない） 法学部：-.213（有意でない））

つづいて国際学部と文学部 1 回生以外の各学部を通して、海外交流とボランティアは頻度に有意な相関が見られた。

また家庭収入の低さが、学生のバイトを活発化させ余暇活動も活発化させることが分かった。そしてその活発な余暇が生活程度認識を上昇させているようだ。しかし国際学部や文学部（1 回生および 2 回生以上）のように各クラスターすべてでそれぞれで余暇行動に

図16 文学部1回生と2回生以上の所得と生活程度認識の相関係数

文学部1回生 相関分析		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.762**
	生活程度	.762**	1
有意確率 (両側)	所得		.000
	生活程度	.000	
度数	所得	18	17
	生活程度	17	34

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

文学部2回生以上 相関分析		所得	生活程度
Pearson の相関係数	所得	1	.425**
	生活程度	.425**	1
有意確率 (両側)	所得		.006
	生活程度	.006	
度数	所得	40	40
	生活程度	40	60

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

図 19 各学部「将来の働き方」10 項目の因子分析結果—因子負荷量一覧

(主因子法で、因子間に相関を想定している、プロマックス回転で行っている。)

商学部

	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
実力発揮責任ある仕事	.82	.38	.17	.70
仕事集中出世	.70	.38	-.21	.58
自分の特技を仕事に	.63	.27	-.01	.40
同僚との関係も家族並み	.43	-.03	.34	.29
生活に困らない程度の金	-.17	-.80	.34	.67
お金持ちになる	.52	.62	.03	.50
海外勤務したい	.33	.43	-.18	.23
地元、地域密着型の仕事	-.00	-.28	.64	.42
仕事程々、自分の時間大切	-.07	-.15	.47	.29
社会貢献できる仕事	.32	-.03	.46	.24
因子寄与率	2.28	1.68	1.17	5.13

法学部

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
お金持ちになる	.72	.36	.02	-.10	.614
生活に困らない程度の金	-.70	-.18	-.16	.52	.604
仕事集中出世	.58	.87	.17	-.47	.791
実力発揮責任ある仕事	.50	.77	.28	-.62	.704
同僚との関係も家族並み	-.00	.30	.10	-.02	.125
自分の特技を仕事に	.08	.23	.71	-.08	.516
海外勤務したい	.70	.04	.54	-.10	.306
社会貢献できる仕事	.13	.26	.42	-.09	.201
仕事程々、自分の時間大切	-.30	-.25	.00	.64	.421
地元、地域密着型の仕事	-.01	-.11	-.09	.29	.112
因子寄与率	1.72	1.80	1.13	1.40	6.05

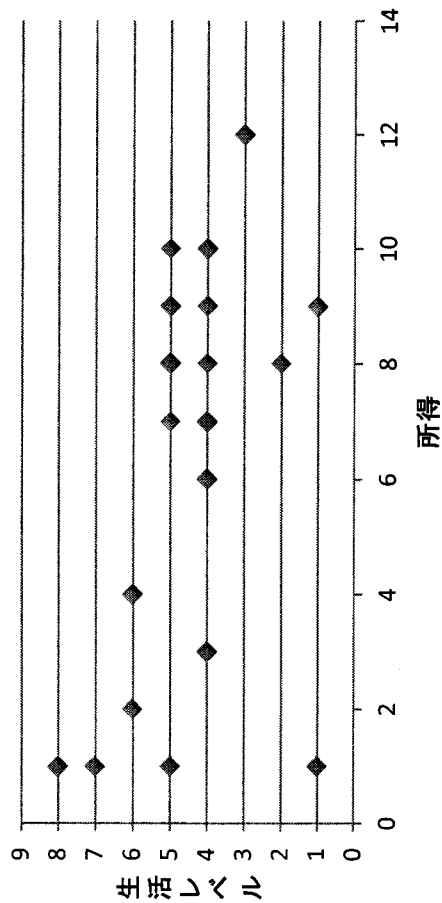
経済学部

	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
仕事集中出世	.92	.42	-.28	.854
お金持ちになる	.58	.19	-.08	.352
実力発揮責任ある仕事	.59	.77	-.40	.682
社会貢献できる仕事	.10	.65	-.04	.470
自分の特技を仕事に	.25	.42	-.12	.181
同僚との関係も家族並み	.10	.34	.04	.133
海外勤務したい	.30	.25	-.63	.414
地元、地域密着型の仕事	-.03	-.05	.60	.397
仕事程々、自分の時間大切	-.05	.01	.45	.222
生活に困らない程度の金	-.28	-.03	.32	.181
因子寄与率	1.782	1.576	1.323	4.681

国際学部

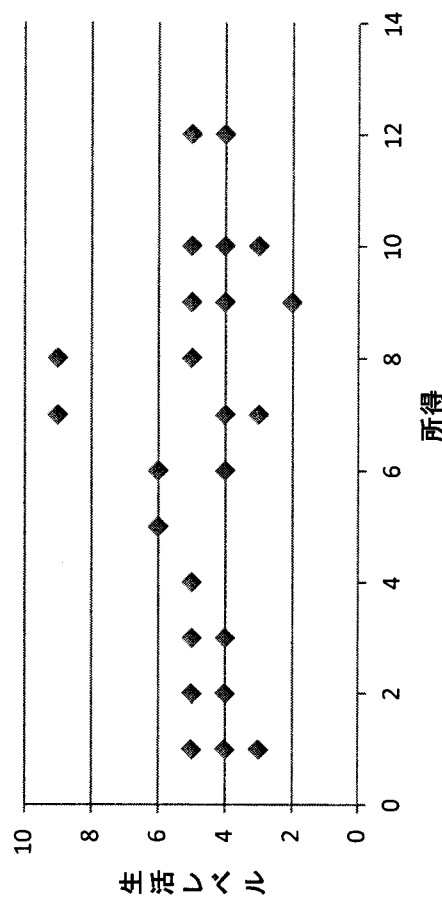
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
仕事集中出世	.83	.46	-.09	-.46	.837
実力発揮責任ある仕事	.64	.11	-.08	-.13	.442
自分の特技を仕事に	.55	.09	.26	.10	.362
同僚との関係も家族並み	.42	.19	-.03	-.02	.189
社会貢献できる仕事	.41	-.04	.29	.31	.317
海外勤務したい	.28	.24	-.01	.11	.167
お金持ちになる	.16	.86	-.09	-.47	.763
仕事程々、自分の時間大切	.20	.30	.16	-.01	.141
地元、地域密着型の仕事	.03	.04	.76	.11	.637
生活に困らない程度の金	-.07	-.21	.06	.53	.293
因子寄与率	1.90	1.21	.81	.86	4.78

# 国際学部～読書1ヶ月1回以上



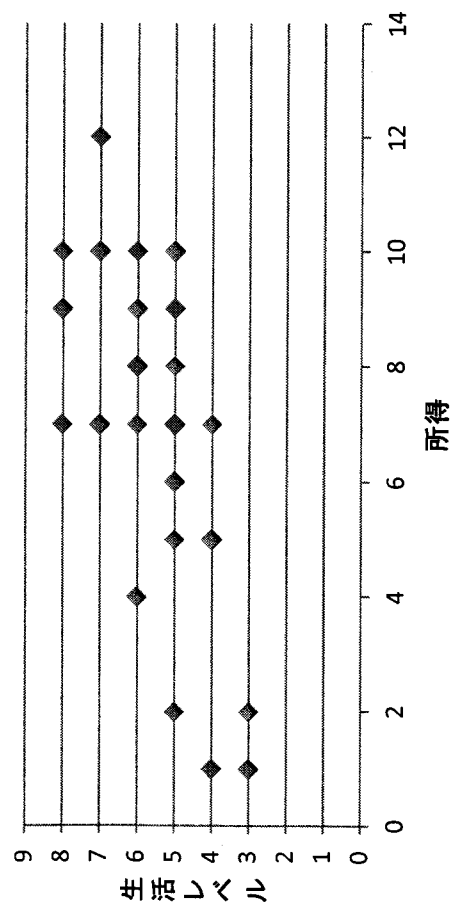
↑ ↓ 図 17

# 国際学部～読書1年に4・6回以下

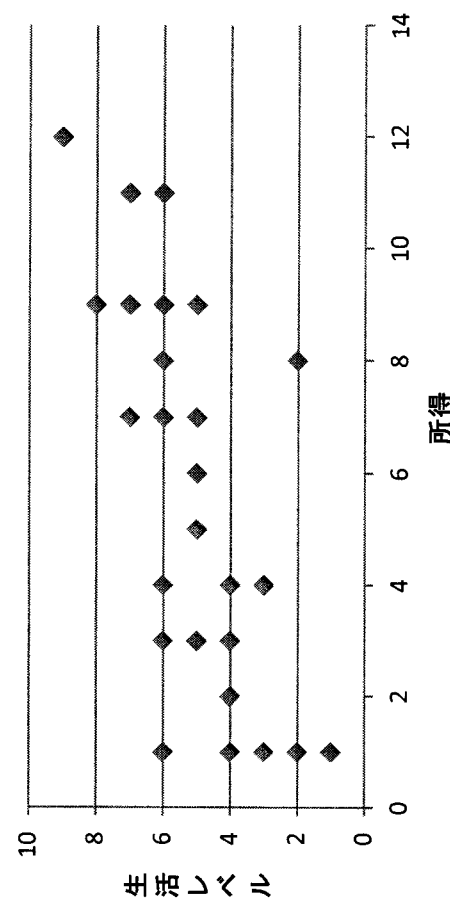


↑ ↓ 図 18

# 商学部～読書頻度1ヶ月1回以上



# 商学部～読書1年に4・6回以下



活発なケースであれば、資金的な要素は余暇行動と生活程度認識に関連しない。ゆえに“多趣味”ということが学部の特徴と解釈される。

また親の出身学部については、父親に関して法学部での調査以外では、理工・数学部や商・経済学部の出身が多い。母親に関しては、現在の学部生の母親は女子大生ブームの世代でもあり、高校普通科出身は減少していったようだ。しかし出身学部は文学部が圧倒的に多かった。

### 「将来の働き方」の因子分析結果

将来の「働き方」に関して質問したこの 10 項目は、学部の特徴・特性によってライフスタイルに対する考え方も変わってくるのではないかと考え設けたものである。質問は、「仕事は程々で自分や家族の時間を優先する」、「社会貢献できる仕事に就く」、「お金持ちになる」、「地元や地域密着型の仕事に就く」、「海外勤務ができる仕事に就く」、「自分のやりたいこと、特技を仕事にする」、「同僚との人間関係も家族と同程度に重視する」、「実力を発揮し、責任ある仕事をする」、「仕事に集中し出世していきたい」、「生活に困らない程度の経済力で良い」という以上の 10 項目である。これらの質問に－5：そうする～1：全くそうしたくない－という 5 点尺度に回答してもらい、その選択した回答の得点の分布傾向から、裏にある因子つまりどのような潜在的な変数が影響を与えているのかを探るため因子分析を行う。質問文に関しては、執筆者自身で独自に設計したものであり、妥当性が検査されたわけではないが学部ごとに特色が出たので紹介する。しかし残念ながら社会学部、理工学部、文学部についてはサンプル数が足りなかったため、因子分析を算出できなかった。詳細な数値は前ページの図 19 参照。

### 商学部

表 17

因子	ネーミング	特徴・構成因子
1	仕事バリバリ	実力発揮責任・仕事集中出世・特技・同僚家族同等
2	悠々海外でリッチに	金持ちに・海外勤務・反-生活に困らない程度
3	地元で社会の為もしながら生活に困らない程度の経済力	地元・仕事程々自分の時間・社会貢献

法学部

表 18

因子	ネーミング	特徴・構成因子
1	資金力	反「生活に困らない」程度の経済力で満足
2	仕事バリバリ	仕事集中出世・実力発揮責任・同僚家族同等・生活に困らない程度
3	海外協力&特技	特技・海外勤務・社会貢献
4	地元で悠々not 社会貢献	仕事程々自分の時間・地元・金持ち・生活に困らない程度

経済学部

表 19

因子	ネーミング	特徴・構成因子
1	仕事バリバリ&稼ぐ	仕事集中出世・金持ち
2	社会の為仕事バリバリ	社会貢献・実力発揮責任・特技・同僚家族同等
3	地元で困らない経済力	地元・海外無・仕事程々自分の時間・生活に困らない程度

国際学部

表 20

因子	ネーミング	特徴・構成因子
1	仕事バリバリ&社会の為	仕事集中出世・実力発揮責任・特技・社会貢献・同僚家族同等
2	悠々&海外&リッチ	金持ち・仕事程々自分の時間・海外勤務
3	地元志向	地元
4	国際協力	生活に困らない程度・社会貢献・海外勤務

小括

全体的にいえることは、仕事をしっかりするという意思が法学部以外で第1因子に来ていることから分かるように、仕事は重視されているということである。商学部と国際学部では、第2因子が、「お金持ちになる」、「海外勤務ができる仕事に就く」、「仕事は程々



で自分や家族の時間を優先する」という因子で構成されており、仕事をしっかりするのは、悠々自適にリッチに暮らしながら、海外で仕事をする、という理想像があるものと推察できる。一方の経済学部は、「お金持ちになる」に「仕事に集中し出世していきたい」という因子を掛け合わせている唯一の学部である。金持ちになるには仕事に集中し出世しなければならない、と考えているところは非常に現実的で堅実的である。加えて実力発揮と社会貢献が1つの因子の中に存在するのは経済学部以外では国際学部だけである。この理由は、経済学の社会の捉え方にあるのではないだろうか。経済活動に関わるすべてのものをマクロ的視点で社会の中のサイクルの一つと位置付けて考えるので、一人が働くことが社会全体の利益につながるというイメージを持っているのかもしれない。また国際学部は3つの因子で海外勤務もありだと考えているが、経済学部はこの調査全体の中で特に海外志向が薄い。そのほかに国際学部は国際協力事業関連のプログラムが、近年充実してきており、それに積極的に参加する学生が一定数いるだけあって、「社会貢献」という項目の存在感があった学部であった。

そして今回アンケート調査を行った7学部すべてに共通して言えることは、地元勤務を希望する学生は合わせて、「仕事は程々で自分や家族の時間を優先する」、「社会貢献できる仕事に就く」、「生活に困らない程度の経済力で良い」を選択している。これは地元で地域振興の何らかの活動を行いながら、決して高望みせず、そこそこの生活を送ればよい、というライフスタイルの考え方の持ち主たちなのであろう。また、「仕事バリバリ」では同僚関係を家族と同程度に重視する傾向が見て取れる。そしてこれは第3章で紹介する秋学期アンケート調査結果からわかることだが、仕事における上昇志向の強い人は、人間関係などの社会性も非常に重視する傾向がはっきりとあるのである。

### 第3節 「行動様式」の国際比較：ポーランド・ウクライナ

#### 調査概要

調査期間：ポーランド（2012年6月～7月）、ウクライナ（2013年2月～3月）

対象：ポーランド・ウクライナに在住の教員の持つクラスの学生。学部や回生に留意はしていない。ポーランド（有効回答数74）、ウクライナ（有効回答数21）

調査方法：滞在中に出会った教員や指導教員である市川文彦教授の知人の教授に依頼した。

内容：余暇活動に関して17項目で質問している。また1ヶ月の余暇活動に対して使う金

額も質問した。

※ポーランド貨幣ズロチ (PLN) の円への換算は、調査を行った 2012 年 6 月のレートが約 30 円 (PLN/JPY) であったので、それで換算している。ウクライナは US ドルで回答されていたのでそのまま使用している。

#### ポーランド学生の余暇行動クラスター分析

表 21

クラスター	度数	特徴
1	10	レストラン・カフェで外食・TV ゲーム・ネット通信・読書
2	18	美術館来館コンサート楽器演奏・映画・スポーツドライブピクニック・身近な余暇まで多趣味
3	12	映画・美術館来館・スポーツ平均以上、ネット通信

表22

Cluster と Sex のクロス表

	Sex		合計
	man	woman	
Cluster レストラン・カフェで外食・TVゲーム・ネット通信・読書	2	8	10
美術館来館コンサート楽器演奏・映画・スポーツドライブピクニック・身近な余暇まで多趣味	4	14	18
映画・美術館来館・スポーツ平均以上、ネット通信	3	9	12
合計 (欠損 3 4)	9	31	40

この海外アンケート調査では、家庭の所得や生活程度認識などは聞いていないので、第3節のような分析はできないが、働きながら大学へ通うケースも珍しくない海外事情を鑑みて、仕事・アルバイトについて勤務形態を「Nothing・Part-time Job・Full-time Job」の3パターンで聞いている。13項目の余暇行動のクラスター分析でクラスター2が最も多趣味な学生が集まっているが、その学生たちは自宅学生で上記の3つの勤務形態のどれにも均等に分布している。そしてもちろん1ヶ月の余暇活動に使う平均金額はクラスター2が最も高かった。(クラスター1：¥4617、クラスター2：¥9107、クラスター3：¥7841) 勤務形態

別の1ヶ月の余暇活動費の平均では、働いていないグループは¥7556、パートタイムでは¥10604、フルタイムでは¥9262であった。そしてクラスター1にはフルタイムで働いている学生はいなかった。サンプル数が40と少なく断定的なことは言えないが、パートタイムや一度就職しているような学生は社会とのつながりが余暇の面でも活発になるといえるだろう。また将来海外で働くことに対する意欲について、(1 : strong hate ~ 5 : strong hope) の5点尺度で質問したところ、国際法律学科の学生が40人中9人いたことと、EUに加盟していることでより高賃金を求めてEU圏内の他国での仕事を求めているという背景もあって、ほとんどの学生が、“hope” か “strong hope” を選択した。

#### ウクライナ学生の余暇行動のクラスター分析

表 23

クラスター	度数	特徴
1	5	コンサート行かずに TV ゲーム、外食・読書・外出平均以下
2	4	映画・ショッピング・外食・読書に関心あり
3	7	スポーツ・演奏・ドライブ・ピクニック・国内外旅行と多趣味

表24

余暇頻度クラスター と Sex のクロス表

		Sex		合計
		man	woman	
余暇頻度クラスター	コンサート行かずにTVゲーム、外食・読書・外出平均以下	2	3	5
	映画・ショッピング・外食・読書に関心あり	0	4	4
	スポーツ・演奏・ドライブ・ピクニック・国内外旅行多趣味	0	7	7
合計		2	14	16

ウクライナ学生へのアンケート調査では、まず男女比が1 : 7と偏ってしまったことや、学部構成もコンピュータ1人、哲学3人、マネジメント12人となっており、もともとのサンプルが少ない上に大きな偏りがあるので、参考程度に紹介したい。まずウクライナ学生の特徴としては、ポーランド学生と違いアルバイトをしていないことが挙げられる。故に収入やキャリアの積み方の違いによって、余暇行動の活発さを説明しにくい結果となってい

る。クラスターごとの特徴を見ていくと、クラスター1が最もインドア派で1ヶ月の余暇活動費の出費も最も少ない。そしてクラスター3が最も多趣味で、構成人数も多く、余暇活動費の平均値はクラスター2にわずかに及ばないが（クラスター1：\$85.2、クラスター2：\$115.75、クラスター3：\$104.57）、標準偏差はクラスター3の方が小さい（クラスター2：\$79.743、クラスター3：\$60.038）。そして将来海外で働くことへの意欲を質問したところ、最も活発に余暇を行っているクラスター3であり、余暇活動費を多く支出している層が“hope”以上を選択していた。

ここで「世界価値観調査（World Values Survey）」のデータを引用しながら、3カ国の価値観について比較してみたい。まず「家族」「宗教」「仕事」「友人・知人」「余暇時間」「政治」のそれぞれについて生活にとってどの程度重要であるかを5点尺度できき、得点化したものを見てみる。

日本は「宗教」と「仕事」において60カ国中ワースト10入りしており、一方で「余暇時間」と「政治」でトップ10入りしている。ポーランドは「家族」「宗教」「仕事」を重視する傾向があるようだ。そしてウクライナは「家族」「仕事」「余暇時間」を重視しない傾向が見受けられる。60カ国全体の傾向としては、「宗教」「家族」「仕事」は生活の基盤として相互に密接に結びついているという因子分析結果が出ている。そして「友人・知人」と「余暇時間」も強い相関を持っている。故に前者の3つの項目をまとめて生活力因子、後者の2つをまとめて社交力因子と名付けて、60カ国をクラスター分けしている。

表 25 6つの領域に対する重要度平均点 3カ国比較

国名	家族	宗教	仕事	友人・知人	余暇時間	政治
日本	3.90	1.96	3.31	3.40	3.32	2.83
ポーランド	3.90	3.25	3.70	3.12	3.01	2.14
ウクライナ	3.79	2.61	3.37	3.23	2.85	2.26

（『世界 60 カ国価値観データブック』、電通総研/日本リサーチセンター、同友館、2004 年、p 9）

日本は 2000 年調査、ポーランド・ウクライナは 1995 年調査である。

その結果日本はクラスター1「人生達観型」に、ポーランドはクラスター3「人生不惑型」、ウクライナはクラスター5「人生彷徨型」に分類されている。クラスター1は西ヨーロッパ諸国中心の群で、経済力はあるのでそのゆとりを社交・余暇に向ける。クラスター

3 は社交性の低い内向的・保守的な傾向の国々という解釈がされている。クラスター5 は旧ソ連諸国の多い群であり、どの項目値も低くアイデンティティ模索中というネーミングである。幸福感や生活満足度の質問においても、「人生達観型」や北米やトルコが入った「人生活力型」が高い幸福度・満足度を示しており、「人生不惑型」は中間に、そして満足と不満の値が大きく2極化の傾向が見られる「人生彷徨型」は低い値を出している。これは国内の格差が大きいことの一つの表れであろうが、執筆者が行ったポーランド・ウクライナアンケート調査でも、海外で働くことに対して強い積極性が見られた。ポーランド人学生73名の内68名が将来ポーランド国外で働くことを希望しているのである。そしてウクライナもソ連崩壊後、欧州などからの外資導入をテコに経済成長してきたが2008年の世界金融危機と世界同時不況が直撃し、また政治の混乱などを経て徐々にGDP成長率は回復し上昇してきているが、相変わらず賃金水準は低く<sup>9</sup>、海外での仕事に活路を見出そうとしているのかもしれない。

表26

Poland：余暇頻度クラスターと work abroad のクロス表

	Work abroad			合計
	No idea	Hope	Strong hope	
余暇頻度 クラスター1	0	9	1	10
クラスター2	2	14	2	18
クラスター3	0	11	1	12
合計	2	34	4	40

<sup>9</sup> 『ARC レポートー経済・貿易・産業報告書ー2012/13 ウクライナ』、ARC 国別情勢研究会、2012年

表 2 7

Ukraine : 余暇頻度クラスター と work abroad のクロス表

		Work abroad					合計
		Strong hate	Hate	No idea	Hope	Strong hope	
余暇頻度	クラスター1	1	1	1	1	1	5
クラスター	クラスター2	0	0	2	0	2	4
ー	クラスター3	0	1	0	5	1	7
合計		1	2	3	6	4	16

#### 第 4 節 生活程度認識および階層帰属意識に関する先行研究

独自アンケート調査では、回答者に分かりやすいように、生活程度・レベルの認識として答えてもらったが、これは社会学では階層帰属意識と呼ばれている。この階層帰属意識について社会学では、高度経済成長期の日本人の「中」意識の増大と、その後の格差社会での「中」意識の持続について、その潜在的な因果構造を明らかにするアプローチが試みられてきたのでその先行研究を紹介する。

まず、直井道子<sup>10</sup>は、1975 年 SSM (Social Stratification and Social Mobility) 調査データを分析し、客観的な階層要因である年齢、学歴、従業上の地位、世帯年収、財産などが階層帰属意識の「中」意識を規定する決定的要因とはなっていないことを明らかにした。また、間々田孝夫<sup>11</sup>は「中」回答の比率の経時変化を収入を中心とした経済的要因の変化から探ったが、明確な関係性の説明には至らなかった。この階層帰属意識の因果構造に関して、現在も明確な説明には至っていない状況だがこれまでの先行研究において、「①高い所得や多い財産は自己のくらしむきをゆたかなものと評価させ、中の上の階層帰属意識を導きやすい。②しかし、高い所得や多い財産があっても、くらしむきをふつうと評価する人は中の下に帰属しやすい。③低い所得や財産の少ない人は自己のくらしむきを「貧しい」と評価しやすく、下の上や下の下への帰属意識を示しやすい。④所得が低かったり財産が

<sup>10</sup> 直井道子 「階層意識と階級意識」、富永健一（編）、『日本の階層構造』、東京大学出版会、1979 年、p372 - 373

<sup>11</sup> 間々田孝夫 「階層帰属意識」、原純輔（編）、『現代日本の階層構造 ②階層意識の動態』、東京大学出版会、1990 年、p23 - 45

少なくとも、くらしむきをふつうと評価する人は中の下に帰属しやすい。」<sup>12</sup>ということが言及されており、これは階層帰属意識が、自らの社会階層上の位置の認知ということだけでなく、生活状況に対する主観的評価にも影響されていることを示している。そして前田忠彦<sup>13</sup>が、階層帰属意識と生活満足度の関係性を検討し、因果モデルの適合度と因果効果の大きさから、生活満足度と階層帰属意識間の関係において、前者が後者に対して先行し、他変数の効果の媒介要因としてはたらくことを明らかにしている。そこで吉川徹<sup>14</sup>は生活満足度を説明変数として加えて「中」意識の趨勢をパス解析にて分析している。その結果、1975年の調査では、経済的社会的要因は関係なく、主観的変数である生活満足度を主要因とした＜浮遊する階層帰属意識＞の時代としている。次の1985年の調査では、収入や財産因子階層帰属意識を大きく規定しており、＜経済階層と主観的生活評価による階層帰属意識＞の時期であったと呼んでいる。続いて1995年の分析では、生活満足度、経済要因の効果の大きさは85年から維持されたまま、教育年数と現職威信の効果が増大した。故に＜多元的階層評価基準に基づく階層帰属意識＞と吉川は名付けている。

また、フランスの社会学者P. ブルデューは階層意識や社会的地位や経済的地位によって決まるだけでなく、自身の趣味や思考といった行動様式（ハビトゥス）によっても影響されていることを明らかにし、そしてその行動様式はその個人の出身階層における教育や環境によって習得され、それが遺産として世代間で継承されていくとした。しかしブルデューは出身階層とその個人の最終的な到達階層が異なっている場合については研究していない。そこで数土直紀<sup>15</sup>は、1955年から2005年までのSSM調査データを用いて、学歴と階層帰属意識の関係について調べている。その結果、出身階層から到達階層まで一貫して同じ階層に属していた人はその階層に強くコミットメントするが、出身階層と到達階層が異なる人は、その出身、到達どちらの階層に対してもコミットメントが弱いことをつきとめた。これは階層帰属意識を、個人が今まで積み重ねてきた経歴が統合化された階層意識、と考えることに一定の説得力を持つ。ゆえに大学進学率が上昇し、子の時代には高学

<sup>12</sup> 直井道子 「階層意識と階級意識」、富永健一（編）、『日本の階層構造』、東京大学出版会、1979年、p372 - 373

<sup>13</sup> 前田忠彦 「階層帰属意識と生活満足感」、間々田孝夫（編）『1995年SSM調査シリーズ6 現代日本の階層意識』、1995年SSM研究会、1998年、p89 - 112

<sup>14</sup> 吉川徹 「「中」意識の静かな変容—階層評価基準の時間的比較分析—」、『社会学評論』、1999年、50号（vol. 2）p216 - 230

<sup>15</sup> 数土直紀 「学歴移動と階層意識—継承される階層帰属意識—」、轟亮（編）、『2005年SSM調査シリーズ8 階層帰属意識の現在』、2005年SSM調査研究会、2008年、p1 - 36

歴の希少性が失われていても、父親が高学歴であることも意識するので、学歴が依然として高い象徴的価値を維持し続けるのだ。学歴の象徴的価値の下落がはっきりするためには、学歴構造の変化が1世代下にまでいきわたる時間が必要であったことが、数土の同研究により明らかになった。



### 第3章 所得水準と生活程度自己認識との乖離を巡って

#### 第1節 専攻領域別の価値観差異の動向

前章でも述べたが、春学期のアンケート調査では所得と生活程度認識の相関係数の値が7学部ごとに違ったことから、仮説3では、専攻する学問領域の違いなどによる価値観・傾向等の違いで、商学部は現実的思考でそれが生活程度認識での回答にも影響を与えた、という仮説を立てた。それを以下の順で検証していく。

1. 商学部と国際学部で価値観が違うことを「価値志向的精神作用尺度」を使用し検証する。
2. 上昇志向が強いと、現状に対する自己評価が厳しくなり、生活満足度・幸福感が縮小していくのではないだろうか。
3. 自己充足感が強いと生活満足度・幸福感が増幅され、生活程度認識（階級帰属意識）が上昇するのではないだろうか。

しかしこれらの仮説を検証していくその前に、商学部と国際学部を対象にしたこの秋学期のアンケート調査における、所得と生活程度認識の相関係数を確認したい。合わせて、両学部の家庭収入の平均値とヒストグラムも載せている。

前回調査と同じように、所得については、①400万円未満 ②400万円～450万円未満 ③450万円～500万円未満 ④500万円～550万円 ⑤550万円～600万円未満 ⑥600万円～700万円未満 ⑦700万円～850万円未満 ⑧850万円～1000万円未満 ⑨1000万円～1200万円未満 ⑩1200万円～2000万円未満 ⑪2000万円～3000万円 ⑫3000万円以上—という12段階で質問している。また生活程度認識に関しては、①上の上 ②上の中 ③上の下 ④中の上 ⑤中の中 ⑥中の下 ⑦下の上 ⑧下の中 ⑨下の下—という9段階で質問している。

#### 調査概要

調査期間：2013年11月

調査対象：商学部（有効回答数136）、国際学部（有効回答数58）

方法：両学部の教員に個人的に調査依頼を行い、講義の時間を15分ほどいただき、その講義中に配布・回答・回収した。

内容：両学部の価値観の違いを明らかにするために、「価値志向的精神作用尺度」や「達成動機尺度」を使用し、質問票を作成した。

商学部

図1 所得と生活程度認識の相関

相関係数		収入	生活程度認識
Pearson の相関係数	収入	1	.598**
	生活程度認識	.598**	1
有意確率 (両側)	収入		.000
	生活程度認識	.000	
N	収入	100	100
	生活程度認識	100	123

\*\*．相関係数は 1% 水準で有意 (両側) 。

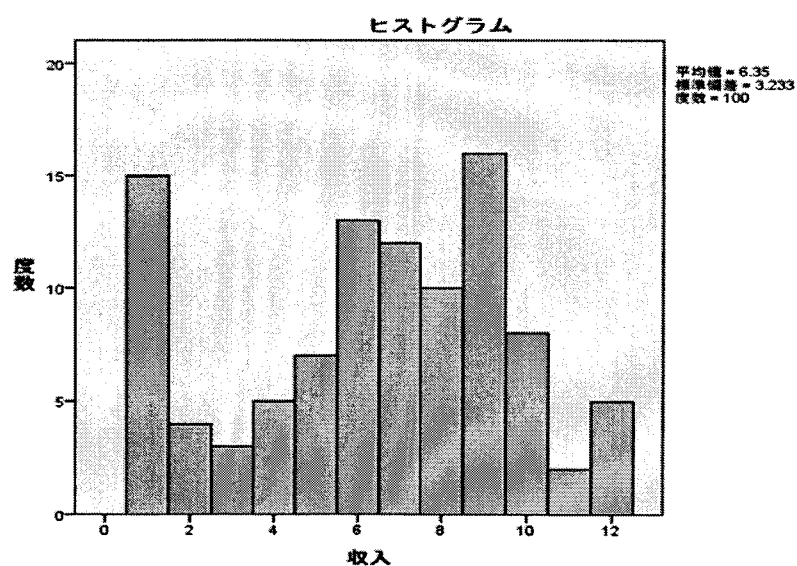


図2

国際学部

図3 所得と生活程度認識の相関

相関係数		収入	生活程度認識
Pearson の相関係数	収入	1	.747**
	生活程度認識	.747**	1
有意確率 (両側)	収入		.000
	生活程度認識	.000	
N	収入	38	37
	生活程度認識	37	49

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

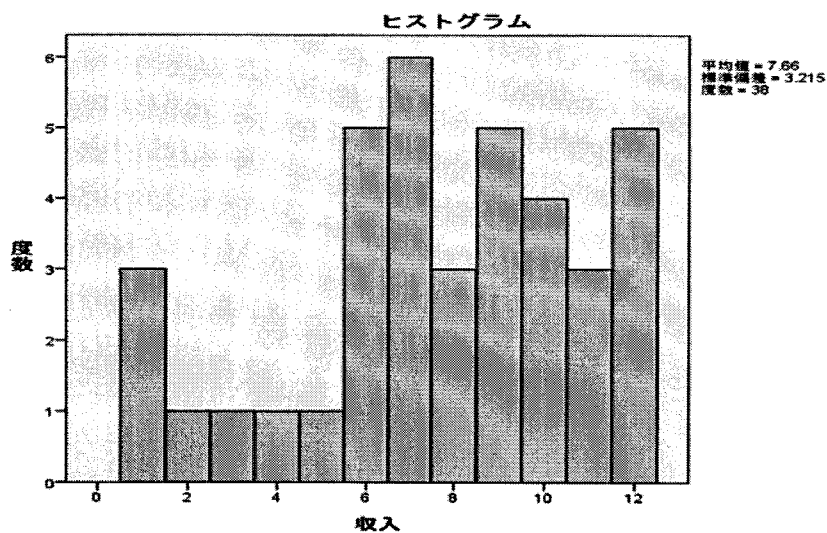
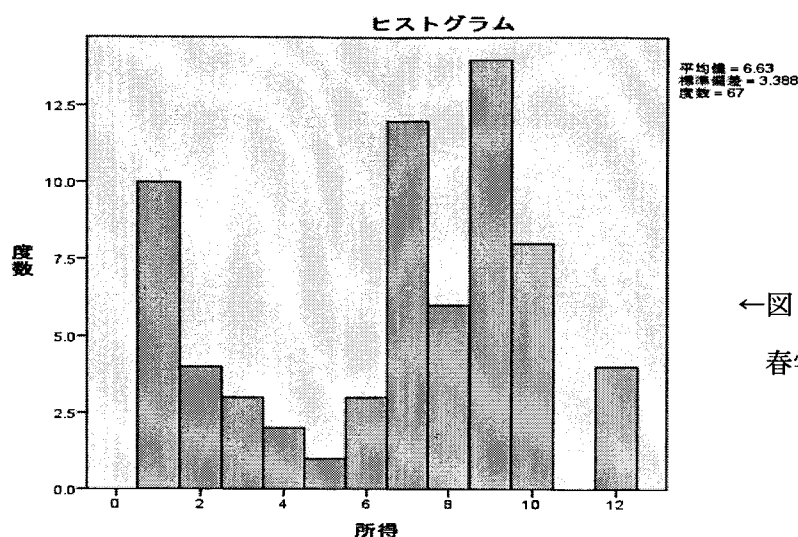


図4

秋のアンケート調査では相関係数の強さが、商学部と国際学部で春の調査とは反転してしまった。収入のヒストグラムからも分かるように、国際学部のほうが高収入層の割合が多い。これにより仮説3の学部それぞれの専攻領域が持つ特色ゆえに収入と生活程度認識の相関に違いが出るという仮説自体が崩された。

これは先行研究が示す通り、生活程度認識（階層帰属意識）は収入や社会的地位に、より強く影響されるということなのだろうか。そこで春学期アンケート調査に参加した国際

学部生の家庭収入の平均値を求めてみた。



←図 5

春学期国際学部の家庭収入

結果は、平均値6.63であり、春学期アンケート調査での商学部家庭収入平均値（6.39）や今回の秋学期アンケート調査での商学部生家庭収入平均値（6.35）とあまり変わらなかった。バイト収入に関しても同じことが言えた。

やはりこれは、経済資本以外の何らかの要因があると考え、商学部と国際学部という学問領域の違いなどによって、何らかの価値観・傾向等の違いがあるのかということを、酒井恵子・久野雅樹が作成した「価値志向的精神作用尺度」を使って分析していくこととする。

今回のアンケート調査で使用した価値志向的精神作用尺度とは、スプレンジャー<sup>16</sup>が提唱する6つの普遍的価値（理論・経済・美・宗教・社会・権力）を個人がどの程度志向し、体験しているかを測定するために、酒井・久野が作成したものである。6精神作用の内容を簡単に示すと以下の様になる。「理論：認識し抽象化し体系化する。経済：損失を抑え効率よく利益を得る。美：印象を表現へと形成する。宗教：自己と世界との関係において生の全体的意義を追求する。社会：他者を愛し共感し献身する。権力：他者より優位に立ち指導・支配する」<sup>17</sup>。今回の調査では紙幅の関係で理論・経済・社会・権力の4つの項目について質問した。

また、収入、生活程度認識、4つの価値志向精神作用尺度と2つの達成動機尺度の相関

<sup>16</sup> E・シュプランガー 『文化と性格の諸類型』、1921/1961年、(伊勢田耀子訳)、明治図書

<sup>17</sup> 酒井恵子、久野雅樹 「価値志向的精神作用尺度の形成」、『教育心理学研究』、1997年、45号、p 388 - 395

関係を、次ページの図6～9に掲載した。

表1 4つの価値尺度平均点比較

商学部			国際学部		
	平均	標準偏差		平均	標準偏差
理論	3.30	0.88	理論	3.30	0.94
経済	3.46	0.90	経済	3.48	0.98
権力	3.12	0.93	権力	3.14	1.05
社会	3.65	0.86	社会	3.69	0.92

表2

商学部：記述統計量	度数		平均値		標準 偏差	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
収入	58	40	6.224	6.5	3.4133	3.0382
生活程度認識	61	59	5.23	5.39	1.6673	1.2179
理論平均	66	67	3.4379	3.19	0.5336	0.50709
経済平均	66	67	3.4909	3.4205	0.44086	0.47719
権力平均	66	67	3.2797	2.9628	0.4297	0.54809
社会平均	66	67	3.5961	3.7226	0.59507	0.59897
有効なケースの数 (リストごと)	58	40				

表3

国際学部：記述統計量	度数		平均値		標準 偏差	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
収入	19	18	7.11	8	3.43	2.91
生活程度認識	20	28	5.1	5.61	1.586	0.916
理論平均	21	31	3.381	3.1935	0.69342	0.65825
経済平均	21	31	3.5243	3.4671	0.47743	0.42895
権力平均	21	31	3.3329	2.9758	0.47032	0.55122
社会平均	21	31	3.6957	3.6942	0.50155	0.62248
有効なケースの数 (リストごと)	17	17				

仮説としては、より理論的であったり経済的思考であるほうが、生活程度認識が客観的に現実に即す、というものであった。故に今回の調査では国際学部の方が家庭の収入と生

図6 商学部：男性 相関分析<sup>a</sup>

	収入	生活程度認識	理論平均	経済平均	権力平均	社会平均	自己充実平均	競争的平均
収入								
Pearson の相関係数	1	.705**	-.149	-.167	-.127	.031	-.022	-.139
有意確率 (両側)		.000	.264	.210	.341	.817	.871	.300
度数	58	58	58	58	58	58	58	58
生活程度認識								
Pearson の相関係数	.705**	1	-.025	-.120	-.235	-.076	-.194	-.167
有意確率 (両側)	.000		.851	.356	.069	.562	.133	.199
度数	58	61	61	61	61	61	61	61
理論平均								
Pearson の相関係数	-.149	-.025	1	.517**	.298*	.088	.282*	.361**
有意確率 (両側)	.264	.851		.000	.015	.484	.022	.003
度数	58	61	66	66	66	66	66	66
経済平均								
Pearson の相関係数	-.167	-.120	.517**	1	.402**	.338**	.537**	.528**
有意確率 (両側)	.210	.356	.000	.001	.001	.006	.000	.000
度数	58	61	66	66	66	66	66	66
権力平均								
Pearson の相関係数	-.127	-.235	.298*	.402**	1	.332*	.359**	.475**
有意確率 (両側)	.341	.069	.015	.001		.006	.003	.000
度数	58	61	66	66	66	66	66	66
社会平均								
Pearson の相関係数	.031	-.076	.088	.338**	.332**	1	.627**	.438**
有意確率 (両側)	.817	.562	.484	.006	.006		.000	.000
度数	58	61	66	66	66	66	66	66
自己充実平均								
Pearson の相関係数	-.022	-.194	.282*	.537**	.359**	.627**	1	.639**
有意確率 (両側)	.871	.133	.022	.000	.003	.000		.000
度数	58	61	66	66	66	66	66	66
競争的平均								
Pearson の相関係数	-.139	-.167	.361**	.528**	.475**	.438**	.639**	1
有意確率 (両側)	.300	.199	.003	.000	.000	.000	.000	
度数	58	61	66	66	66	66	66	66

図7 国際学部：男性 相関分析\*

	収入	生活程度認識	理論平均	経済平均	権力平均	社会平均	自己充実平均	競争的平均
収入								
Pearson の相関係数	1	.771**	.103	.116	.077	.078	-.052	.001
有意確率 (両側)		.000	.694	.659	.768	.767	.844	.997
度数	19	19	17	17	17	17	17	17
生活程度認識								
Pearson の相関係数	.771**	1	-.117	-.068	-.258	.263	.239	-.134
有意確率 (両側)	.000		.644	.789	.301	.292	.340	.596
度数	19	20	18	18	18	18	18	18
理論平均								
Pearson の相関係数	.103	-.117	1	.201	.109	.190	-.105	.225
有意確率 (両側)	.694	.644		.382	.639	.411	.650	.326
度数	17	18	21	21	21	21	21	21
経済平均								
Pearson の相関係数	.116	-.068	.201	1	.017	.550**	.374	.286
有意確率 (両側)	.659	.789	.382		.941	.010	.094	.209
度数	17	18	21	21	21	21	21	21
権力平均								
Pearson の相関係数	.077	-.258	.109	.017	1	.048	.188	.670**
有意確率 (両側)	.768	.301	.639	.941		.838	.413	.001
度数	17	18	21	21	21	21	21	21
社会平均								
Pearson の相関係数	.078	.263	.190	.550**	.048	1	.629**	.003
有意確率 (両側)	.767	.292	.411	.010	.838		.002	.991
度数	17	18	21	21	21	21	21	21
自己充実達成動機平均								
Pearson の相関係数	-.052	.239	-.105	.374	.188	.629**	1	.429
有意確率 (両側)	.844	.340	.650	.094	.413	.002		.052
度数	17	18	21	21	21	21	21	21
競争的達成動機平均								
Pearson の相関係数	.001	-.134	.225	.286	.670**	.003	.429	1
有意確率 (両側)	.997	.596	.326	.209	.001	.991	.052	
度数	17	18	21	21	21	21	21	21

図8 商学部：女性 相関分析<sup>a</sup>

	収入	生活程度認識	理論平均	経済平均	権力平均	社会平均	自己充実平均	競争的平均
収入								
Pearson の相関係数	1	.412**	.390*	.204	.335*	.114	.222	.362*
有意確率 (両側)		.008	.013	.207	.034	.484	.169	.022
度数	40	40	40	40	40	40	40	40
生活程度認識								
Pearson の相関係数	.412**	1	.073	.302*	.214	.360**	.169	.323*
有意確率 (両側)	.008		.580	.020	.103	.005	.200	.013
度数	40	59	59	59	59	59	59	59
理論平均								
Pearson の相関係数	.390*	.073	1	.388**	.561**	.436**	.450**	.518**
有意確率 (両側)	.013	.580		.001	.000	.000	.000	.000
度数	40	59	67	67	67	67	67	67
経済平均								
Pearson の相関係数	.204	.302*	.388**	1	.058	.484**	.498**	.449**
有意確率 (両側)	.207	.020	.001		.640	.000	.000	.000
度数	40	59	67	67	67	67	67	67
権力平均								
Pearson の相関係数	.335*	.214	.561**	.058	1	.129	.211	.496**
有意確率 (両側)	.034	.103	.000	.640		.299	.087	.000
度数	40	59	67	67	67	67	67	67
社会平均								
Pearson の相関係数	.114	.360**	.436**	.484**	.129	1	.676**	.393**
有意確率 (両側)	.484	.005	.000	.000	.299		.000	.001
度数	40	59	67	67	67	67	67	67
自己充実平均								
Pearson の相関係数	.222	.169	.450**	.498**	.211	.676**	1	.453**
有意確率 (両側)	.169	.200	.000	.000	.087	.000		.000
度数	40	59	67	67	67	67	67	67
競争的平均								
Pearson の相関係数	.362*	.323*	.518**	.449**	.496**	.393**	.453**	1
有意確率 (両側)	.022	.013	.000	.000	.000	.001	.000	
度数	40	59	67	67	67	67	67	67



図9 国際学部：女性 相関分析<sup>a</sup>

	収入	生活程度認識	理論平均	経済平均	権力平均	社会平均	自己充実平均	競争的平均
収入								
Pearson の相関係数	1	.657**	-.075	.688**	.084	.029	.062	.238
有意確率 (両側)		.004	.769	.002	.740	.910	.807	.342
度数	18	17	18	18	18	18	18	18
生活程度認識								
Pearson の相関係数	.657**	1	.094	.245	.174	.156	.154	.310
有意確率 (両側)	.004		.635	.210	.375	.428	.435	.108
度数	17	28	28	28	28	28	28	28
理論平均								
Pearson の相関係数	-.075	.094	1	.069	.570**	.536**	.623**	.315
有意確率 (両側)	.769	.635		.713	.001	.002	.000	.085
度数	18	28	31	31	31	31	31	31
経済平均								
Pearson の相関係数	.688**	.245	.069	1	.140	-.032	.001	.339
有意確率 (両側)	.002	.210	.713		.454	.864	.997	.062
度数	18	28	31	31	31	31	31	31
権力平均								
Pearson の相関係数	.084	.174	.570**	.140	1	.488**	.610**	.759**
有意確率 (両側)	.740	.375	.001	.454		.005	.000	.000
度数	18	28	31	31	31	31	31	31
社会平均								
Pearson の相関係数	.029	.156	.536**	-.032	.488**	1	.750**	.259
有意確率 (両側)	.910	.428	.002	.864	.005		.000	.159
度数	18	28	31	31	31	31	31	31
自己充実達成動機平均								
Pearson の相関係数	.062	.154	.623**	.001	.610**	.750**	1	.450*
有意確率 (両側)	.807	.435	.000	.997	.000	.000		.011
度数	18	28	31	31	31	31	31	31
競争的達成動機平均								
Pearson の相関係数	.238	.310	.315	.339	.759**	.259	.450*	1
有意確率 (両側)	.342	.108	.085	.062	.000	.159	.011	
度数	18	28	31	31	31	31	31	31

生活程度認識の相関が強かったので、国際学部の方がこれら価値志向精神尺度の値が大きいというのは、仮説どおりであるといえよう。

しかし、4つの価値志向的精神作用尺度（理論・経済・権力・社会）および達成動機尺度の平均値と家庭の年収、生活程度認識との相関を男女別に見てみると、それらの変数と生活程度認識で有意な相関関係が表れたのは女子学生だけで、男子学生においては商学部、国際学部ともに見られなかった。そこでそれらの変数について、平均値を男女別・学部別にみてみた。概していうと、各価値志向的精神作用の平均値は男子の方が高かった。このことから特に理論分野や経済分野の価値志向尺度で高い値を示すほど、収入と生活程度認識の相関が強まるという仮説が正しいと考えられる。また商学部は男女問わず、4つの価値志向的精神作用や達成動機尺度が互いに相関関係にあり、有意な相関を示した数は商学部の方が断然多かった。

しかしこの女子の方が4つの価値志向的精神作用尺度（理論・経済・権力・社会）と収入や生活程度認識度に有意な相関関係がありながら、その生活程度認識と家庭の収入の相関が男性よりも弱いのは何故なのだろうと考え、価値志向的精神尺度をクラスター分析し、そのクラスターごとそれぞれで、収入と生活程度認識の散布図・相関係数を求めてみた。

まず、すでに男女で収入と生活程度認識の相関に差があることは分かっているので、理論・経済・権力・社会の分野についての質問で測られた価値志向の度合いによって分けられた、商学部の3つのクラスター；1. 権力平均以上で社会性低し 2. 理論・経済・権力・社会すべて志向 3. 経済・社会平均で権力はなし、と国際学部の4つのクラスター；1. 理論と社会重視、経済と権力も平均以上 2. 高い社会性、理論と経済重視 3. 社会性重視 4. 4要素全て低いが経済は平均以上における相関関係を比較し、クラスター内での男女の生活程度認識の違いを散布図で表した。つぎにクラスターごとの収入と生活程度認識、4つの価値志向的精神作用尺度、達成動機尺度の相関関係を比較した。すると2つの学部内の各価値尺度クラスターごとに男女の散布図において、分布が違ってくるようになった。

表4 価値尺度クラスター：商学

クラスター番号	度数	特徴	収入と生活程度認識の散布図
1	59	権力平均以上で社会性低し	男子右上がり、女子水平
2	47	理論・経済・権力・社会すべて志向	男女とも右上がり
3	30	経済・社会平均で権力はなし	男子水平、女子少し右上がり

表5

価値尺度クラスターと性別のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
価値尺度クラスター	権力平均以上で社会性低し	30	28	58
	理論・経済・権力・社会すべて志向	27	20	47
	経済・社会平均で権力はなし	9	19	28
合計		66	67	133

商学部女子において散布図が明らかに右上がりになるのはクラスター2であるが、そのクラスターに属するのは女子全体の約1/3であるので、そこでの収入と生活程度認識の相関の強さが、商学部女子全体としては反映されなかったようだ。

そして商学部だけ見ると、権力志向は散布図が右上がりになる要因かと思受けられる。

表6 価値尺度クラスター：国際

クラスター番号	度数	特徴	収入と生活程度認識の散布図
1	15	理論と社会重視、経済と権力も平均以上	男女ともほぼ右上がり
2	12	高い社会性、理論と経済重視	男女ともに少し右上がり
3	25	社会性重視	男子やや右上がり、女子右上がり
4	1	4要素全て低いが経済は平均以上	度数1で分析不可能

表7

価値尺度4 と 性別 のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
価値尺度4	理論と社会重視、ただし経済と権力も平均以上	7	7	14
	高い社会性、理論と経済も重視	5	7	12
	社会性重視	9	16	25
	4要素全て低いが経済は平均以上	0	1	1
合計		21	31	52

一方の国際学部では、女子学生は半分以上がクラスター3に属しているが、このクラスターの散布図を見ると、男女ともに右上がりに分布している。この散布図が右上がりに分布するクラスターへの女性の所属割合の違いで、国際学部女子の方が所得と生活程度認識の相関が強まったのだと分かった。

国際学部をだけを見ると、度数1で散布図が作成できないクラスター4以外で、すべてのクラスターが右上がりの分布であるが、共通点は社会性の重視であるように見受けられる。

シュプランガー<sup>18</sup>によれば、社会的精神作用と権力的精神作用は、個人と社会との相互作用を前提としており、今回の調査でも“権力”と“社会”の相関が強かったのは必然であろう。今回、商学部生と国際学部生は同じ価値観の側面を権力志向として表したか、社会性として表したかで分かれたのではないだろうか。この違いこそが学部としての特色といえるのかもしれない。自由記述で所属する学部のイメージについて質問したが、商学部で多かったのが、実務的、優秀な学生が集まっている、自由である、であった。一方の国際学部におけるイメージは、社交的、グローバル志向、個性的、であった。商学部生は将来企業で働いていくことを考えて、リーダーシップや実力発揮していくことに意欲を今から持っていることが伺える。また国際学生は留学などを通して、海外交流や異文化の中でも通用するコミュニケーション力を鍛えていると察せられる。そのような学部の特色が今

<sup>18</sup>E・シュプランガー 『文化と性格の諸類型』、1921/1961年、(伊勢田耀子訳)、明治図書

回の結果に表れたのではないだろうか。

しかし女子学生の方が4つの価値志向的精神作用尺度（理論・経済・権力・社会）と収入や生活程度認識度に有意な相関関係がありながら、その生活程度認識と家庭の収入の相関が男性よりも弱い理由は不明である。

## 第2節 野心と幸福感

野心と自己充足感が生活満足度ひいては幸福感や生活程度認識にマイナスの影響を与えるのかということについて、この第2節では達成動機尺度の分析でもって見ていくことにする。またこの尺度は男女の違いも指摘されているので、男女別に平均値を出した。

この分析項目は堀野（1987）によって作成された達成動機測定尺度を使用している<sup>19</sup>。堀野は従来までの、社会的・文化的に価値があるとされることを成し遂げたいという欲求を表す「社会的達成欲求」に加えて、自分自身にとって価値のあることを成し遂げようという「個人的達成欲求」も重要であることを指摘し、この測定尺度を作成した。

表8 達成動機尺度平均点比較

商学部		
	平均	標準偏差
自己充實的達成動機	3.68	0.76
競争的達成動機	3.57	0.80
国際学部		
	平均	標準偏差
自己充實的達成動機	3.85	0.75
競争的達成動機	3.57	0.88

自己充実志向であるほど、ポジティブ・幸福感を感じ、競争意欲が強いほど現状に甘んじず現時点での満足度が低いという仮説を立てた。

<sup>19</sup> 堀野 緑 「達成動機の構造因子の分析—達成動機概念の再検討」、『教育心理学研究』、1987年、35号、p148 - 154

表9 男女別達成動機尺度平均点比較

達成動機尺度の平均と標準偏差：商学部 (N=136)				
	男子 (N=66)		女子 (N=70)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己充實的達成動機	3.65	0.81	3.72	0.71
競争的達成動機	3.72	0.81	3.41	0.79

達成動機尺度の平均と標準偏差：国際学部 (N=58)				
	男子 (N=23)		女子 (N=35)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己充實的達成動機	3.67	0.80	3.80	0.78
競争的達成動機	3.67	0.80	3.53	0.85

これらの数値を比較してみると、男性より女性のほうがより自己充実志向で、男性のほうがより競争達成動機が強いことは分かる。そして国際学部の方が概して数値が大きい。生活満足度と生活程度の関係は密接であることは前田によって明らかにされていたので、野心や競争意欲の高さが生活程度認識の低下にも繋がるかと思われたが、先の相関係数のグラフによると商学部女子で「経済」および「社会」の価値尺度と競争的達成動機尺度に関して生活程度認識と正の相関関係が見られている以外は、有意な結果は得られていない。

これは、野心や競争心は生活程度認識・満足感を引き下げる作用を持たないことを示している。また、商学部女子に限って言うと、「経済」的観念や競争心が強い者ほど、高い生活程度認識であり、高所得家庭出身であることが分かる。

ところで、堀野は達成動機に与えられていた従来の「社会的・文化的に価値のあるものとされてきたものを成し遂げること」という概念から、「他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機—競争的達成動機尺度」と「他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機—自己充實的達成動機」<sup>20</sup>という概念への転換を期して、この尺度を作成している。この定義に沿うなら、酒井たちが作成した「権力」は堀野の「競争的達成動機」とリンクさせることができるのではないだろうか。であるなら、商学部男子の「権力」と競争的達成動機の相関係数が国際学部男女及び商学部女子より上回ったことが説明できるだろう。そして商学部生は自己実現も社会的成功もより強く望んでいることが、自己充実達成動機平均値と競争的達成動機平均値の相関が国際学部より強いことからうかがえる。

<sup>20</sup> 堀野 緑、森 和代 「抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因」、『教育心理学研究』、1991年、39号、p308-315

しかし結論としては、この2つの達成動機尺度を野心の変数と解釈して、幸福感にマイナスの影響を与えるとは言えない。なぜなら唯一、競争的達成動機尺度平均値と生活程度認識について相関関係のある商学部女子のデータを見ていても、プラスの影響（.323,  $p=.013$ ）があるからだ。しかし男子では、有意ではないが、マイナスか0に近い相関係数が出ており、両者の相関程度において男女差が生じる問題であるようだ。

### 第3節 科目選好と価値観の学部間比較

また価値志向的精神作用尺度は教科・職種興味との間に相関関係があることを酒井・久野は明らかにしている。そこで学生の高校時代の得意だった科目、好きだった科目について、回答数制限なしで質問を行い、その結果をクラスター分析した。そしてクラスター分析されてできた群の傾向に学部間で差異があるのかを探り、そこから“理論”“経済”“権力”“社会”の価値観への親和性を2つの学部それぞれがどのように持っているのかを分析していく。

表10 好きな教科クラスター：商学部

クラスター	度数	特徴・選好科目
1	29	古典・日本史・社会科、倫理好き
2	58	理数・道徳・宗教好きで倫理平均以上、体育好きでない
3	29	理数・美術・音楽・体育好き
4	20	国語・古典・英語・世界史好き、社会科・美・音平均以上

表11 選好教科クラスター：国際学部

クラスター	度数	特徴・選好科目
1	20	どの教科も平均以下
2	7	美術・音楽・体育好き
3	7	英語・理数・地理好き、日本史好きでない
4	8	国語・日本史・世界史好き、体育好きでない
5	10	国語・古典・美術・音楽好き、道徳・宗教も平均値以上
6	6	古典・地理・社会科全般・道徳・宗教好き、英語好きでない

商学部では、日本史派と世界史派に分かれたが、国際学部ではそうではなかった。しかし両学部ともに、日本史および世界史とそれを除く残りの社会科全般で好みが分かれる傾向にあるようだ。そして商学部は理数系科目を好む傾向が商学部より強いとかがえる。商学部は第2章の余暇頻度クラスター分析でもそうだったが、クラスター数が多く、似通った者同士でのグループ分けがしにくい。自由記述で質問した学部のイメージに個性的な人が多い、という回答が多数あったように、高校時代から皆がばらばらの趣味を持つ傾向があるようだ。また、美術・音楽についてはよくセットで回答されていた。

酒井・久野は価値志向的精神作用尺度と教科の好みの関連性について言及しており、英語、数学、国語、理科、社会科、音楽、美術、体育の8教科の好みを“5好き”～“1嫌い”の5件法で回答を求め、そのそれぞれの教科の好みの値と価値志向的精神作用尺度の相関係数を求めている。それによると“理論”は理科と相関があり、法則性やメカニズムへの関心が働いているとしている。そして“経済”はどの教科とも関連性は見られず、これは今回使用している尺度が高次の精神作用でなく生活習慣のレベル（計画性、勤勉さなど）を問うものであったことが原因として考えられる。“権力”と教科の好みとは全般的に相関が低い、音楽・美術とはある程度の相関が見られた。“社会”は音楽との相関が見られ、あとは英語・美術ともある程度の相関が見られた。

これらのことを念頭に置き、今回のアンケート調査の結果をしてみようと思う。ただし、教科の好みについて5件法で求めておらず、高校時代好きだった、興味があつた、得意だった科目を回答数無制限で答えてもらっている。それゆえ“1好きだった”―“0無回答”としている。ここから理数科系目、美術・音楽、学部間で違いが出た世界史と日本史について見ていく。

まず、商学部で見られた“世界史派”と“日本史派”であるが、家庭収入の分布に大きな違いは無く、両派の背景に親の収入やそれに伴う社会的地位の違いというものはない。

理数系科目に関しても、両学部ともに各クラスターから均等に嗜好が認められており、“理論”との関連性は見受けられなかった。

しかし、美術を好きだと回答する学生は商学部のクラスター1（権力平均で社会性低し）から半数出ており、これは酒井たちの明らかにした通り、“権力”と美術の親和性と受けとれる。美術作品には権威など権力と関連する様々な価値が付随しているので、それゆえに



「権力」志向と相性が良いのではないだろうか。そして美術を好きだと回答した学生は、両学部において高収入層に偏っていた。また音楽についても、商学部の権力志向のクラスター1, 2 から、音楽が好きだと答えた 32 人中 25 人が出ている。しかし所得に関しては特に高所得層に偏るわけではなく、学部全体と同じ分布状況であった。

ちなみに今回のアンケート調査では測っていないが、“美”と“宗教”という分野も価値志向的精神作用尺度にはあり、酒井・久野の分析では“美”は美術・音楽の教科と相関が高く、“宗教”は社会科・国語・英語とある程度の相関がみられた。酒井たちの検証で使われた教科は、英語、数学、国語、理科、社会科、音楽、美術、体育の 8 教科で、そのなかに道徳・宗教という教科が入っていないので、商学部で見られた理数系が道徳・宗教の科目も好むという傾向の確認は出来なかった。しかし歴史的に西洋の科学者たちが神の真理の探究という宗教性を帯びたモチベーションによって、数々の原理の発見をしていったという逸話にも現れた有名な理数と宗教の結びつきが、この調査でも発見できたことは興味深いことであった。

#### 小括

秋学期アンケート調査では、商学部・国際学部ともに所得と生活程度認識について強い相関を示した。ここで春学期のアンケート調査における仮説—商学部はより実務的な学問を学んでいることにより、生活程度の判断にも客観的であり、これが専攻領域の違いにより異なる思考・行動様式が形成される—が否定されたかと思われた。そして先行研究が示す通り、生活程度認識（階層帰属意識）は収入や社会的地位に、より強く影響されるのかと考え、春学期アンケート調査に参加した国際学部生の家庭収入の平均値を求めてみた。しかし、その平均値は春・秋学期アンケート調査の商学部生の家庭収入とほぼ同じであったし、バイト収入でも同じ結果であった。ゆえに経済資本以外の要因が、生活程度認識の客観性には、やはり存在すると考えられた。

そして秋学期アンケート調査に参加した商学部生と国際学部生の、その価値観を検証していくと、商学部は「権力」志向で国際学部は社会性重視であることが明らかになった。とくに商学部の「権力」志向は、高校時代に好きだった科目の選好にも表れており、“権力”と親和性のある科目＝美術を選ぶ学生が権力志向のクラスター内に多く分布していた。

しかし、4つの領域の価値志向的精神作用尺度と2つの達成動機尺度の相関係数を求めれば、“権力”・“社会”の2つの達成動機尺度は強い相関を現した。そして概して国際学

部における相関係数よりも、商学部の方の相関係数の方が強い値を示した。そしてこの両学部の違いは、まさに両学部の特徴である、実務的で将来のビジネスリーダーを目指す商学部と社会的にグローバルに活躍する国際学部、という特色から生まれていると捉えられる。

また、男子の方が所得と生活程度認識の相関係数は強いのに、女子の様に競争的達成動機尺度の平均値や“経済”価値観平均値が所得や生活程度認識とプラスの相関関係にはないことから、男女間で生活満足度・幸福感ないしは生活程度認識の仕方に違いがあるということが分かった。

## 付論：企業家出自の経営史的分析への、「文化資本」概念の適用について

鳥羽欽一郎<sup>21</sup>は、日本の企業家・経営者を生みおとした社会階層とその個人的背景はどのようなものであり、それは時代と共にどのように変化していったのか、ということを目本経済新聞社の『私の履歴書』の経済人編を材料にして分析している。今まで企業家研究は、経済史的アプローチとしては、「明治期日本の工業化を主体的に担った社会層」という視点から、また教育社会学的アプローチとしては、「企業家・経営者の生成に果たした教育の役割」という視点からの研究がなされてきた。

1904年頃から1976年頃に40～60歳であった176人をサンプルとして、出身階層を以下の4つに分けている。

1. 日本のビジネスエリートの出自に関して、その先祖の封建身分はほとんど障害にならず、「均等説」が納得的である。
2. 武士、僧侶、神職、儒者、医者といった知的訓練を受けた人々の間からの輩出が多く、「教育・学歴」との相関関係が考えられる。
3. 明治以降の産業技術は欧米先進国からの移植によって行われ、伝統技術との接点がなかったことから、職人層からの輩出は少ないのだろう。
4. 農民からの出自が多いのは、豪農層では高等教育を受ける機会が高く、また酒造業・金融業を営み、企業経営に進出する機会が少なくなかったと考えられる。

そして以上のことから、サンプルにした世代について言うと、江戸時代の封建身分より、父親の職業に大きく影響を受けることが分かった。かつての武士層・知識層から転化したと見られる官吏・教員・医者などの専門職が企業家の重要な輩出母胎となっているのだ。

また、動機の類型と学歴についても考察しており、そこから5つのタイプに分類している。A) 家業・家運の再興、B) 両親・兄弟の面倒、C) 実業家としての成功・出世、D) 専門分野での活動、日本の将来と国家への貢献、E) 社会に対する責任感・使命感、である。また文章から察するに、この当時高学歴は就職先が保障されており、動機や立身出世欲が、低学歴者より少なかった。

---

<sup>21</sup>鳥羽欽一郎 『産研シリーズ 18 日本における企業家・経営者の研究—『私の履歴書』掲載 167 人のサンプルを中心として—』、早稲田大学産業経営研究所、1988 年

『私の履歴書』から見る家庭環境・文化資本の影響とその類型化（執筆者作成）

- 学歴継承型：高橋 政知(オリエンタルランド、1913 年生)
- 学歴非継承型：江頭 匡一（ロイヤル、1923 年生）
- 学歴上昇型：中内 功（ダイエー、1922 年生）
- 家庭環境順応型：江頭 匡一
- 家庭環境反発型：高橋 政知
- 家業拡張・改変型：中内 功

上記の 6 種類は、『私の履歴書 経済人』（第 35 巻 2004 年刊）に所収の 3 名の成長過程、幼少・少年期の叙述を手掛かりに、その特徴点を執筆者自身がまとめたものである。以上のような類型化が可能になるように、将来の企業家となる人物の生い立ちへ与える「文化資本」の影響力が少なからず、かつ複雑に認められる状況が明らかである。企業家タイプ形成の今後の検証作業に向けて、本論文が注視した「文化資本の影響度」を、その重要要素として新たに付け加えていくことの必要性を提唱したい。

## 結論

フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、階級構造が親から子へと再生産される時、個人のうちに内包された一定のパターンにしたがった行動をとらせる精神的傾向であるハビトゥスが作用しており、これはその人が育った階級などの社会的環境によって形作られるものだとしている。そしてこのハビトゥスは趣味や美的性向も含み、子は親から資産だけでなく、家庭環境を包む教養・美意識などその出身階層相応の嗜好・行動様式も受け継ぐのだと説いている。そしてそのような教養・美的性向を「文化資本」と名付けた。

その後日本でもこの「文化資本」という概念から、余暇行動を学歴（教育階級）や所得（「経済資本」）という変数を使用し分析するような研究が出てきた。しかし執筆者は同じ学歴内でも、専攻学部・学問領域の違いによって余暇行動および行動・思考様式に違いが出るのではないかと考え、このブルデュー流の「文化資本」を敷衍し、大学生が親から専攻領域を継承するか否か、ということと、学部ごとに選好する余暇行動に差異が現れるか、ということテーマとして、関西学院大学7学部生を対象に余暇行動などを質問した独自アンケート調査を交え検証してきた。

第1章ではまず、関西学院大学が実施している「カレッジ・コミュニティ調査」と「学生生活実態調査」を材料に、学生がこれまでどのような余暇行動・消費行動を行ってきたのかを、「文化資本」が関連すると思われる「書籍購入費」や「娯楽教養費」を家庭収入と照らし合わせながら見てきた。「書籍購入費」においては法学部だけが、家庭収入や娯楽費の増減に影響されず、他学部より多い額を維持していた。

余暇行動や趣味を親から継承しているか否かに関しては、親の趣味などの質問はしていないので、測ることはできなかったが、少なくとも大学の学部という場で、その学部の特色・傾向に影響を受けた、その学部らしい学生が形成されていることに間違いはないと考察し得る結果が、春学期、秋学期計2回実施した独自アンケート調査から明らかになった。

春学期調査で一番学部間差異がはっきりと現れたのは、所得（家庭）と生活程度認識（階級帰属意識）の相関の強さであった。商学部が最も相関が強く（.655、 $p < .00$ ）、国際学部が最も弱かった（.263、 $p < .00$ ）。仮説としては、より「理論」的であったり「経済」的思考である方が、生活程度認識が客観的に現実在即ず、というものである。

また18項目の余暇行動について、1年のうちに行う頻度を質問し、各学部ごとにクラスター分析にかけ、そのクラスターごとに所得と生活程度認識の散布図も合わせて考察していった。すると「読書」という余暇行動に関して、1ヵ月1回以上の頻度で読書するとい

う学生は、低い所得層でも生活程度認識を高く回答していることが見て取れた。この「読書」は調査した7学部通过分析を通して見ても、国際学部と文学部以外では低所得層の生活程度認識を上昇させる作用があった。生活程度を中クラスと回答している低所得層の属する余暇頻度クラスターは、国際学部、文学部、理工学部以外では読書をよくしているのが特徴であり、読書と生活程度認識の相関係数もマイナスの値であることから理解できる。

また家庭収入の低さが、学生のバイトを活発化させ余暇活動も活発化させることが分かった。そしてその活発な余暇が生活程度認識を上昇させているようである。しかし国際学部や文学部（1回生および2回生以上）のように学部内の各クラスター全てがそれぞれで余暇行動に活発であったなら、資金的な要素は余暇行動と生活程度認識に関連しない。ゆえに“多趣味”ということが、それらの学部的特徴と解釈される。

春学期調査で明らかにされた所得と生活程度認識の相関係数の差異を解明するため、秋学期調査では最も相関係数に開きが出た商学部と国際学部について、主に価値観を問う追加アンケート調査を実施した。そして、4つの価値志向的精神作用尺度（理論・経済・権力・社会）および達成動機尺度の平均値と家庭の年収、生活程度認識との相関を学部別及び男女別に見てみると、男子の方が強い相関が現れた。また、各価値志向的精神作用の平均値も男子の方が高かった。このことから特に理論分野や経済分野の価値志向尺度で高い値を示すほど、収入と生活程度認識の相関が強まるという仮説が正しいものと検証された。また商学部は男女問わず、4つの価値志向的精神作用や達成動機尺度が互いに相関関係にあり、有意な相関を示した数は商学部の方が断然多かった。

また、4つの領域の価値志向的精神作用尺度の平均値のクラスター分析を行い、その特徴を見ると、商学部のクラスターの共通点は、高い“権力（他者より優位に立ち指導・支配する）”の値であり、国際学部の各クラスターの共通点は高い“社会（他者を愛し共感し献身する）”の値であった。

しかし、社会的精神作用と権力的精神作用は、個人と社会との相互作用を前提としており、“権力”と“社会”の相関が強かったのは必然なのである。今回、商学部生と社会学部生は同じ価値観の側面を権力志向として表したか、社会性として表したかで分かれたのではないだろうか。この違いこそが学部としての特色といえよう。自由記述の所属する学部のイメージについての質問では、商学部では、実務的、優秀な学生が集まっている、自由である、であった。一方の国際学部におけるイメージは、社交的、グローバル志向、個性的、であった。商学部生は将来企業で働いていくことを考えて、リーダーシップや実力発

揮していくことに意欲を今から持っていることが伺える。また国際学生は留学などを通して、海外交流や異文化の中でも通用するコミュニケーション力を鍛えていると察せられる。そのような学部の特徴が今回の結果に表れたといえる。

また、達成動機尺度（自己充実達成動機尺度、競争的達成動機尺度）の検証では、自己充実志向であるほど、ポジティブ・幸福感を感じ、競争意欲が強いほど現状に甘んじず現時点での満足度が低いという仮説を立てた。野心や競争意欲の高さが生活程度認識の低下にも繋がるかと思われたが、有意な結果は得られなかった。

この2つの達成動機尺度はそれぞれ、「他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機—競争的達成動機尺度」と「他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機—自己充實的達成動機」という概念で作成されている。しかし競争的達成動機尺度を単純に、野心の変数と解釈することも、またそれ故にこの幸福感および生活程度認識にマイナスの影響を与えているとは言えない。なぜなら唯一、競争的達成動機尺度平均値と生活程度認識について相関関係のある商学部女子のデータを見ていても、正の相関（.323,  $p < .013$ ）であるからだ。

高校時代に好きだった科目との関連を見ると、商学部は権力と親和性のある美術を、特に権力志向のクラスターが多く好んでいたことが分かった。一方の国際学部はクラスターも多く、好きな科目がそれぞれのクラスターでばらけているところは、余暇行動をクラスター分析した時と同じで、多趣味で個性的で尚且つクラスター間の所得差が表れないという特色を高校時代からある程度備えていたことがうかがえた。そして、文学部1回生と2回生以上のそれぞれの余暇行動クラスターの特色が共通して、クラスターそれぞれが多趣味であるにも関わらず、文学部の1回生の所得と生活程度認識の相関係数（.762,  $p < .00$ ）が文学部2回生以上のそれ（.425,  $p < .00$ ）を大きく上回ったことは、学部入学後に入学以前からもともと持っていた多趣味という特色・特徴が拡充することがうかがえる。

ここからさらに、親の趣味をきく質問も含めて、大学生へのアンケート調査を行い、学歴という変数なしで、余暇行動の嗜好が継承されるのか検証していくことが今後の課題であるが、大学での専攻領域によって、その学部独特の行動・思考様式を学生が身に着けていくプロセスが、今回の調査で明らかになり、今後の余暇行動研究や階層研究、企業家研究に新たに注視すべき視点を加えられたことと考える。





## ～謝辞～

この論文を執筆するに当たり、2度のアンケート調査を通して多くの先生方にご協力をいただいて完成させるに至った。記して厚く御礼を申し上げる（調査実施順）。

経済学部	市川 文彦 先生（指導教員）	2013 年 6 月 10 日実施
理工学部	巳波 弘佳 先生	6 月 10 日実施
商学部	藤澤 武史 先生	6 月 17 日 + 11 月 11 日実施
社会学部	打樋 哲史 先生	6 月 18 日実施
国際学部	田村 和彦 先生	6 月 18 日 + 11 月 11 日実施
法学部	大東 和重 先生	6 月 19, 20 日実施
文学部	市川 文彦 先生（指導教員）	10 月 15 日実施
社会学部	難波 功士 先生	10 月 22 日実施

ポーランド ウッチ大学

吉田 勝一 先生 2012 年 5 月実施

ウクライナ ドネツク工科大学 Japanese Culture Center <Amaterasu>

セルゲイ・ゲラシコフ 先生 2013 年 2-3 月実施

ご協力いただいた、

ロシア 国立海洋大学 ナタリア・ボイコ 先生

トルコ コジャエリ大学 ヌルダン・タシュキラン 先生

さらに本論文を作成するにあたり、指導教授・市川 文彦先生には、主査として本研究の構想段階から完成までのご指導、アドバイスを戴いたと共に、国際調査、学内調査の実施のための調整もして戴いた。論文作成のため、終始、格別のご指導、ご配慮を賜ったことに深謝申し上げます。

副査である藤井 和夫先生には、大学院演習やポーランド研修でのご指導を戴き、

また 2013 年 10 月の修士論文中間報告会で、貴重なご助言を戴いた。同報告会では久保 真先生にも示唆に富んだコメントを頂戴した。両先生へ記して御礼申し上げる。

また社会学や商学の諸分野にまたがるクロス・オーバーな領域を研究するに当たり、社会調査や統計解析の手法につき数々のご教示をいただいた、島村 恭則先生（社会学部）、石淵 順也先生（商学部）へも、御礼申し上げる。

これらの非常に多くの先生方のご協力をいただいた。厚く御礼申し上げるとともに、この学恩を、この論文の研究成果をつうじて、お返しできたら幸いである。

## 参考文献

- 『ARC レポートー経済・貿易・産業報告書ー2012/13 ウクライナ』、ARC 国別情勢研究会、2012 年
- 有馬昌宏 「消費支出と行動実態から見た芸術・文化の需要構造」、『季刊家計経済研究』、2008(夏)、p 79
- 色川卓男 「趣味・娯楽と社会階層メカニズムーブルデュー的視角を利用してー」、『消費生活に関するパネル調査』、(財)家計経済研究所、1997 年、p 247 - 284
- 数土直紀 「学歴移動と階層意識ー継承される階層帰属意識ー」、轟亮 (編)、『2005 年 S S M 調査シリーズ8 階層帰属意識の現在』、2005 年 S S M 調査研究会、2008 年、p 1 - 36
- 『関学生はいま…』(学生生活実態調査報告書)、関西学院大学学生部編、関西学院大学学生部、1989ー1999 年
- 『カレッジ・コミュニティ調査報告書』、関西学院大学総合教育研究室、1991 年ー2012 年
- 酒井恵子、久野雅樹 「価値志向的精神作用尺度の形成」、『教育心理学研究』、1997 年、45 号、p 388 - 395
- シュプランガー・E 『文化と性格の諸類型』、1921/1961 年、(伊勢田耀子訳)、明治図書  
[Lebensformen “Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit” 1921]
- 鳥羽欽一郎 『産研シリーズ 18 日本における企業家・経営者の研究ー私の履歴書』掲載 167 人のサンプルを中心としてー』、早稲田大学産業経営研究所、1988 年
- 直井道子 「階層意識と階級意識」、富永健一 (編)、『日本の階層構造』、東京大学出版会、1979 年、p 372 - 373
- 『私の履歴書 第 35 巻』日本経済新聞社、2004 年
- フライ・ブルーノ・S 『幸福をはかる経済学』、白石小百合訳、NTT 出版株式会社、2012 年  
[Bruno S. Frey, “Happiness A Revolution in Economics” 2008]
- ピエール・ブルデュー 『ディスタンクシオン I・IIー社会的判断力批判』(石坂 洋

二郎 訳) 藤原書店、1997 年；

[Bourdieu, Pierre, "La distinction : critique sociale du jugements ", Paris,1979]

- ブルデュー・ピエール、ジャン＝クロード・パスロン、『遺産相続者たち—学生と文化』、(戸田清 他訳)、1964/1997 年、藤原書店

[Bourdieu, Pierre et Passeron, Jean-Claud, "Les Héritiers : Les étudiants et la culture", Paris,1964]

- 堀野 緑 「達成動機の構造因子の分析—達成動機概念の再検討」、『教育心理学研究』、1987 年、35 号、p 148 - 154
- 堀野 緑、森 和代 「抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因」、『教育心理学研究』、1991 年、39 号、p 308 - 315
- 前田忠彦 「階層帰属意識と生活満足感」、間々田孝夫(編)『1995 年 SSM 調査シリーズ 6 現代日本の階層意識』、1995 年 SSM 研究会、1998 年、p 89 - 112
- 間々田孝夫 「階層帰属意識」、原純輔(編)、『現代日本の階層構造 ②階層意識の動態』、東京大学出版会、1990 年、p 23 - 45
- 『3 万人調査で読み解く日本の生活者市場』三菱総合研究所、日本経済新聞社、2012 年
- 吉川徹 「「中」意識の静かな変容—階層評価基準の時間的比較分析—」、『社会学評論』、1999 年、50 号 (2・76) p 216 - 230

# 関西学院大学 大学生の生活と消費に関するアンケート

こんにちは、経済学研究科院生の田中理恵と申します。この度は、学生の皆様にアンケートにご協力いただきたく参りました。私は院で、大学生の余暇活動と消費に関する研究を行っており、その一環でアンケートを実施しております。この結果は私の研究以外に利用することはございませんので、ご協力いただくと幸いです。

I. 最初にゲームを行います。あなたは拾った1万円のうち自分の好きな金額 $X$ 円を、友人Aに与えることを提案します。この時友人Aがそれを受け入れれば、あなたの取り分は $1万 - X$ 円で相手の取り分は $X$ 円です。しかし相手がその提案を拒否した場合、2人とも1円ももらえません。さて、あなたはいくらを相手にあげますか？

相手に、( ) 円を提示する。

II. あてはまるものに ○ をしてください。

Q1. 今後就く仕事や働き方に関してお聞きします。

仕事は程々で自分や家族の時間を優先する。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
社会貢献できる仕事に就く。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
お金持ちになる。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
地元や地域密着型の仕事に就く。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
海外勤務ができる仕事に就く。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
自分のやりたいこと、特技を仕事にする。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
同僚との人間関係も家族と同程度に重視する。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
実力を発揮し、責任ある仕事をする。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
仕事に集中し出世していきたい。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない
生活に困らない程度の経済力で良い。	そうする・	ややそうしたい・	どちらともいえない・	あまりそうしたくない・	全くそうしたくない



IV. あなたの大学生生活に関してお聞きします。

Q 1. あなたが大学生活で特に重視していることは何ですか。2つ以内で答えてください。

- |            |              |               |
|------------|--------------|---------------|
| ① 知識や技術の習得 | ④ クラブ・サークル活動 | ⑦ 交友・交際関係を深める |
| ② 教養を身につける | ⑤ ボランティア活動   | ⑧ 特に目的なし      |
| ③ 学歴を得る    | ⑥ 海外交流       |               |

Q 2. あなたの学生生活はどの程度充実していると思いますか。

- ① とても充実している
- ② まあまあ充実している
- ③ どちらとも言えない
- ④ あまり充実していない
- ⑤ まったく充実していない

Q 3. 今の学部を選択するにあたって、特に影響したものは何ですか。2つ以内で選んでください。

- |               |                |              |
|---------------|----------------|--------------|
| ① 自分自身の興味関心   | ④ 友人・先輩の助言     | ⑦ 受験合否の結果    |
| ② 親の勧め        | ⑤ 友人・知り合いがいるから | ⑧ 勉強が楽しそうだから |
| ③ 親の出身学部を意識して | ⑥ 昨今の社会状況から鑑みて | ⑨ その他        |

V. あなた自身とご家族について、フェイスシートのご記入をお願いします。

Q 1. 学部：( ) 学部 ※ 複数分野専攻制 (MDS) の方は副専攻を→ ( ) 学部

学年：( ) 回生

年齢：( )

性別： 男 女

※ 留学生の方は出身国の記入をお願いします。( )

Q 2. あなたは現在、大学へ自宅から通っていますか、それとも下宿中ですか。

1. 自宅

2. 下宿

Q 3. あなたは現在、アルバイトをしていますか。していたとしたら、1週間のうち平均して何時間ぐらい働いていますか。

- |                              |
|------------------------------|
| 1. アルバイトをしている。 → 1週間に約( ) 時間 |
| 2. アルバイトをしていない。              |

Q 4. アルバイトやお小遣いなどによる、1ヶ月のあなたの収入は大体いくらくらいですか。

- |         |           |
|---------|-----------|
| ① 1万円以内 | ⑧ 7~8万円   |
| ② 1~2万円 | ⑨ 8~9万円   |
| ③ 2~3万円 | ⑩ 9~10万円  |
| ④ 3~4万円 | ⑪ 10~11万円 |
| ⑤ 4~5万円 | ⑫ 11~12万円 |
| ⑥ 5~6万円 | ⑬ 12~13万円 |
| ⑦ 6~7万円 | ⑭ 13万円以上  |

Q 5. その1ヶ月の収入の中から、おおよそ何%を遊興費にまわし、何%を貯蓄にまわしていますか。

遊興費：(            ) %      貯蓄：(            ) %
---

Q 6. あなたの家庭での家計支持者の方の年収はどれくらいですか。

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| ① 400万円未満       | ⑦ 7. 700万円～850万円未満    |
| ② 400万円～450万円未満 | ⑧ 8. 850万円～1000万円未満   |
| ③ 450万円～500万円未満 | ⑨ 9. 1000万円～1200万円未満  |
| ④ 500万円～550万円   | ⑩ 10. 1200万円～2000万円未満 |
| ⑤ 550万円～600万円未満 | ⑪ 11. 2000万円～3000万円   |
| ⑥ 600万円～700万円未満 | ⑫ 12. 3000万円以上        |

Q 7. あなたの家庭の生活程度は世間一般と比べて、どれくらいの位置にいますか。

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 1. 上の上 | 4. 中の上 | 7. 下の上 |
| 2. 上の中 | 5. 中の中 | 8. 下の中 |
| 3. 上の下 | 6. 中の下 | 9. 下の下 |

Q 8. あなたの家庭の家計支持者の方の職業は次のうちのどれですか。

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| ① 農林水産業                | ⑥ 管理職（企業、官庁の部長以上） |
| ② 自営の商・工業              | ⑦ 主婦              |
| ③ 事務系の勤務               | ⑧ リタイア            |
| ④ 作業系の勤務               | ⑨ 学生、無職           |
| ⑤ 専門・自由業（医者、弁護士、研究職など） |                   |

Q 9. あなたのご両親の最終学歴で勉強された分野は、次のうちのどれですか。

- |      |       |         |        |         |        |        |       |
|------|-------|---------|--------|---------|--------|--------|-------|
| お父様： | ① 文学  | ② 歴史    | ③ 外国語  | ④ 経済学   | ⑤ 商学   | ⑥ 法学   | ⑦ 政治学 |
|      | ⑧ 社会学 | ⑨ 理工・数学 | ⑩ 国際   | ⑪ 家政科   | ⑫ 教育   | ⑬ 医学   |       |
|      | ⑭ 薬学  | ⑮ 看護    | ⑯ 農水産学 | ⑰ 高校普通科 | ⑱ スポーツ | ⑲ 知らない |       |

- |      |       |         |        |         |        |        |       |
|------|-------|---------|--------|---------|--------|--------|-------|
| お母様： | ① 文学  | ② 歴史    | ③ 外国語  | ④ 経済学   | ⑤ 商学   | ⑥ 法学   | ⑦ 政治学 |
|      | ⑧ 社会学 | ⑨ 理工・数学 | ⑩ 国際   | ⑪ 家政科   | ⑫ 教育   | ⑬ 医学   |       |
|      | ⑭ 薬学  | ⑮ 看護    | ⑯ 農水産学 | ⑰ 高校普通科 | ⑱ スポーツ | ⑲ 知らない |       |

ご協力くださり、本当にありがとうございました。



Questionnaires on your ordinary life : *Nation's Name*

My name is Rie Tanaka, Kwansei Gakuin University student in Japan. In this time, I would like to demand you to answer this paper, because I'm interested in life of the Russian people. These are simple questions. I won't use these dates at anything except my study. I thank you for your cooperation in advance.

**Your student's situation**

1) Grade year :            1                      2                      3                      4                      Graduate Student

2) Sex :            Male                      Female                      3) Age :            (                      )

4) Please check off your faculty (field). If you major several fields, please write "1", "2" .... : at your major field.

- |                   |  |
|-------------------|--|
| (    ) Literature | (    ) Computer                          |
| (    ) Geography  | (    ) Law                               |
| (    ) History    | (    ) Politics                          |
| (    ) Philosophy | (    ) Human Sciences ?                  |
| (    ) Languages  | (    ) Technologies / Engineering        |
| (    ) Economics  | (    ) Sciences / Biomedical / Chemistry |
| (    ) Management | (    ) International field               |

○ Questions about your life-style

5) Where from do you go to the university?

(            ) From own home                      (            ) Dormitory

6) Did you work (Full-time job) before university?

(            ) No            (            ) Yes → How many years did you work ? (                      )

7) Do you have any part-time job or full-time job?

(            ) Part-time job                      (            ) Full-time job                      (            ) Nothing

8) How about do you think of working abroad in your carrier?

Strong hate . . . . Hate . . . . No idea . . . . Hope . . . . Strong hope

9) Do you use SNS (Social Networking Service)? And how often do you check/write on it?

(    ) No                      (    ) less than once a month                      (    ) 2~3 times a month  
(    ) once a week                      (    ) 2~3 times a week                      (    ) every day

10) How many SNS do you use?

( ) Nothing Yes→( )

○ Questions about leisure behavior

1) As for leisure (off-time) or free time, how much times do you spend your time on?

Please write following mark of frequency in the blank of applicable items.

Frequency

① Nothing	② 2~3 times a year	③ 4~6 times a year	④ once a month
⑤ 2~3 times a month	⑥ once a week	⑦ 2~3 times a week	⑧ every day

( ) Going to Concert ( ) Watching movie(at theater) ( ) TV game  
( ) Playing a sport ( ) Playing music instrument  
( ) Visit to museum ( ) Driving ( ) Going on a picnic  
( ) Shopping ( ) Eating at restaurant...etc  
( ) Travel in your country ( ) Travel in abroad  
( ) Communicating through Internet ( ) Reading books ( ) Studying

2) How much money do you spend on leisure in a month?

( )

3) Do you drink alcohol? And if you answer "Yes", how often do you drink?

( ) No ( ) less than once a month ( ) 2~3 times a month  
( ) once a week ( ) 2~3 times a week ( ) every day

4) Have you recently changed your leisure or hobby, as economy decline?

( ) No Yes→( Before →After )

5) How do you spend time after school?

( )

6) What things or hobbies have you been influenced by your parent ?

( )

I would like to thank you so much for your cooperation. Спасибо большое.

Rie Tanaka (Japan)  
Kwansei Gakuin University  
Economics Faculty  
E-Mail : cud72568@kwansei.ac.jp

# 関西学院大学大学生の余暇と価値観に関するアンケート

ここにちは、経済学研究科院生の田中理恵と申します。この度は、学生の皆様にアンケートにご協力いただきたく参りました。私は院で、大学生の余暇活動と消費に関する研究を行っており、その一環でアンケートを実施しております。この結果は私の研究以外に利用することはございませんので、ご協力いただけると幸いです。

- I. あなたは国際学部の中のどの学問領域、研究コースに属していますか？

学問領域（ ） 研究コース（ ）

- II. あなたと国際学部の関係・イメージについてお聞きします。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 「あなたは典型的な国際学部の人だね」というような事を言われたら、その表現は当たっている、つまりあなたを適切に表現していると思いますか？それとも外れていると思いますか？

全く適切でない

どちらともいえない

非常に適切である

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

2. あなたはほかの人からどの程度典型的な「国際学部の人」と思われていると思いますか。

1            2            3            4            5            6            7

3. 「あなたは典型的な国際学部の人だね」と言われたら良い感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？

1            2            3            4            5            6            7

4. あなたの国際学部に対する所属意識は強い方ですか、弱い方ですか。

1            2            3            4            5            6            7

5. あなたは国際学部にプライドを感じますか？

1            2            3            4            5            6            7

6. あなたの考えや行動に影響を与えた人が、国際学部内に何人いますか？

1            2            3            4            5            6            7

7. 「自分は国際学部の人間なんだなあ」と実感することがありますか？

1            2            3            4            5            6            7

8. あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が国際学部に属していることによくふれる方ですか？

1            2            3            4            5            6            7

9. あなたは国際学部にとどれくらい愛着を感じていますか？

1            2            3            4            5            6            7

10. あなたはほかの国際学部のメンバーが好きな方ですか、嫌いな方ですか？

1            2            3            4            5            6            7

11. あなたはほかの国際学部メンバーにどれくらい親近感を感じますか？

1            2            3            4            5            6            7

12. あなたは入学後、国際学部よりほかの学部の魅力を感じていますか？ そしてそれはどこの学部ですか？

1            2            3            4            5            6            7

学部

13. あなたの学部のイメージはどのようなものですか？自由にお書きください。

( )

14. 入学後、学部での勉強・交流から影響を受けて自分の考え方・ものの捉え方が変化したと感じますか？

1. 全く思わない    2. あまり思わない    3. どちらともいえない    4. ややそう思う    5. とても思う

15. この学部の学問分野に対する興味関心を大学前から持ち、この学部を選びましたか？

No      Yes →そしてどのような理由・経験から興味関心を持ちましたか？ 2個以内で答えてください。

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| ① 学校での授業・勉強から  | ⑥ 本（小説・図鑑・資料など）を読んで           |
| ② 学校の先生の薫陶     | ⑦ 何か参加したこの分野に関連するセミナーやイベント    |
| ③ 親の職業・趣味に関連して | ⑧ 世の中で起こっている事象・ニュースなどから       |
| ④ 親戚・身近な人からの影響 | ⑨ 将来の就職への備えとして                |
| ⑤ 海外旅行・留学      | ⑩ その他（                      ） |

16. 高校時代好きだった or 興味を持っていた or 得意だった科目は何ですか？ いくつでも答えてください。

- |      |      |       |         |      |                          |
|------|------|-------|---------|------|--------------------------|
| ① 国語 | ④ 数学 | ⑦ 地理  | ⑩ 政治・経済 | ⑬ 美術 | ⑯ 道徳・宗教                  |
| ② 古典 | ⑤ 物理 | ⑧ 日本史 | ⑪ 現代社会  | ⑭ 音楽 | ⑰ その他↓                   |
| ③ 英語 | ⑥ 化学 | ⑨ 世界史 | ⑫ 倫理    | ⑮ 体育 | （                      ） |

III. 日頃のあなたのものの感じ方・考え方・興味関心  
などについてお聞きします？

1. 自分の思考の筋道に飛躍や矛盾がないか確認しながら考えを進める。

あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	5

2. 複雑なものの中から、法則性や規則性を見つけ出すことに興味がある。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 試験勉強等では丸暗記は避け、事柄の本質や原理を理解しようとする。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. より正しいものの見方・考え方はないと常に追求している。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 一度疑問を持ったら、納得のいく説明にたどり着くまで、簡単にはあきらめない。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. あいまいなこと、わからないことがあってもさほど気にしない。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. よく理解できないことがあると、頭がすっきりするまで考え込む。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 自分の予想外のことが起きると、すぐにその原因・理由を考える。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 事態を分析したり推理したりするのは面倒くさいと思う。

10. 分からないことがあると、辞書や辞典で調べて確認する。その際インターネットを使う？ → Yes No

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

11. 物の仕組みや仕掛けがどうなっているのか、興味を持つ方だ。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

12. あまり重要でないことにも、つい手間暇をかけてしまう。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

13. わずかな空き時間、待ち時間も有効に使う。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

14. 転んでもただでは起きない方である。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

15. 目先のことよりも長期的な損得を考えて行動する。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

16. その時々、の目的や状況に応じて、無理のない計画を立てる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
17. 実現しそうにないことに手を出して、失敗することが多い。	1	2	3	4	5
18. 仕事は手順・段取りを考えて、効率よく進めようとする。	1	2	3	4	5
19. 重要な選択をするときは、プラス面・マイナス面を考えて現実的に判断する。	1	2	3	4	5
20. 買いたいものがあるときは、なるべく安売りや割引のチャンスを利用する。	1	2	3	4	5
21. 無駄な時間や労力はなるべく費やしたくない。	1	2	3	4	5
22. 自分にとって役立つもの・便利なものは積極的に活用する。	1	2	3	4	5
23. 得られる結果が同じなら、なるべく手間のかからない方法を選ぼうとする。	1	2	3	4	5
24. 周囲の意向や、その場の雰囲気にならわらずに行動することが多い。	1	2	3	4	5
25. 他人に自分の弱点やもろい面を知られて、付け込まれないように用心している。	1	2	3	4	5
26. 自分の属する集団に自分と異なる主張をする人がいると気になって仕方がない。	1	2	3	4	5
27. グループの中で仕切り役を務めるのは好きな方だ。	1	2	3	4	5
28. 対立する相手と闘ってでも、自分の意志を通そうとする。	1	2	3	4	5
29. 人に指示を出したり、命令するようなことは気が進まない。	1	2	3	4	5
30. 話の流れを自分のペースに持っていくことが好きだ。	1	2	3	4	5
31. 人の上に立つような仕事がしたい。	1	2	3	4	5
32. 人に対して説教をしたくなる時がある。	1	2	3	4	5
33. いかにもうまく相手を説得するかに関心がある。	1	2	3	4	5
34. 周囲の人に影響を与えるような人間でありたい。	1	2	3	4	5
35. 事態を自分の手でコントロールできない立場にいと、もどかしさを覚える。	1	2	3	4	5
36. 人の喜びや悲しみを、心から分かち合いたいと思う。	1	2	3	4	5
37. 仲間と力を合わせて、一つの目標に向かって頑張るのが好きだ。	1	2	3	4	5
38. 相手の話をよく聞いて、気持ちを受け止めようとする方だ。	1	2	3	4	5
39. 困っている人を見ると、放っておけない気持ちになる。	1	2	3	4	5
40. 人と心が通い合った時の喜びは、言葉では言い尽くせない。	1	2	3	4	5
41. 他人の事を深く理解したいとは思わない。	1	2	3	4	5
42. ある人の生き様を深く知って、心から共感を覚えることがある。	1	2	3	4	5
43. 人の役に立てたり、人と助け合えたりすることに、充足感を見出す。	1	2	3	4	5
44. 大切な人のために、尽くすことに喜びを感じる。	1	2	3	4	5
45. あまり人と親密な関係になりたいとは思わない。	1	2	3	4	5
46. 親しい人たちとの結びつきを求める。	1	2	3	4	5
47. 自分が誰かの心を傷つけてしまったことに気付くと、耐えられない気持ちになる。	1	2	3	4	5
48. いつも何か目標を持っていたい。	1	2	3	4	5
49. 物事は他人よりうまくやりたい。	1	2	3	4	5

- |  |   |   |   |   |   |
|--|---|---|---|---|---|
| 50. 決められた仕事の中でも個性を活かしてやりたい。                | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 51. 人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分を活かしたい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 52. 他人と競争して勝つとうれしい。                        | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 53. ちょっとした工夫をすることが好きだ。                     | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 54. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。          | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 55. みんなに喜んでもらえる素晴らしいことがしたい。                | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 56. 競争相手に負けるのは悔しい。                         | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 57. 何でも手がけたことには最善を尽くしたい。                   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 58. どうしても私は人より優れていたいと思う。                   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 59. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。         | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 60. 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けたくないためだ。            | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 61. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい。                | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 62. 今の社会では強いものが出世をし、勝ち抜くものだ。               | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 63. いろいろなことを学んで自分を深めたい。                    | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 64. 就職する会社は社会で高く評価されるところを選びたい。             | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 65. 成功するということは名誉や地位を得ることだ。                 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 66. 今日一日何をしようか考えることは、楽しい。                  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 67. 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う。                  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 68. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。             | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 69. 世に出て成功したいと強く願っている。                     | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 70. こういうことがしたいなあと思うとわくわくする。                | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

IV. 最後にフェイスシートのご記入をお願いします。

学部：( ) 学部 ※ 複数分野専攻制 (MDS) の方は副専攻を→ ( ) 学部  
 学年：( ) 回生 年齢：( )  
 性別： 男 女 ※ 留学生の方は出身国の記入をお願いします。( )

あなたの家庭での家計支持者の方の年収はどれくらいですか。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| ① 400 万円未満        | ⑦ 700 万円～850 万円未満   |
| ② 400 万円～450 万円未満 | ⑧ 850 万円～1000 万円未満  |
| ③ 450 万円～500 万円未満 | ⑨ 1000 万円～1200 万円未満 |
| ④ 500 万円～550 万円   | ⑩ 1200 万円～2000 万円未満 |
| ⑤ 550 万円～600 万円未満 | ⑪ 2000 万円～3000 万円   |
| ⑥ 600 万円～700 万円未満 | ⑫ 3000 万円以上         |

あなたの家庭の生活程度は世間一般と比べて、どれくらいの位置にいますか。

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 1. 上の上 | 4. 中の上 | 7. 下の上 |
| 2. 上の中 | 5. 中の中 | 8. 下の中 |
| 3. 上の下 | 6. 中の下 | 9. 下の下 |

ご協力くださり、本当にありがとうございました。

# 関西学院大学大学生の余暇と価値観に関するアンケート

こんにちは、経済学研究科院生の田中理恵と申します。この度は、学生の皆様にアンケートにご協力いただきたく参りました。私は院で、大学生の余暇活動と消費に関する研究を行っており、その一環でアンケートを実施しております。この結果は私の研究以外に利用することはございませんので、ご協力いただけると幸いです。

I. あなたは商学部の6つのコースの内、どのコースに所属していますか？

あるいは1, 2年生の方は、どのコースを希望していますか？

( )

II. あなたと商学部の関係・イメージについてお聞きます。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 「あなたは典型的な商学部の人だね」というような事を言われたら、その表現は当たっている、つまりあなたを適切に表現していると思いますか？それとも外れていると思いますか？

全く適切でない

どちらともいえない

非常に適切である

1 2 3 4 5 6 7

2. あなたはほかの人からどの程度典型的な「商学部の人」と思われていると思いますか？

1 2 3 4 5 6 7

3. 「あなたは典型的な商学部の人だね」と言われたら良い感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？

1 2 3 4 5 6 7

4. あなたの商学部に対する所属意識は強い方ですか、弱い方ですか。

1 2 3 4 5 6 7

5. あなたは商学部プライドを感じますか？

1 2 3 4 5 6 7

6. あなたの考えや行動に影響を与えた人が、商学部内に何人いますか？

1 2 3 4 5 6 7

7. 「自分は商学部人間なんだぁ」と実感することがありますか？

1 2 3 4 5 6 7

8. あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が商学部に属していることによくふれる方ですか？

1 2 3 4 5 6 7

9. あなたは商学部にとどれくらい愛着を感じていますか？

1 2 3 4 5 6 7

10. あなたはほかの商学部のメンバーが好きの方ですか、嫌いな方ですか？

1 2 3 4 5 6 7

11. あなたはほかの商学部のメンバーにとどれくらい親近感を感じますか？

1 2 3 4 5 6 7

12. あなたは入学後、商学部よりほかの学部の内容に魅力を感じていますか？そしてそれはどこの学部ですか？

1 2 3 4 5 6 7

13. あなたの学部のイメージはどのようなものですか？自由にお書きください。

( )

学部

14. 入学後、学部での勉強・交流から影響を受けて自分の考え方・ものの捉え方が変化したと感じますか？

1. 全く思わない    2. あまり思わない    3. どちらともいえない    4. ややそう思う    5. とても思う

15. この学部の学問分野に対する興味関心を大学前から持ち、この学部を選びましたか？

No      Yes →そしてどのような理由・経験から興味関心を持ちましたか？ 2個以内で答えてください。

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| ① 学校での授業・勉強から  | ⑥ 本（小説・図鑑・資料など）を読んで           |
| ② 学校の先生の薫陶     | ⑦ 何か参加したこの分野に関連するセミナーやイベント    |
| ③ 親の職業・趣味に関連して | ⑧ 世の中で起こっている事象・ニュースなどから       |
| ④ 親戚・身近な人からの影響 | ⑨ 将来の就職への備えとして                |
| ⑤ 海外旅行・留学      | ⑩ その他（                      ） |

16. 高校時代好きだった or 興味を持っていた or 得意だった科目は何ですか？ いくつでも答えてください。

- |      |      |       |         |      |                          |
|------|------|-------|---------|------|--------------------------|
| ① 国語 | ④ 数学 | ⑦ 地理  | ⑩ 政治・経済 | ⑬ 美術 | ⑯ 道徳・宗教                  |
| ② 古典 | ⑤ 物理 | ⑧ 日本史 | ⑪ 現代社会  | ⑭ 音楽 | ⑰ その他↓                   |
| ③ 英語 | ⑥ 化学 | ⑨ 世界史 | ⑫ 倫理    | ⑮ 体育 | （                      ） |

III. 日頃のあなたのものの感じ方・考え方・興味関心  
などについてお聞きします？

1. 自分の思考の筋道に飛躍や矛盾がないか確認しながら考えを進める。

あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	5

2. 複雑なものの中から、法則性や規則性を見つけ出すことに興味がある。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 試験勉強等では丸暗記は避け、事柄の本質や原理を理解しようとする。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. より正しいものの見方・考え方はないと常に追求している。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 一度疑問を持ったら、納得のいく説明にたどり着くまで、簡単にはあきらめない。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. あいまいなこと、わからないことがあってもさほど気にしない。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. よく理解できないことがあると、頭がすっきりするまで考え込む。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 自分の予想外のことが起きると、すぐにその原因・理由を考える。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 事態を分析したり推理したりするのは面倒くさいと思う。

10. 分からないことがあると、辞書や辞典で調べて確認する。その際インターネットを使う？ → Yes No

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

11. 物の仕組みや仕掛けがどうなっているのか、興味を持つ方だ。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

12. あまり重要でないことにも、つい手間暇をかけてしまう。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

13. わずかな空き時間、待ち時間も有効に使う。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

14. 転んでもただでは起きない方である。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

15. 目先のことよりも長期的な損得を考えて行動する。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

16. その時々、の目的や状況に応じて、無理のない計画を立てる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
17. 実現しそうにないことに手を出して、失敗することが多い。	1	2	3	4	5
18. 仕事は手順・段取りを考えて、効率よく進めようとする。	1	2	3	4	5
19. 重要な選択をするときは、プラス面・マイナス面を考えて現実的に判断する。	1	2	3	4	5
20. 買いたいものがあるときは、なるべく安売りや割引のチャンスを利用する。	1	2	3	4	5
21. 無駄な時間や労力はなるべく費やしたくない。	1	2	3	4	5
22. 自分にとって役立つもの・便利なものは積極的に活用する。	1	2	3	4	5
23. 得られる結果が同じなら、なるべく手間のかからない方法を選ぼうとする。	1	2	3	4	5
24. 周囲の意向や、その場の雰囲気にならわらずに行動することが多い。	1	2	3	4	5
25. 他人に自分の弱点やもろい面を知られて、付け込まれないように用心している。	1	2	3	4	5
26. 自分の属する集団に自分と異なる主張をする人がいると気になって仕方がない。	1	2	3	4	5
27. グループの中で仕切り役を務めるのは好きな方だ。	1	2	3	4	5
28. 対立する相手と闘ってでも、自分の意志を通そうとする。	1	2	3	4	5
29. 人に指示を出したり、命令するようなことは気が進まない。	1	2	3	4	5
30. 話の流れを自分のペースに持っていくことが好きだ。	1	2	3	4	5
31. 人の上に立つような仕事がしたい。	1	2	3	4	5
32. 人に対して説教をしたくなる時がある。	1	2	3	4	5
33. いかにうまく相手を説得するかに関心がある。	1	2	3	4	5
34. 周囲の人に影響を与えるような人間でありたい。	1	2	3	4	5
35. 事態を自分の手でコントロールできない立場にいと、もどかしさを覚える。	1	2	3	4	5
36. 人の喜びや悲しみを、心から分かち合いたいと思う。	1	2	3	4	5
37. 仲間と力を合わせて、一つの目標に向かって頑張るのが好きだ。	1	2	3	4	5
38. 相手の話をよく聞いて、気持ちを受け止めようとする方だ。	1	2	3	4	5
39. 困っている人を見ると、放っておけない気持ちになる。	1	2	3	4	5
40. 人と心が通い合った時の喜びは、言葉では言い尽くせない。	1	2	3	4	5
41. 他人の事を深く理解したいとは思わない。	1	2	3	4	5
42. ある人の生き様を深く知って、心から共感を覚えることがある。	1	2	3	4	5
43. 人の役に立てたり、人と助け合えたりすることに、充足感を見出す。	1	2	3	4	5
44. 大切な人のために、尽くすことに喜びを感じる。	1	2	3	4	5
45. あまり人と親密な関係になりたいとは思わない。	1	2	3	4	5
46. 親しい人たちとの結びつきを求める。	1	2	3	4	5
47. 自分が誰かの心を傷つけてしまったことに気付くと、耐えられない気持ちになる。	1	2	3	4	5
48. いつも何か目標を持っていたい。	1	2	3	4	5
49. 物事は他人よりうまくやりたい。	1	2	3	4	5

50. 決められた仕事の中でも個性を活かしてやりたい。	1	2	3	4	5
51. 人と競争するより、人と比べることができないようなことをして自分を活かしたい。	1	2	3	4	5
52. 他人と競争して勝つとうれしい。	1	2	3	4	5
53. ちょっとした工夫をすることが好きだ。	1	2	3	4	5
54. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。	1	2	3	4	5
55. みんなに喜んでもらえる素晴らしいことがしたい。	1	2	3	4	5
56. 競争相手に負けるのは悔しい。	1	2	3	4	5
57. 何でも手がけたことには最善を尽くしたい。	1	2	3	4	5
58. どうしても私は人より優れていたいと思う。	1	2	3	4	5
59. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。	1	2	3	4	5
60. 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けたくないためだ。	1	2	3	4	5
61. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい。	1	2	3	4	5
62. 今の社会では強いものが出世をし、勝ち抜くものだ。	1	2	3	4	5
63. いろいろなことを学んで自分を深めたい。	1	2	3	4	5
64. 就職する会社は社会で高く評価されるところを選びたい。	1	2	3	4	5
65. 成功するということは名誉や地位を得ることだ。	1	2	3	4	5
66. 今日一日何をしようか考えることは、楽しい。	1	2	3	4	5
67. 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う。	1	2	3	4	5
68. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。	1	2	3	4	5
69. 世に出て成功したいと強く願っている。	1	2	3	4	5
70. こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする。	1	2	3	4	5

IV. 最後にフェイスシートのご記入をお願いします。

学部：( ) 学部 ※ 複数分野専攻制 (MDS) の方は副専攻を→ ( ) 学部  
 学年：( ) 回生 年齢：( )  
 性別： 男 女 ※ 留学生の方は出身国の記入をお願いします。( )

あなたの家庭での家計支持者の方の年収はどれくらいですか。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| ① 400 万円未満        | ⑦ 700 万円～850 万円未満   |
| ② 400 万円～450 万円未満 | ⑧ 850 万円～1000 万円未満  |
| ③ 450 万円～500 万円未満 | ⑨ 1000 万円～1200 万円未満 |
| ④ 500 万円～550 万円   | ⑩ 1200 万円～2000 万円未満 |
| ⑤ 550 万円～600 万円未満 | ⑪ 2000 万円～3000 万円   |
| ⑥ 600 万円～700 万円未満 | ⑫ 3000 万円以上         |

あなたの家庭の生活程度は世間一般と比べて、どれくらいの位置にいますか。

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 1. 上の上 | 4. 中の上 | 7. 下の上 |
| 2. 上の中 | 5. 中の中 | 8. 下の中 |
| 3. 上の下 | 6. 中の下 | 9. 下の下 |

ご協力くださり、本当にありがとうございました。